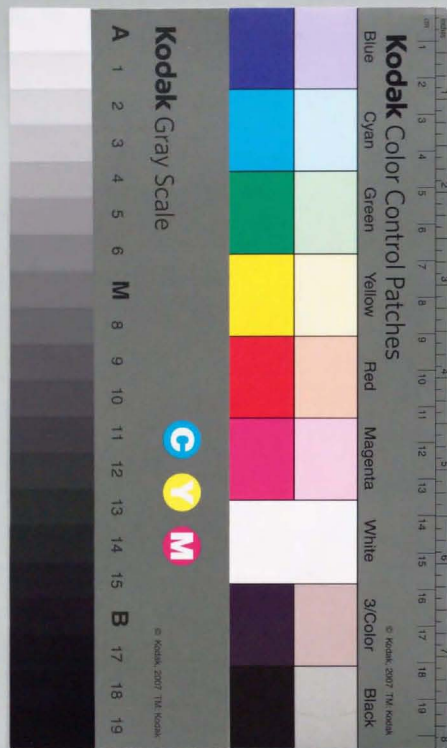


ウィーン市都心部における
タウンスケープのコントロールシステムと
建築デザインとの均衡的共存

——景観評価と住民参加を含む建築許可プロセスの提案——

平成7年5月

三島 伸雄



ウィーン市都心部における
タウンスケープのコントロールシステムと
建築デザインとの均衡的共存

—— 景観評価と住民参加を含む建築許可プロセスの提案 ——

1995年度博士論文

1995年5月1日

三島 伸雄

ウィーン市都心部におけるタウンスケープのコントロールシステムと建築デザインとの均衡的共存

—景観評価と住民参加を含む建築許可プロセスの提案—

Koexistenz von Baufreiheit und Stadtbildkontrolle in der Inneren Stadt Wiens

—Darstellung des Baubewilligungsprozesses, der Arbeitsweise des Beirats fuer Stadtplanung u. Stadtgestaltung und der Zivilpartizipation—

氏 名: 三島伸雄 (MISHIMA Nobuo)

指導教官: 故山田孝助教授、西村幸夫助教授 (主査)

副 査: 森村道美教授、鈴木博之教授

高見沢実助教授、大野秀敏助教授

Wien gehoert zu den Staedten der Welt, in denen "Einheitlichkeit" und "Verschiedenartigkeit" die Stadtgestaltung charakterisieren und das Stadtbild praegen. Im Jahr 1990 wurde im Zentrum der Stadt am Wiener Stephansplatz das "HAUS-HAUS" errichtet. Der Entwurf fuer das Haus stammt von Architekt Hans Hollein. Das "HAUS-HAUS" war Anlass fuer heftige oeffentliche Diskussionen, die hinsichtlich der ungleichen Mitsprache der beteiligten Parteien undemokratisch waren. Eine objektivierende Projekteinschaetzung fand nicht statt. Bezogen auf die Gestaltung eines zeitgemessen Stadtbildes lassen sich dem "HAUS-HAUS" positive wie negative Aspekte abgewinnen. Bei strikter Anwendung des bestehenden Planungsinstrumentariums haette eine Offenlegung des Baubewilligungsverfahrens, eine Darstellung der Vorgangsweise des Fachbeirates fuer Stadtplanung und Stadtgestaltung, die Beachtung zivilpartizipatorischer Planungsverfahren und die Klarlegung des Vorgehens zur Abschaetzung der Stadtbildentsprechung eine Objektivierung der Diskussion auf der Basis korrekt durchgefuehrter Planungsprozesse ermöglicht. Ziel der vorliegenden Dissertation ist es: ①die historische Entwicklung des Instrumentariums der Stadtbildkontrolle als Bestandteil der Bauordnung fuer Wien zu beleuchten. ②die Arbeitsweise des Fachbeirates fuer Stadtplanung u. Stadtgestaltung, die Moeglichkeiten der Zivilpartizipation und der Ablauf eines Baubewilligungsverfahrens zu analysieren. ③die zeitlich räumlichen Veränderungsprozesse spezifisch ausgewählter Häuserfronten zu analysieren. ④die Schaffung und Erhaltung von "Einheitlichkeit" und "Verschiedenartigkeit" im Stadtbild in quantitative Bezüge zu setzen, und schliesslich ⑤die Durchfuehrung eines korrekten Baubewilligungsverfahrens darzustellen.

1. 研究の背景と目的

ウィーンは、世界中の多くの都市の中で、真に対して歴史的に意識を払っている都市の一つである。そのタウンスケープは、連続建築形式¹⁾の建築物が閉鎖型街区を形成することによってつくられている。そして、一見高さ等が揃っているようで「統一的」であるように見えるが、いろいろな建築様式の建物が混在し、建物の規模や屋根の形状、装飾、窓なども建物毎に違っており、変化があり、「統一性」と「多様性」とが共存している。それがこの歴史的古都の魅力でもある。

そのウィーン市のシンボルの存在であるシュテファン教会の前に、1990年建築家ハンス・ホラインによるハース・ハウスが完成した。その都市計画的試みは非常にユニークなものであり、保存地区における「建築の自由」²⁾が広がるようなものであった。しかし一方で、この建築が持つ建築ギャップ・ポラリティーはウィーン市都心部のタウンスケープを大きく変えるものであるという反対も起こった。そして、その合法化の

ためのウィーン州建設法(以下、「建設法」と略す)の改正及びFプラン・Bプランの変更や住民の意見に対する対応は、非常に非民主的に行われ、問題が残った。そのために、今ではハース・ハウスは特殊な事例となりつつある。

もし、この点に関してより実証的な分析と考察を行い、民主的かつ客観的な建築許可システムが機能するための土壌づくりに関する知見が得られれば、新しいデザインの可能性が正しい意味で広がり、上記のような「建築の自由」も全ての建築家に公平に与えられるはずである。従って、ウィーン市都心部におけるタウンスケープ形成のための法的システムのあり方を歴史的事実に基づいて検討し、さらに公共性を促す可能性のある建築物に対しての建築許可を如何に民主的かつ客観的に行うかということについて議論する必要がある。

しかし、ウィーンのタウンスケープに関する研究は、例えばガウグシュ(1976)の形態とその効果に関する研究³⁾やモーザー研究室による空間形態に関する一連の研究⁴⁾があるものの、

制度の運用と運動した研究は保存地区の現況分析¹⁾以外は見られない。そして、我が国における連続建築によるタウンスケープに関する研究は奥(1989)²⁾によるものくらいである。

そこで本論文では、ウィーン市都心部を対象に、ウィーン市都市計画の仕組みとタウンスケープの形成のされ方に関する問題点を見出し、保存地区の中の現代的な建築物や建築像を越えて公共性を犯すような建築物等を許可する場合に、その都市計画的意図と建築許可との客観性及び公平性を如何に担保するべきかということを通じて、民主的に立脚した建築許可のあり方を提案することを主たる目的とする。

2. 研究方法と論文の構成

本論文の研究方法と構成を図1に示す。その内容は以下のようにある。即ち、①ウィーン市都心部のタウンスケープ

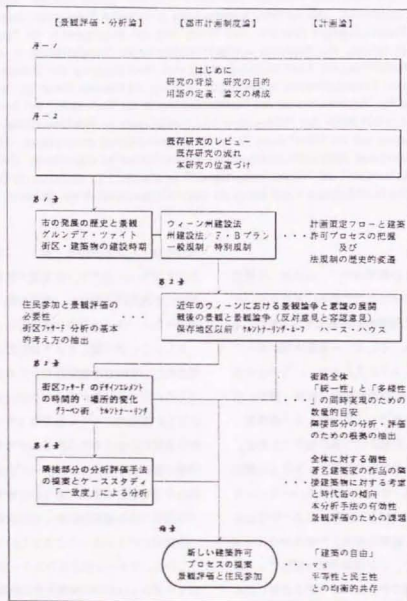


図1 論文の構成

の形成と更新の仕組みをウィーン州建設法を軸に制度的及び歴史的に理解し(第1章)、②その仕組みの中で建設された建築物の建設経緯とそれに対する住民の客観的意見や反対意見とから、ウィーンのまちづくりシステムの課題点を指摘し、さらにタウンスケープを分析・評価する上での考え方を抽出し(第2章)、③その考えに基づいて街区ファサードの分析を行うことによって、ウィーンの街並みの「統一性」と「多様性」との同時実現の目安を導き出し(第3章)、④さらに住民にとっても分かりやすい景観評価手法を構築して、そのケース・スタディを行い(第4章)、⑤最終的に、民主的土壌に立脚して公平性と客観性が担保され、真の意味で「建築の自由」が保証されるような建築許可プロセスを提案する(結章)。

3. 論文の内容

1) タウンスケープ形成におけるウィーン州建設法の役割 (第1章)

第1章では、ウィーン市の都市発展の歴史、建設法による都市計画システムとそれによってコントロールされる建築家の活動、及びその結果形成されてきたウィーン市都心部のタウンスケープについて定性的に考察した。

まず、ウィーン市都心部の発展の歴史については、特にグルンデア・ツァイトに焦点を当て、その時期に形成された都市構造と空間構成とが、現在のウィーン市都心部のタウンスケープの基盤になっていること、旧城壁の内側と外側とでの空間の違い、等を第一区の発展の歴史、街区構成の歴史、建物の建設年代を通じて理解した。

次に、建設法に関しては、建設法における都市計画制度、即ちFプラン(土地利用計画)とBプラン(土地詳細計画)の位置づけ(図2)、計画策定のシステム(図3)と建築許可のプロセス(図4)を整理し、さらに建設法による一般規制とそれを越えることが許される範囲とその事例、保存地区制定の経緯とその内容の変化、その中の特別規制の仕組みと内容、及び保存地区の成果を、特に市役所で得ることが出来た資料と、ヒアリングによって得ることが出来た知識をもとに整理した。その結果、建設法は行政法でありながら、1929年の制定当初からタウンスケープのコントロールに意図をおいた「景観法」であること、その中で建築家の活動をコントロールするために、一般規制と特別規制の枠組みがあり、一般規制では「建築像等」「建築クラス」「外観規定」、特別規制は特に「保存地区」において各種の手法が弾力的に用いられていることが分かった。また、保存地区の制定は、戦災復興期における近代建築による景観破壊からの視覚的空間

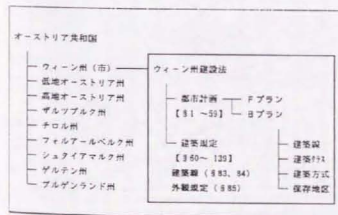


図2 ウィーン州建設法の法的枠組み

の保護を目的としたものであったこと、度重なる改正によりその効果を上げるためのシステムを徐々に構築していったこと、さらにこうした歴史的環境を保ちながら新たな建築・都市空間の可能性を求めていく方向に、その枠組みが移行していること、全体的なシステムが州でありながら市でもあるウィーンのために構築されたものであり、地方自治体としての組織体制の中できめ細かい規制と誘導が可能であること、が分かった。一方で、その運用において客観的かつ民主的な判断を行うためのシステムが不十分であることが指摘できた。

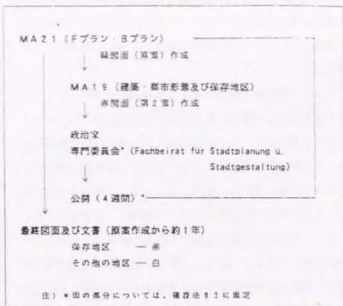
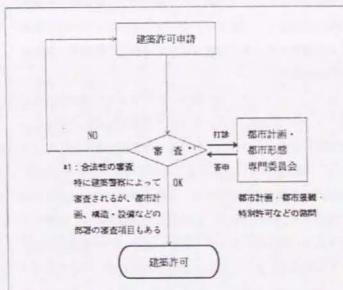


図3 Fプラン・Bプランの策定プロセス



【MA 19 所収のBsp. 1, Prof. Peter Schuchel 氏へのインタビュー及び、建築許可申請における審査員(Prof. Dr. Schuchel)から作成】

図4 建築許可のプロセス

2) 近年の建設活動から見たウィーン市都心部のタウンスケープに関する議論の展開(第2章)

第2章では、具体的な建築プロジェクトを対象に、その建設経緯とそれまでの景観競争を通じて、ウィーン市民がどのように景観を捉えているかを考察した。まず、戦後から保存地区制定の頃までの近代建築を幾つか取り上げ、景観問題が近代化の中で持ち上がったことができたことを確認した。また、その問題は建築家をどうやって選ぶのかということにまで及んでいることが分かった。次に、ハース・ハウスと同様にウィーンの著名建築家が設計し、どちらかという反対されずに受け入れられたケルトナリーング・ホーフについて考察した。ここでは、雑誌と新聞の記事から評価の変化を考察した。

さらに、保存地区制定後約15年後に計画され、ウィーン市民を巻き込んで激しい景観競争が繰り広げられたハース・ハウスを取り上げ、その建設経緯、ハース・ハウス実現のために行われた法改正とFプラン・Bプランの変更(特別許可)との内容(図6参照)、それに対して起こった市民の反対運動と反対意見及び容認意見について整理し、考察を行った。これは、建設前と建設後における各種の意見を、関わった主体が明解になるように注意しながら、建築許可における公文書と、雑誌及び新聞の記事とから抜き出して分析した。このハース・ハウスにおける景観競争は特にウィーン市都心部のタウンスケープに対する象徴的な意見が含まれており、これを整理することによって第3・4章で行う分析における基本的考え方として、「揃える」ということがキーワードであることが理解され、さらに次のような建設法の問題点が具体的に指摘出来た。

即ち、ハース・ハウスの場合、ただでさえ4週間の建築だけでは十分に住民とのコンセンサスを得られるものではないにも関わらず、Fプラン・Bプランの変更⁽¹⁰⁾も、そして法85(5)(保存地区における外観に関する規定)における現代的様式を可能にする改正⁽¹¹⁾も、十分な議論がないまま行われてしまった。それに対して住民の反対運動があり、結局MA 35による調停案によって一段落したが、これも建築家ホラインや市当局にとって有利な方向で行われた。つまり、ウィーン市第1区の真ん中というウィーン市民にとっては最も重要な場所における決定に対して、市民の意志が十分に反映されなかった。しかし、こういう新しい開発はウィーンのタウンスケープにとって必要なのであり、またこの経験を生

かすことが出来れば、絶ての建築家に平等なチャンスと「建築の自由」を与えることができ、さらに民主的な市民社会の形成に役立てることが可能である。以上より、特にウィーン市民にとって重要なタウンスケープの形成と更新に関する建築計画の場合には、当該建築に対する客観的評価と住民参加が建築許可の時点でも行われ、都市計画の変更もできることが、客観的かつ民主的な都市計画システムの構築のために必要であることが指摘できた。また、調停案の重要性も理解できた。

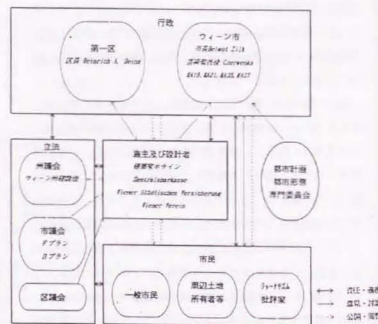
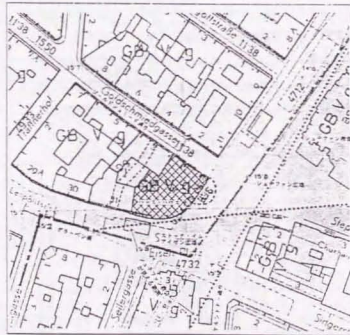


図5 ハース・ハウス建設における各主体の関わり



【出典】KAZI — Flächenwidmungs- und Bebauungsplan, Plankontext Nr. 3951
20. Juni 1989, Pr. 2, 1708/89
図6 ハース・ハウスにかかるFプラン・Bプラン(1989)

3) 街区ファサードのデザインエレメントの場所及び時間による変動分析[街区全体における議論](第3章)

第3章では、以上の知見に基づき、ウィーン市都心部のタウンスケープにおける建築ファサードを客観的に評価するための基礎的知識を得ることを行った。即ち、ウィーン市都心部のタウンスケープの「統一性」と「多様性」を把握し、そこにおける建築家の活動とその役割を位置づけるために、「統一性」と「多様性」のある2つの街区(グラーベン街とケルトナリーング通り)を対象に、その街区ファサードのデザインエレメントの場所と時間による変化について分析を行い、さらにその空間における幾つかの著名建築家の作品(アンカーハウス、ハース・ハウス、ケルトナリーング・ホーフ)について考察を行った。これによって、対象街区における街区ファサードのデザインエレメントの特徴、隣接建築物や同じ街区の他の建築物との立面上の関係、その時間的変遷について、知見を得ることができた。さらに、各デザインエレメントにおける「統一性」と「多様性」との同時実現のための定量的目安を得ることができ、また第4章で行う隣接部分の分析手法を構築するための考え方を導いた⁽¹²⁾。

具体的には、まず「規模」に関する分析は、「平均階高」との比によって行うことが有効であり、それによって全体の関係を把握することが可能になることが示された。次に、ウィーン州建設法による規制の影響が強いものの、「軒高」や「基準階」のようなデザインエレメントによって「統一性」が得られること、「壁面分割長」や「屋根傾斜」の変化によ

て空間的な「多様性」が得られること、そして「統一性」と「多様性」との定量的目安としては、隣接建築物との差が「規模」と「ファサードの分割」に関するデザインエレメントについては「平均階高」の0.5増分、「開口部」の「平均大きさ」については約0.5増分であることなどが導かれた。

また、個々の著名建築家の作品を見ると、その街区ファサードのデザインエレメントの特徴とは、街区空間全体の標準的水準にあるが、幾つかの項目について大幅に突出しており、そうしたものが街区ファサードの「多様性」に貢献し、それらの相乗効果で個性的空間が形成されていることが分かった。



図7 グラーベン街にかかるFプラン・Bプラン(1989)
【出典】KAZI — Flächenwidmungs- und Bebauungsplan, Plankontext Nr. 3951
20. Juni 1989, Pr. 2, 1708/89

表1 グラーベン街のデザインエレメントの場所的変化(1994)

項目	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2037	2038	2039	2040	2041	2042	2043	2044	2045	2046	2047	2048	2049	2050	2051	2052	2053	2054	2055	2056	2057	2058	2059	2060	2061	2062	2063	2064	2065	2066	2067	2068	2069	2070	2071	2072	2073	2074	2075	2076	2077	2078	2079	2080	2081	2082	2083	2084	2085	2086	2087	2088	2089	2090	2091	2092	2093	2094	2095	2096	2097	2098	2099	2100	2101	2102	2103	2104	2105	2106	2107	2108	2109	2110	2111	2112	2113	2114	2115	2116	2117	2118	2119	2120	2121	2122	2123	2124	2125	2126	2127	2128	2129	2130	2131	2132	2133	2134	2135	2136	2137	2138	2139	2140	2141	2142	2143	2144	2145	2146	2147	2148	2149	2150	2151	2152	2153	2154	2155	2156	2157	2158	2159	2160	2161	2162	2163	2164	2165	2166	2167	2168	2169	2170	2171	2172	2173	2174	2175	2176	2177	2178	2179	2180	2181	2182	2183	2184	2185	2186	2187	2188	2189	2190	2191	2192	2193	2194	2195	2196	2197	2198	2199	2200	2201	2202	2203	2204	2205	2206	2207	2208	2209	2210	2211	2212	2213	2214	2215	2216	2217	2218	2219	2220	2221	2222	2223	2224	2225	2226	2227	2228	2229	2230	2231	2232	2233	2234	2235	2236	2237	2238	2239	2240	2241	2242	2243	2244	2245	2246	2247	2248	2249	2250	2251	2252	2253	2254	2255	2256	2257	2258	2259	2260	2261	2262	2263	2264	2265	2266	2267	2268	2269	2270	2271	2272	2273	2274	2275	2276	2277	2278	2279	2280	2281	2282	2283	2284	2285	2286	2287	2288	2289	2290	2291	2292	2293	2294	2295	2296	2297	2298	2299	2300	2301	2302	2303	2304	2305	2306	2307	2308	2309	2310	2311	2312	2313	2314	2315	2316	2317	2318	2319	2320	2321	2322	2323	2324	2325	2326	2327	2328	2329	2330	2331	2332	2333	2334	2335	2336	2337	2338	2339	2340	2341	2342	2343	2344	2345	2346	2347	2348	2349	2350	2351	2352	2353	2354	2355	2356	2357	2358	2359	2360	2361	2362	2363	2364	2365	2366	2367	2368	2369	2370	2371	2372	2373	2374	2375	2376	2377	2378	2379	2380	2381	2382	2383	2384	2385	2386	2387	2388	2389	2390	2391	2392	2393	2394	2395	2396	2397	2398	2399	2400	2401	2402	2403	2404	2405	2406	2407	2408	2409	2410	2411	2412	2413	2414	2415	2416	2417	2418	2419	2420	2421	2422	2423	2424	2425	2426	2427	2428	2429	2430	2431	2432	2433	2434	2435	2436	2437	2438	2439	2440	2441	2442	2443	2444	2445	2446	2447	2448	2449	2450	2451	2452	2453	2454	2455	2456	2457	2458	2459	2460	2461	2462	2463	2464	2465	2466	2467	2468	2469	2470	2471	2472	2473	2474	2475	2476	2477	2478	2479	2480	2481	2482	2483	2484	2485	2486	2487	2488	2489	2490	2491	2492	2493	2494	2495	2496	2497	2498	2499	2500	2501	2502	2503	2504	2505	2506	2507	2508	2509	2510	2511	2512	2513	2514	2515	2516	2517	2518	2519	2520	2521	2522	2523	2524	2525	2526	2527	2528	2529	2530	2531	2532	2533	2534	2535	2536	2537	2538	2539	2540	2541	2542	2543	2544	2545	2546	2547	2548	2549	2550	2551	2552	2553	2554	2555	2556	2557	2558	2559	2560	2561	2562	2563	2564	2565	2566	2567	2568	2569	2570	2571	2572	2573	2574	2575	2576	2577	2578	2579	2580	2581	2582	2583	2584	2585	2586	2587	2588	2589	2590	2591	2592	2593	2594	2595	2596	2597	2598	2599	2600	2601	2602	2603	2604	2605	2606	2607	2608	2609	2610	2611	2612	2613	2614	2615	2616	2617	2618	2619	2620	2621	2622	2623	2624	2625	2626	2627	2628	2629	2630	2631	2632	2633	2634	2635	2636	2637	2638	2639	2640	2641	2642	2643	2644	2645	2646	2647	2648	2649	2650	2651	2652	2653	2654	2655	2656	2657	2658	2659	2660	2661	2662	2663	2664	2665	2666	2667	2668	2669	2670	2671	2672	2673	2674	2675	2676	2677	2678	2679	2680	2681	2682	2683	2684	2685	2686	2687	2688	2689	2690	2691	2692	2693	2694	2695	2696	2697	2698	2699	2700	2701	2702	2703	2704	2705	2706	2707	2708	2709	2710	2711	2712	2713	2714	2715	2716	2717	2718	2719	2720	2721	2722	2723	2724	2725	2726	2727	2728	2729	2730	2731	2732	2733	2734	2735	2736	2737	2738	2739	2740	2741	2742	2743	2744	2745	2746	2747	2748	2749	2750	2751	2752	2753	2754	2755	2756	2757	2758	2759	2760	2761	2762	2763	2764	2765	2766	2767	2768	2769	2770	2771	2772	2773	2774	2775	2776	2777	2778	2779	2780	2781	2782	2783	2784	2785	2786	2787	2788	2789	2790	2791	2792	2793	2794	2795	2796	2797	2798	2799	2800	2801	2802	2803	2804	2805	2806	2807	2808	2809	2810	2811	2812	2813	2814	2815	2816	2817	2818	2819	2820	2821	2822	2823	2824	2825	2826	2827	2828	2829	2830	2831	2832	2833	2834	2835	2836	2837	2838	2839	2840	2841	2842	2843	2844	2845	2846	2847	2848	2849	2850	2851	2852	2853	2854	2855	2856	2857	2858	2859	2860	2861	2862	2863	2864	2865	2866	2867	2868	2869	2870	2871	2872	2873	2874	2875	2876	2877	2878	2879	2880	2881	2882	2883	2884	2885	2886	2887	2888	2889	2890	2891	2892	2893	2894	2895	2896	2897	2898	2899	2900	2901	2902	2903	2904	2905	2906	2907	2908	2909	2910	2911	2912	2913	2914	2915	2916	2917	2918	2919	2920	2921	2922	2923	2924	2925	2926	2927	2928	2929	2930	2931	2932	2933	2934	2935	2936	2937	2938	2939	2940	2941	2942	2943	2944	2945	2946	2947	2948	2949	2950	2951	2952	2953	2954	2955	2956	2957	2958	2959	2960	2961	2962	2963	2964	2965	2966	2967	2968	2969	2970	2971	2972	2973	2974	2975	2976	2977	2978	2979	2980	2981	2982	2983	2984	2985	2986	2987	2988	2989	2990	2991	2992	2993	2994	2995	2996	2997	2998	2999	3000	3001	3002	3003	3004	3005	3006	3007	3008	3009	3010	3011	3012	3013	3014	3015	3016	3017	3018	3019	3020	3021	3022	3023	3024	3025	3026	3027	3028	3029	3030	3031	3032	3033	3034	3035	3036	3037	3038	3039	3040	3041	3042	3043	3044	3045	3046	3047	3048	3049	3050	3051	3052	3053	3054	3055	3056	3057	3058	3059	3060	3061	3062	3063	3064	3065	3066	3067	3068	3069	3070	3071	3072	3073	3074	3075	3076	3077	3078	3079	3080	3081	3082	3083	3084	3085	3086	3087	3088	3089	3090	3091	3092	3093	3094	3095	3096	3097	3098	3099	3100	3101
----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

4) 隣接部分の分析・評価手法の提案と著名建築家の作品におけるケース・スタディ (第4章)

第4章では、第3章までの結果を踏まえた上で、建築物の隣接ゾーンを客観的に分析・評価する手法を構築し、それをゾーンの著名建築家の作品に適用することによって、その隣接建築物とのデザイン要素がどうなるのかということを街区ファサードのディメンション毎に定量的に分析し、考察を行った。ここでは特に「一致度」によって各建築物の評価を求めたが、それによって、ウィーン市街心部の旧街区ファサードの特徴を十分に理解することができ、景観評価手法への発展の可能性が十分に確認した。

表2 对象建筑物一览表

№	曲名	演奏者	年代
71	Platan Lohkewitz	Giovanna Pertierra Tostani	1953
72	Platan Lohkewitz	Charmy	1953
73	Platan Lohkewitz	Domenica Marconetti	1954
74	Platan Lohkewitz	J. Fischer - Ertach	1955
75	Platan Lohkewitz	Edith Fisch	1955
76	P. Badyany Schöndorn	Am. Lev. - Haksman	1971
77	Platan Klawer	Am. Lev. - Haksman	1971
78	Platan Tokolos	L. Finner, Tr. - Haksman	1983
79	Platan Tokolos	T. Haksman	1984
80	Reinhold	Theophil - Hansen	1973
81	Reinhold	Reinhold Hansen	1975
82	Michael Schumacher	Michael Schumacher	1977
83	Michael Schumacher	Olav Wäpser	1980
84	Michael Schumacher	Olav Wäpser	1981
85	Linthaas	Olav Wäpser	1982
86	Linthaas	Olav Wäpser	1983
87	Linthaas	Olav Wäpser	1984
88	Linthaas	Olav Wäpser	1985
89	Linthaas	Olav Wäpser	1986
90	Linthaas	Olav Wäpser	1987
91	Linthaas	Olav Wäpser	1988
92	Linthaas	Olav Wäpser	1989
93	Linthaas	Olav Wäpser	1990
94	Linthaas	Olav Wäpser	1991
95	Linthaas	Olav Wäpser	1992
96	Linthaas	Olav Wäpser	1993
97	Linthaas	Olav Wäpser	1994
98	Linthaas	Olav Wäpser	1995
99	Linthaas	Olav Wäpser	1996
100	Linthaas	Olav Wäpser	1997
101	Linthaas	Olav Wäpser	1998
102	Linthaas	Olav Wäpser	1999
103	Linthaas	Olav Wäpser	2000
104	Linthaas	Olav Wäpser	2001
105	Linthaas	Olav Wäpser	2002
106	Linthaas	Olav Wäpser	2003
107	Linthaas	Olav Wäpser	2004
108	Linthaas	Olav Wäpser	2005
109	Linthaas	Olav Wäpser	2006
110	Linthaas	Olav Wäpser	2007
111	Linthaas	Olav Wäpser	2008
112	Linthaas	Olav Wäpser	2009
113	Linthaas	Olav Wäpser	2010
114	Linthaas	Olav Wäpser	2011
115	Linthaas	Olav Wäpser	2012
116	Linthaas	Olav Wäpser	2013
117	Linthaas	Olav Wäpser	2014
118	Linthaas	Olav Wäpser	2015
119	Linthaas	Olav Wäpser	2016
120	Linthaas	Olav Wäpser	2017
121	Linthaas	Olav Wäpser	2018
122	Linthaas	Olav Wäpser	2019
123	Linthaas	Olav Wäpser	2020
124	Linthaas	Olav Wäpser	2021
125	Linthaas	Olav Wäpser	2022
126	Linthaas	Olav Wäpser	2023
127	Linthaas	Olav Wäpser	2024
128	Linthaas	Olav Wäpser	2025
129	Linthaas	Olav Wäpser	2026
130	Linthaas	Olav Wäpser	2027
131	Linthaas	Olav Wäpser	2028
132	Linthaas	Olav Wäpser	2029
133	Linthaas	Olav Wäpser	2030
134	Linthaas	Olav Wäpser	2031
135	Linthaas	Olav Wäpser	2032
136	Linthaas	Olav Wäpser	2033
137	Linthaas	Olav Wäpser	2034
138	Linthaas	Olav Wäpser	2035
139	Linthaas	Olav Wäpser	2036
140	Linthaas	Olav Wäpser	2037
141	Linthaas	Olav Wäpser	2038
142	Linthaas	Olav Wäpser	2039
143	Linthaas	Olav Wäpser	2040
144	Linthaas	Olav Wäpser	2041
145	Linthaas	Olav Wäpser	2042
146	Linthaas	Olav Wäpser	2043
147	Linthaas	Olav Wäpser	2044
148	Linthaas	Olav Wäpser	2045
149	Linthaas	Olav Wäpser	2046
150	Linthaas	Olav Wäpser	2047
151	Linthaas	Olav Wäpser	2048
152	Linthaas	Olav Wäpser	2049
153	Linthaas	Olav Wäpser	2050
154	Linthaas	Olav Wäpser	2051
155	Linthaas	Olav Wäpser	2052
156	Linthaas	Olav Wäpser	2053
157	Linthaas	Olav Wäpser	2054
158	Linthaas	Olav Wäpser	2055
159	Linthaas	Olav Wäpser	2056
160	Linthaas	Olav Wäpser	2057
161	Linthaas	Olav Wäpser	2058
162	Linthaas	Olav Wäpser	2059
163	Linthaas	Olav Wäpser	2060
164	Linthaas	Olav Wäpser	2061
165	Linthaas	Olav Wäpser	2062
166	Linthaas	Olav Wäpser	2063
167	Linthaas	Olav Wäpser	2064
168	Linthaas	Olav Wäpser	2065
169	Linthaas	Olav Wäpser	2066
170	Linthaas	Olav Wäpser	2067
171	Linthaas	Olav Wäpser	2068
172	Linthaas	Olav Wäpser	2069
173	Linthaas	Olav Wäpser	2070
174	Linthaas	Olav Wäpser	2071
175	Linthaas	Olav Wäpser	2072
176	Linthaas	Olav Wäpser	2073
177	Linthaas	Olav Wäpser	2074
178	Linthaas	Olav Wäpser	2075
179	Linthaas	Olav Wäpser	2076
180	Linthaas	Olav Wäpser	2077
181	Linthaas	Olav Wäpser	2078
182	Linthaas	Olav Wäpser	2079
183	Linthaas	Olav Wäpser	2080
184	Linthaas	Olav Wäpser	2081
185	Linthaas	Olav Wäpser	2082
186	Linthaas	Olav Wäpser	2083
187	Linthaas	Olav Wäpser	2084
188	Linthaas	Olav Wäpser	2085
189	Linthaas	Olav Wäpser	2086
190	Linthaas	Olav Wäpser	2087
191	Linthaas	Olav Wäpser	2088
192	Linthaas	Olav Wäpser	2089
193	Linthaas	Olav Wäpser	2090
194	Linthaas	Olav Wäpser	2091
195	Linthaas	Olav Wäpser	2092
196	Linthaas	Olav Wäpser	2093
197	Linthaas	Olav Wäpser	2094
198	Linthaas	Olav Wäpser	2095
199	Linthaas	Olav Wäpser	2096
200	Linthaas	Olav Wäpser	2097
201	Linthaas	Olav Wäpser	2098
202	Linthaas	Olav Wäpser	2099
203	Linthaas	Olav Wäpser	2100



写真1 事例番号29(a-s-n91)の隣接部分

具体的には、全体的に「規模」に関するデザイン・エレメントの「一致度」が高く、「装飾」「素材」などの一致度が低いもの、年代別ではばらつきがあり、特に「グリーン・ブタイン」以前の作品においては「装飾」「主要材料」などの「一致度」の方が高く、「規模」に関するものの方が低いことが分かった。そのことから、全体的なバランスの中である程度の「一致度」に達してはいる、空間的な調和が保たれて、「統一性」と「多様性」との間で実現が可能になっていることが考察された。また、第3章で得られた考察と関連した結果として著名建築家の作品について得ることができ、十分に建築家の作品の個性についても押さえることができることが分かった。こうして、隣接部分による分析と評価によって、街区ファードに対する測測とその評価が可能であることが検証された。

この「一激立」による評価手法の今後の課題としては、各デザインエッセンスの重み付けやより細かなデザインカーテンを行う必要があることとが挙げられる。しかし、ここでやっているのは一般住民にも理解しやすく、わかり易いまちづくりにおける目安となる景観評価の考え方の提案であり、特に高度の技術を要するものではない。むしろ、景観評価手法が絶対的なものとして都市計画法や建築誘導の制に存在することを中心とした訳でもない。むしろ、住民参加や専門家集団の参加によって弾力的な空間形成を行う上での指標として、あるいは客観性をある程度確保するための道具として、こうした評価手法が存在することの望ましいものである。特にウィーンと住民参加を重視する街においては、こうした手法と住民参加が法体系的に取られていることでこそ、建築許可の客観性が担保され、真の公平性と「建築の自由」が保証された民主的な社会が形成されたと考えられる。

表3 デザインエレメント別の「一致度」の時代別集計

時代区分	1960年代		1970年代		1980年代		1990年代		2000年代		平均
	1-9	10-17	1-9	10-17	1-9	10-17	1-9	10-17	1-9	10-17	
基礎 基礎設計	0.78	2.19	1.93	0.36	0.75						
	0.60	2.44	1.79	0.39	0.90						119
	0.60	2.25	1.93	1.00	1.15						118
基礎 基礎工事	0.90	2.22	1.42	0.26	0.75						124
	0.90	2.00	1.42	0.26	1.50						139
	0.80	1.73	1.20	0.49	1.42						177
基礎 基礎工事	1.40	1.90	1.70	0.60	0.88						91
	1.20	1.84	1.17	1.00	1.83						101
	0.88	1.77	1.77	2.20	2.31						184
基礎 基礎工事	1.00	1.28	1.28	0.26	0.75						72
	0.90	1.91	0.93	0.30	0.58						76
	1.05	2.18	0.75	1.20	0.43						83
基礎 基礎工事	1.60	2.41	0.67	1.00	0.50						90
	1.10	1.26	0.28	0.60	0.28						53
	1.10	0.50	1.42	1.00	0.20						53
基礎 基礎工事	0.90	2.19	1.42	1.00	0.20						107
	0.90	2.40	0.75	1.00	1.50						107
	1.10	2.00	1.22	1.20	1.20						126

5)新しい建築許可プロセスの提案へ（結章）

結算では、以上述べた犯罪の総合化を図った。即ち、第1章で選定されたウィーン市の都市計画システムに対して、第2章で選定したパス・ハウスのように、建築費を超えることなどの特別な建築行為に、タウンスケープが著しく変えられる、公共性が客観的に評価する場合には、建築許可の時点でもその公共性を客観的に評価し、住民参加によって公共性が認められ、議決案の作成によって都市計画の変更までできるような仕組みを構築することが必要である。ちなみに、ウィーン市都市計画のタウンスケープ中の建築物外観の公共性については、第3章及び第4章を通じて検討し構築された「隣部部分の評価法（一致度）」のような客観的評価手法をその中に取り込むことが考えられる。以下、そのような考え方を反映させるために、図4をベースに、新しい建築許可プロセスの提案を行う（図8）。

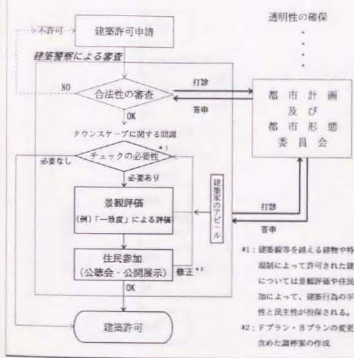


図3 環境評価と住民参加とを含む建築許可プロセスの概要

まず、建築許可申請された建築計画が合法的であるかどうかをチェックする。即ち、既存のFプラン・Bプランと合致しているかどうか、建築構造・建築計画・建築設備・消防設備等の各法規定に合致しているかどうかである。こうしたことが建築警察を始めとする各部署で検討されなければならない。その上で、特別な行為を行っていない建築物については速やかに建築許可が下される。しかし、建築基準を越える建

業行為がある建築物や特別規制を適用しなければならないものについては、景観評価と住民参加が求められる必要がある。この「ゾーニング」建設法は、第1章の結論でも述べたように景観に重きをおく建設法でもあるので、特に景観評価を行う必要があるが、さらにそのほかの環境影響評価を行ってもよい。これをクリアした上で住民の意見を聞き、問題があるならば調整案を作成し、ドラフト・ボードの修正を行い、さらに都市計画及び都市形態委員会のような第三機関のチェックを受けた後に、建築許可が下りるようにする。

以上のような手続きを踏めば、住民の合意が民主的に得られ、客観的に当該建築物の妥当性を確認でき、全ての建築家に平等な機会のある街づくりのシステムが確立できる。そして、真の「建築の自由」が保証され、新しいデザインの可能性も見出せるようになるだろう。これが即ち、「タウンスケープのコントロールと建築デザインとの均衡的共存」である。

4. 今後の課題

最後に、本研究における今後の課題をまとめておく。

まず、本研究において対象として扱った建築物及び街路は、ウィーン市街心部にあって高い評価が高く歴史的な街路と著名建築家の作品ばかりであった。これは、第一にそうした空間にもウィーンの人々のタウンスケープへの思い入れが現れており、他の建築物もそれらの建築から多くの影響を受けていること、第二に本論文が最終的に「建築の自由」とそれに対する建築許可システムに関与して論ずることを目的としたために、建築的な議論を行うことによって議論を明確にできるという点の観点に立脚したからである。つまり本論文は、ウィーンの街並みの一般的な傾向を探ろうとしているのではなく、著名建築家によって作られた建築物がタウンスケープとどのような関係を持っているかを論ずることによって、新しい「個性」と「建築の自由」をどのように理解していけばよいかを検討することに主たる目的があった。しかしウィーンの場合はこのような議論ばかりで形成されているわけではなく、今後より多くの建築物にこうした考え方を普及させていくためには、凡そ建築物と無縁の建築物も含めたより多くの事例について分析する必要がある。それによって、より一般的にウィーン市街心のタウンスケープの問題点を把握し、その空間をいかにコントロールすべきかという点についても知見を得ることが可能になるだろう。

また、本研究においては、分析するデザインエレメントと

して扱った要素が立面に関するものばかりであり、平面（横断）と立面との関係は説明されていない。平面的な構成も合わせて、より総合的な空間構成の手法についても検討する必要がある。それは立面は平面によって多分に影響を受けるからである。

さらに、我が国のタウンスケープと比較検討することが考えられる。これによってそれぞれのタウンスケープの持つ長所と短所、及びその整備課題などが相対的に議論できるだろう。また、我が国において確立していないタウンスケープの誘導システムを検討することもできる。ウィーン市都心部のタウンスケープは特殊であるという排他的な考えはすべきではない。ウィーンから見れば、日本のタウンスケープが特殊であるかもしれないからである。相互の理解と正しい見解を示すことによってお互いの発展につなげることができるようになるだろう。

【脚注】

- (1)林孝義(1991)「『は、道路が街区という単位を形成するのが街区市街地』とし、それを建築形式と対応して街区型市街地(独立建築形式)と隣接街区市街地(連続建築形式)の大きく二つの基本形に分け、我が国の建築制が独立建築形式のみを想定した規制になっていることに、我が国の都市型住宅の成長が遅れている原因があることを指摘している。
- (2)日室編(1993)は、建築の自由について「封建的な家制から離れて個人の自由が確立したとき土地の所有者が認められ、建築もまた自由な権利を主張した。これが建築の自由(Liberalität)である。しかし、都市全体の構成要素である個体としての建築の自由には限界があることは当然であった。このため建築に対して一定の制限を課すことになる。これが地域制(Zoning)に代表される建築に対する一連の都市計画規制である。」と述べている(参考文献4, p.78)。そして筆者が考えるに、この「建築の自由」とは①用途地域、容積率等に代表される「公権」対「私権」の問題、②日照問題などに代表される「私権」対「私権」の問題、③法律の範囲内で行われる表現(デザイン)の自由に代表される「私権」の問題に分類できる。これらの問題の多くはコントロールするからという点では、その固有な文化・地域の個性と社会文化とがどのように適合しているかという点と、都市全体にどう影響を及ぼすかという点とに集約される。例えば、我が国は自由主義であり、また法的には①②に基ずる合理性の保証がなされてきた。その点に関しては原則的に自由である。一方オーストリアは、自由主義であるが文化的・社会的に社会主義的側面を持っていて、また法的には①②に関しては行政官の裁量による特別許可が認められ、これに関して他レベルで規制されている。
- (3)ウィーン市工科大学モーザー研究室による研究は参考文献4時などがある。
- (4)ウィーン市の都市計画及び都市形態に関する許可を収めている部分はM.A.104。1987年から保存地区に指定された地区の視覚調査を行っている。その成果は1993年にまとめられた。
- (5)建築法を結ぶという建築物の部分に関する従来の規定を大幅に結ぶるシンダウの部分の建築法を可能にするために、380という特別規制がつけ加えられた。その内容は、「地盤面から3m以上の空間を建築家を持つ敷地に付け加える。これより下の空間は、公共の財産とする。」というものである。
- (6)その内容は、「保存地区における新築あるいは既存建築物の改修は、(中略)時代の様式に即って都市景観に調和させるか、あるいは建築様式、建築意匠、建築材料、建物の形態、工務的形態及び色調において、周囲周囲の隣接建築物と釣り合わせなければならない。」というものである。
- (7)具体的には、「平等性」と「多様性」を用いて「統一性」と「多様性」との同時実現の目安を得た。これは以下の理由による。即ち、これらのデータが現実分布であると仮定すると、「平等性・容積率」の際に全容積率の88%が含まれる。従って、その間隔の幅のところで、統計的にやや「統一性」より「統一性」と「多様性」とが共存すると考えられる。ウィーンは比較的「統一性」が顕著な社会であるので、これを目安にしてよいと考えられる。即ち、隣接建築物に対して「容積率」の値を揃えるように考慮して建築物を

デザインすれば、ウィーンの現状くらい「統一性」と「多様性」とを持つ街区ファッド全体の姿を幾何再現することができると考えられ、かつそれが自分の調査としてのウィーンの空間像にも合っている。

(3)そのための考え方は、「統一性」と「多様性」との同時実現のための目安をとると、あるデザインエレメントの隣接建築物との差が2.4以上あると、そのデザインエレメントに関する「統一性」が保たれるというものである。例えば「屋根」に関するデザインエレメントの場合、 \bar{x} は平均屋根の高さである。従ってこの場合は、建築物の平均屋根以上の差があると「統一性」が保たれると考えられる。その分析・評価方法は以下のように構築した。即ち、

$$\begin{aligned} & \text{建築物Xの最高高さ} [H_x] - \text{建築物Yの最高高さ} [H_y] \\ & \text{建築物Xの平均高さ} [H_x] - \text{建築物Yの平均高さ} [H_y] = 2.4 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{① } & \bar{x}_1 = 8 \quad \rightarrow 0.2 \\ \text{② } & \bar{x}_2 = 8.2 \quad \rightarrow 0.3 \\ \text{③ } & \bar{x}_3 = 8.3 \quad \rightarrow 1 \\ \text{④ } & \bar{x}_4 = 1 \quad \text{以上} \end{aligned}$$

とし、①→3、②→2、③→1、④→2として一律に点数をつけた。こうして構築された各デザインエレメントの分析値目標に、各隣接部分について分析を行い、その結果の合計点数を「一致度」とし、建築物の評価を行った。

(3)日室編(1993)は住民参加について、「都市計画の決定手続きに住民参加が欠くことができないことは、民主主義の社会制度のもとでは、もはや自明のことである。(中略)都市計画への住民参加は、計画策定にかなりの時間と労力がかかるというデメリットもあるが、一般市民の意見を取入れるという機会でもある。また、計画の実施段階での協力を受けられるというメリットになるか上回ると考えられる。」とし、さらに、公衆参加の段階、都市計画策定の経緯だけでなく、住民の直接参加の制度化が必要であることも述べている(参考文献4, p.224)。一方、内田編(1981)は、アメリカの政治学者スチュアート・ラングレンによる市民参加の分類(参考文献5, p.21)を用い、市民参加には①市民活動、②市民参加、③選挙参加、④議院の参加とあるとした上で、我が国で取り上げられている「市民参加」は①②のタイプであることを指摘している。そして、市民参加におけるボランティアの発展と市民参加の公共化のたは、③④の方法によって「市民委員会」が組織され、市と住民との対立のクッションとなり、自発的市民活動と組織化となることが今後の発展であることとを、アメリカのデイトン市を事例に挙げて説明している(参考文献6)。これを「市民委員会」は、特別規制の適用や建築法を結ぶ行為に対する公益性や客観性を確保するための住民参加の手段としても有効であると考えられる。

【参考文献】

- ① K. Gmugl, "Ordnung und Gefallen. Ein Versuch zur Bestimmung eines Liberalität und die Beziehung zwischen Gestalt und Raum-Gestaltungsprinzip", Skriptum 5 des Institutes für Gestaltungslehre, TU Wien, 1979
- ② 奥田俊彦「『2次元連続建築物の視覚的評価』都市計画の視覚的評価と並びに心理的発展に関する研究・第4巻」、日本建築学会計画部会研究発表、403号、pp.87-96、1989
- ③ 林孝義「『街区型建築の成立と現行法制度』」、すまいる、no.18, pp.4-3、1991
- ④ 日室編「『都市計画 第3版』、共立出版、1993
- ⑤ F. Kauer, "Charakteristik der Stadtgestalt. Gezeigt am Beispiel Linz", Aufbau 6/1978, Wien, 1979
- ⑥ F. Kauer, R. Meyerhofer u. Wolf-Dieter Freil, "CHARAKTERISTIK DER STADT GESTALT WIEN - Grundlagen fuer Stadterneuerung und Rohbau", Gefordert aus s Mitteln des Bundesministeriums fuer Bauen und Technik(Wohnbauaufsatz), Wien, 1987
- ⑦ Verfasser: K. Gruber, Untersarbeitsreiter: P. Scheuchel, R. Schachel, "WIENER SCHUTZGEBIETE - Bestandsaufnahme und Grundlagenanweisung der Rechtskraft 1987", Magistrat der Stadt Wien, MA10, Wien, 1982
- ⑧ Stuart Lounsbury, ed., "Citizen Participation in America", 1979
- ⑨ 内田編「『市民参加と市民意識』、都市問題研究、第33巻、第3号、pp.14-26、都市問題研究会、1981

【脚注】

ウィーンに留学中は、Univ. Doz. Dr. E. Stancanoniに公共芸術や造園に携わった。また、資料収集にあたっては、Arch. Univ. Prof. H. Hollein及びArch. Univ. Prof. G. Holzmeierにも多くの資料と情報を提供して頂いた。ここに付けて御礼申し上げる。

目次詳細

目次 図表リスト

序-1 はじめに

- | | |
|--------------|----|
| 第1節 研究の背景 | 1 |
| 第2節 研究の目的 | 5 |
| 第3節 用語の定義 | 6 |
| 第4節 論文の内容と構成 | 11 |

序-2 関連研究のレビューと本研究の位置づけ

- | | |
|------------------------------|----|
| 第5節 研究レビューの目的と概要 | 17 |
| 第6節 我が国における景観研究の流れ | 17 |
| 6.6.1 既存研究の分類別概要 | 17 |
| 6.6.2 景観研究の流れ | 23 |
| 第7節 ウィーンにおける景観及び保存地区に関する研究 | 24 |
| 7.7.1 ウィーン工科大学における研究活動 | 24 |
| 7.7.2 ウィーン市MA19の保存地区に関する研究 | 24 |
| 第8節 ウィーン及びオーストリアに関する我が国の研究活動 | 25 |
| 8.8.1 海外学術調査における研究 | 25 |
| 8.8.2 建築に関する研究 | 26 |
| 8.8.3 都市に関する研究 | 26 |
| 序-2のまとめ | 27 |

第1章 タウンスケープ形成におけるウィーン州建設法の法的役割

- | | |
|-------------------------|---|
| 第1節 ウィーン市の発展とウィーン州建設法 | 1 |
| 1.1.1 グルンデア・ツァイトと建設法の成立 | 1 |
| 1) グルンデア・ツァイトの概要 | 1 |

1) グルンデア・ツァイトの概要	1
2) グルンデア・ツァイトの時代区分	3
3) グルンデア・ツァイトの成果と	
低地オーストリア州法	5
4) 都心部における街区と建築物の現状	7
1.1.2 ウィーン州建設法の概要	11
1) ウィーン州建設法の特徴と法的位置づけ	11
2) ウィーン州建設法の成り立ちと変遷	12
3) ウィーン州建設法の内容	13
1.1.3 F・Bプランの策定プロセスと建築許可	15
1) 都市計画及び都市形態専門委員会	15
2) F・Bプランの策定プロセス	16
3) 建築許可プロセス	17
第2節 一般規制と建築家の活動	19
1.2.1 建築線等による規制	19
1) 建築線等とその変遷	19
2) 建築線等を越えて建築できる部分	19
3) エルケア・バルコン	21
1.2.2 建築クラスによる規制	24
1) 建築クラス	24
2) 建築線からの距離に応じた規定	24
3) 建築クラスの変遷	27
1.2.3 外観に関する規定	30
1) 外観に関する規定の内容	30
2) 外観に関する規定の変遷	31
1.2.4 一般規制を越える近年の建築家の活動	32
1) ルーフトップ・リモデリング	32
2) ズバンク・ファボリッテン	34
第3節 保存地区と特別規制	36
1.3.1 保存地区の法的位置づけと変遷の概要	36
1) 保存地区の目的	36
2) 保存地区の変遷とその背景	36
1.3.2 保存地区の指定状況	42
1) 保存地区の指定状況	42
2) 保存地区の位置	42
1.3.3 保存地区における特別規制	44
1) 特別規制の内容	44
2) 特別規制によって許可される空間	45
第1章のまとめ	ウィーン市都市計画制度の把握と課題
	49

第2章 近年の建設活動から見た ウィーン市都心部のタウンスケープに関する議論の展開	55
第1節 戦後の建築活動と都市景観	55
2.1.1 保存地区指定以前の景観論争	56
1) リング道路沿いの開発	56
2) 都市景観配座への移行	59
2.1.2 ケルントナーリングホーフ	61
1) 建設経緯と建築概要	61
2) 景観に対する考慮	62
3) 住民の反応	64
第2節 ハース・ハウスの概要と規制の変化	67
2.2.1 ハース・ハウスの概要	67
1) 建築概要	67
2) 建設経緯	67
3) ホラインのコンセプトと法的問題	68
2.2.2 戦前の建築線	70
1) 区画整理以前の敷地	70
2) 区画整理と建築線の指定	70
2.2.3 戦後の建築線指定とBプランの変更	72
1) 1949年の建築線	72
2) Bプランの変更(1986)	73
3) Bプランの変更(1989)	74
第3節 ハース・ハウスの許可プロセスと景観論争	76
2.3.1 許可のプロセス	76
1) 景観論争に関わった主体	76
2) 計画から竣工までの全体プロセス	77
2.3.2 着工前の市民の意見と市当局の対応	78
1) 第一次案発表後の市民の反応	78
2) 第二次案発表後の意見	79
3) MA35 (一般建築行政) による調整案	82
2.3.3 着工後の住民の意見の変化	86
1) 竣工前の市民の意見	86
2) 竣工後の市民の意見	87
第2章のまとめ	タウンスケープのコントロールにおける 住民参加と客観的景観評価手法の必要性
	91

第3章	街区ファサードのデザインエレメントの 場所及び時間による変動分析（街路全体における議論）	99
第1節	本章の目的と方法論	99
3.1.1	目的	99
3.1.2	研究の方法	99
	1)研究のフローチャート	99
	2)対象街路の抽出	101
	3)データ収集の方法	101
	4)分析の方法	101
3.1.3	街区ファサードのデザインエレメントと分析項目	102
	1)街区ファサードのデザインエレメント	102
	2)分析項目の定義	104
第2節	対象街路の概要と街区ファサードのデータベース	107
3.2.1	グラーベン街（Graben）	107
	1)位置と性格	107
	2)Fプラン・Bプランの変遷	107
	3)現状写真	111
	4)街区ファサードのデータベース	113
3.2.2	ケルントナーリング通り（Kärntnerring）	118
	1)位置と性格	118
	2)Fプラン・Bプランの変遷	118
	3)現状写真	121
	4)街区ファサードのデータベース	121
第3節	街区ファサードのデザインエレメントの分析と建築家の作品	127
3.3.1	グラーベン街の分析	128
	1)規模及びファサードの分割	128
	2)開口部	132
	3)装飾	134
	4)主要材料と色	135
3.3.2	ケルントナーリング通りの分析	137
	1)規模及びファサードの分割	137
	2)開口部	141
	3)装飾	143
	4)主要材料と色	144
3.3.3	対象街路における著名建築家の作品	146
	1)アンカー・ハウス（O.ツァー）	146
	2)ハース・ハウス（H.シュツ）	146
	3)シュツ・ハウス（H.シュツ）	157
第3章のまとめ	「統一性」と「多様性」との同時実現の目安と 隣接部分の分析・評価のための根拠の抽出	159

第4章	隣接部分の分析・評価手法の提案と 著名建築家の作品におけるケーススタディ	155
第1節	本章の目的と方法論	155
4.1.1	目的	155
4.1.2	研究の方法	155
	1)研究のフローチャート	155
	2)対象建築物の抽出方法	158
	3)分析及び評価の方法	158
4.1.3	対象建築物の概要	158
	1)対象建築物	158
	2)対象建築物の位置	160
	3)対象建築物のデータシート	162
第2節	隣接部分の分析手法の提案	167
4.2.1	分析の考え方	167
	1)分析項目	167
	2)分析の考え方	167
4.2.2	分析手法の提案	168
	1)規模	168
	2)ファサードの分割	170
	3)開口部	171
	4)装飾	172
	5)主要材料	173
第3節	「一様性」による隣接部分の分析と建築作品の評価	175
4.3.1	ポイント集計	175
	1)集計とその結果	175
	2)「一様性」の時代別集計	177
4.3.2	分析と作品評価	178
	1)各デザインエレメントについて	178
	2)建築作品の分析と評価	180
	3)「一様性」による隣接部分の 評価に関する可能性	181
第4章のまとめ	景観評価手法確立のための課題	183

結 章	新しい建築許可プロセスの提案へ	187
第1節	前章までのまとめ	187
第2節	現行建築許可プロセスの問題点	190
5.2.1	客観的評価と住民参加の必要性	190
5.2.2	「建築の自由」における平等性と民主性	190
第3節	景観評価と住民参加を含む建築許可プロセスの提案	191
5.3.1	「一致度」と建築許可プロセスにおける景観評価	191
5.3.2	建築許可プロセスにおける住民参加の位置づけ	192
5.3.3	新しい建築許可プロセス	192
5.3.4	今後の課題	194
附 章 1	第3章のグラフ (図3-3-1a~図3-3-8i)	197
附 章 2	第4章の建築データシート (1~29)	215
補 章		247
補章A	ウィーン市都市計画・建築業務関連部署	247
補章B	Fプラン・Bプランの緑図面と赤図面	251
補章C	建築許可申請書	256
補章D	建築許可図面例	260
補章E	ウィーン建築史年表	265
補章F	オーストリアにおける都市計画用語	267
謝 辞		271

図表リスト

序-1. 2		
図0-1	ウィーン市における連続建築形式による市街地の広がり	序 3
図0-2	街区ファサードの定義	序 7
図0-3	タウンスケープの構成要素と要因	序 8
図0-4	時間軸と都市からの距離による市街地の分類	序10
図0-5	論文の構成	序14
表0-1	年毎に見た景観研究の頻度数	序23
第1~4章及び結章		
図1-1-1	ウィーン都市発展の系譜 (1000~1900年)	2
図1-1-2	グルンデア・ツァイト期に第一区で成された事業	6
図1-1-3	ウィーン第一区の街区の形成時期	9
図1-1-4	ウィーン第一区の建築物建設時期	10
図1-1-5	ウィーン州建設法の位置づけ	11
図1-1-6	Fプラン、Bプラン策定のプロセス	17
図1-1-7	建築許可のプロセス	18
図1-2-1	エルケアに関する規定	20
図1-2-2	建築クラスによる建築高さ制限	25
図1-2-3	建物高さと建物輪郭の規定	27
図1-2-4	ルーフトップ・リモデリングの敷地にかかるFプラン・Bプラン	32
図1-2-5	Zバンク・ファボリッテンの敷地にかかるFプラン・Bプラン	34
図1-3-1	保存地区制定のための第一区の建物ファサード調査	37
図1-3-2	1972年法当時の保存地区 (第一区) 図面	39
図1-3-3	1991年時点での指定されている保存地区の分布	43
図1-3-4	特別規制 (B B 1) の例	46
図1-3-5	特別規制 (B B 1) の例	47
図1-3-6	特別規制 (B B 8) の例	47
図1-3-7	特別規制 (B B 6) の例	48
図1-3-8	特別規制 (B B 9) の例	48
図1-4-1	ウィーン州建設法の枠組み	51
図2-1-1	本章で取り上げる建築物の位置	55
図2-1-2	ケルトナーリング・ホーフとその周辺にかかる法規制 (1992年)	63
図2-2-1	1842年のハース・ハウス周辺の敷地割り	70
図2-2-2	1895年の建築線調整計画	71
図2-2-3	1949年におけるシュテファン教会周辺のFプラン・Bプラン	72
図2-2-4	1986年におけるハース・ハウス周辺のFプラン・Bプラン	74
図2-2-5	1989年におけるハース・ハウス周辺のFプラン・Bプラン	75
図2-3-1	ハース・ハウスの景観論争における各主体の関係	76
図3-1-1	第3章のフローチャート	100
図3-1-2	規模に関する分析項目	105
図3-1-3	蛇腹断面図の定義	106
図3-2-1	対象街路の位置	107
図3-2-2	1949年におけるグラーベン街周辺のFプラン・Bプラン	108
図3-2-3	1964年におけるグラーベン街周辺のFプラン・Bプラン	109
図3-2-4	1973年における第一区の保存地区の指定	109
図3-2-5	1975年における第一区の建築行為禁止に関する図面	110
図3-2-6	1986年におけるハース・ハウスのFプラン・Bプラン (案)	110

図3-2-7	1989年におけるグラーベン街周辺のFプラン・Bプラン	111
図3-2-8	1990年におけるケルトナールンク通りの建築規制	119
図3-2-9	1991年におけるオベラ座周辺のFプラン・Bプラン	119
図3-2-10	1997年におけるオベラ座周辺のFプラン・Bプラン	120
図3-2-11	1992年におけるケルトナールンク通りのFプラン・Bプラン	120
図3-3-1a	グラーベン街の「規模」の変化[1994] — 高さの絶対値 —	131
図3-3-2a	グラーベン街の「規模」の変化[1975] — 高さの絶対値 —	131
図3-3-3a	グラーベン街の「規模」の変化[1955] — 高さの絶対値 —	131
図3-3-4a	グラーベン街の「規模」の変化[1914] — 高さの絶対値 —	131
図3-3-1g	グラーベン街の「開口部」の変化[1994]	133
図3-3-2g	グラーベン街の「開口部」の変化[1975]	133
図3-3-3g	グラーベン街の「開口部」の変化[1955]	133
図3-3-4g	グラーベン街の「開口部」の変化[1914]	133
図3-3-1h	グラーベン街の「蛇腹」の変化[1994] — 絶対値 —	134
図3-3-1j	グラーベン街の主要材料の色彩傾向分布[1994]	135
図3-3-6a	1/200スケールの「規模」の変化[1975] — 高さの絶対値 —	139
図3-3-8a	1/200スケールの「規模」の変化[1914] — 高さの絶対値 —	139
図3-3-5d	1/200スケールの「ファード」の変化[1994] — 高さの絶対値 —	140
図3-3-6d	1/200スケールの「ファード」の変化[1975] — 高さの絶対値 —	140
図3-3-7d	1/200スケールの「ファード」の変化[1955] — 高さの絶対値 —	140
図3-3-8d	1/200スケールの「ファード」の変化[1914] — 高さの絶対値 —	140
図3-3-5g	1/200スケールの「開口部」の変化[1994]	142
図3-3-6g	1/200スケールの「開口部」の変化[1975]	142
図3-3-7g	1/200スケールの「開口部」の変化[1955]	142
図3-3-8g	1/200スケールの「開口部」の変化[1914]	142
図3-3-5h	1/200スケールの「蛇腹」の変化[1994] — 絶対値 —	143
図3-3-5j	1/200スケールの主要材料の色彩傾向分布[1994]	145
図4-1-1	第4章のフローチャート	157
図4-1-2	第一区に存在する対象建築物の位置	160
図4-1-3	第一区以外の対象建築物の位置	161
図4-1-4	建物データシートの内容	162
図4-1-5	隣接部分の写真データシートの内容	162
図4-2-1	規模に関する分析の考え方	169
図4-2-2	カラー・イメージ・スケール	174
図4-3-1	カラー・イメージ・スケール上における色彩傾向分布	175
図5-3-1	景観評価と住民参加を含む建築許可プロセスの提案	193
表1-1-1	グレンデア・ツァイトのプロジェクトとその建設時期	4
表1-1-2	ウィーン州建設法の変遷(年表)	12
表1-1-3	ウィーン州建設法の内容(1976年法)	13
表1-1-4	Fプラン・Bプランの規定内容(1976年法)	14
表1-1-5	都市計画及び都市形態に関する専門委員会の委員とその所属	15
表1-3-1	保存地区の指定状況	42
表1-3-2	特別規制の分類(第一区において)	45
表2-1-1	ケルトナールンク・ホーフの概要	61
表2-2-1	ハース・ハウスの概要	67
表2-2-2	ハース・ハウスの建設経緯	68
表2-3-1	ハース・ハウス竣工までの全体プロセス	77
表2-3-2	周辺住民の反対意見とMA35の対応	83
表3-1-1	タウンスケープの構成要素の分類	104
表3-2-1	グラーベン通りのデザインエレメント(1994年)	114

表3-2-2	グラーベン通りのデザインエレメント(1975年)	115
表3-2-3	グラーベン通りのデザインエレメント(1955年)	116
表3-2-4	グラーベン通りのデザインエレメント(1914年)	117
表3-2-5	ケルトナールンク通りのデザインエレメント(1994年)	123
表3-2-6	ケルトナールンク通りのデザインエレメント(1975年)	124
表3-2-7	ケルトナールンク通りのデザインエレメント(1955年)	125
表3-2-8	ケルトナールンク通りのデザインエレメント(1914年)	126
表3-3-1	グラーベン街における「規模」の平均値の時間的変化	128
表3-3-2	1994年のグラーベン街の「規模」及び「ファード」の分割に関するデザインエレメントの「平均値との差/平均階高」の標準偏差	130
表3-3-3	「開口部」に関するデザインエレメントの時間的変化(グラーベン街)	132
表3-3-4	グラーベン街の「蛇腹断面量」の時間的変化	134
表3-3-5	グラーベン街の各建築物の主要材料の色(マンセル値のヒストグラムへの置換対応表)	135
表3-3-6	ケルトナールンク通りにおける「規模」の時間的変化	137
表3-3-7	ケルトナールンク通りの1994年の「規模」及び「ファード」の分割に関するデザインエレメントの「平均値との差/平均階高」の標準偏差	139
表3-3-8	開口部の分析項目の時間的変化(ケルトナールンク通り)	141
表3-3-9	ケルトナールンク通りにおける「蛇腹断面量」の時間的変化	143
表3-3-10	1/200スケールの各建築物の主要材料の色(マンセル値のヒストグラムへの置換対応表)	144
表4-1-1	第4章の対象建築物リスト	159
表4-3-1	対象建築物と隣接建築物との隣接部分の分析結果	176
表4-3-2	各景観要素に関する「一致度」の時代別集計	177
写真1-2-1	歴史的建築物のエルデア(第一区)	23
写真1-2-2	20世紀初頭のバルコン	23
写真1-2-3	建築線等及び建築クラススの規制緩和例	29
写真1-2-4	ルーフトップ・リモデリング平面図	33
写真1-2-5	ルーフトップ・リモデリング内部	33
写真1-2-6	Zバンク・ファボリッテン	35
写真1-2-7	Zバンク・ファボリッテン立面図	35
写真2-1-1	マリット・ホテル	57
写真2-1-2	ヒルトンホテル	57
写真2-1-3	ウィーン大学法学部	58
写真2-1-4	旧シュタイヤー・ハウス	58
写真2-1-5	ケルトナールンク・ホーフ	63
写真2-2-1	ハース・ハウス第1次案模型	69
写真2-2-2	ハース・ハウス第2次案模型	69
写真2-2-3	初代ハース・ハウス	71
写真2-2-4	第二代ハース・ハウス	72
写真2-2-1	グラーベンの現状写真	112
写真3-2-2	ケルトナールンクの現状写真	122
データシート1	Palais Lobkowitz	163
データシート17a	Wienzeilehäuser	164
データシート20	Looshaus	165
データシート29	Haas Haus	166

附章 1

図3-3-1a	グラーベン街の付加価値	(規模) の変化[1994]	— 高さの絶対値 —	197
図3-3-2a	グラーベン街の付加価値	(規模) の変化[1975]	— 高さの絶対値 —	197
図3-3-3a	グラーベン街の付加価値	(規模) の変化[1955]	— 高さの絶対値 —	197
図3-3-4a	グラーベン街の付加価値	(規模) の変化[1914]	— 高さの絶対値 —	198
図3-3-1b	グラーベン街の付加価値	(規模) の変化[1994]	— 平均に対する割合 —	197
図3-3-2b	グラーベン街の付加価値	(規模) の変化[1975]	— 平均に対する割合 —	198
図3-3-3b	グラーベン街の付加価値	(規模) の変化[1955]	— 平均に対する割合 —	198
図3-3-4b	グラーベン街の付加価値	(規模) の変化[1914]	— 平均に対する割合 —	198
図3-3-1c	グラーベン街の付加価値	(規模) の変化[1994]	— 平均との差/平均階高 —	199
図3-3-2c	グラーベン街の付加価値	(規模) の変化[1975]	— 平均との差/平均階高 —	199
図3-3-3c	グラーベン街の付加価値	(規模) の変化[1955]	— 平均との差/平均階高 —	199
図3-3-4c	グラーベン街の付加価値	(規模) の変化[1914]	— 平均との差/平均階高 —	199
図3-3-1d	グラーベン街の付加価値	(ファード) の変化[1994]	— 高さの絶対値 —	200
図3-3-2d	グラーベン街の付加価値	(ファード) の変化[1975]	— 高さの絶対値 —	200
図3-3-3d	グラーベン街の付加価値	(ファード) の変化[1955]	— 高さの絶対値 —	200
図3-3-4d	グラーベン街の付加価値	(ファード) の変化[1914]	— 高さの絶対値 —	200
図3-3-1e	グラーベン街の付加価値	(ファード) の変化[1994]	— 平均に対する割合 —	201
図3-3-2e	グラーベン街の付加価値	(ファード) の変化[1975]	— 平均に対する割合 —	201
図3-3-3e	グラーベン街の付加価値	(ファード) の変化[1955]	— 平均に対する割合 —	201
図3-3-4e	グラーベン街の付加価値	(ファード) の変化[1914]	— 平均に対する割合 —	201
図3-3-1f	グラーベン街の付加価値	(ファード) の変化[1994]	— 平均との差/平均階高 —	202
図3-3-2f	グラーベン街の付加価値	(ファード) の変化[1975]	— 平均との差/平均階高 —	202
図3-3-3f	グラーベン街の付加価値	(ファード) の変化[1955]	— 平均との差/平均階高 —	202
図3-3-4f	グラーベン街の付加価値	(ファード) の変化[1914]	— 平均との差/平均階高 —	202
図3-3-1g	グラーベン街の付加価値	(開口部) の変化[1994]	— 開口部 —	203
図3-3-2g	グラーベン街の付加価値	(開口部) の変化[1975]	— 開口部 —	203
図3-3-3g	グラーベン街の付加価値	(開口部) の変化[1955]	— 開口部 —	203
図3-3-4g	グラーベン街の付加価値	(開口部) の変化[1914]	— 開口部 —	203
図3-3-1h	グラーベン街の付加価値	(蛇腹) の変化[1994]	— 絶対値 —	204
図3-3-2h	グラーベン街の付加価値	(蛇腹) の変化[1975]	— 絶対値 —	204
図3-3-3h	グラーベン街の付加価値	(蛇腹) の変化[1955]	— 絶対値 —	204
図3-3-4h	グラーベン街の付加価値	(蛇腹) の変化[1914]	— 絶対値 —	204
図3-3-1i	グラーベン街の付加価値	(蛇腹) の変化[1994]	— 平均に対する割合 —	205
図3-3-2i	グラーベン街の付加価値	(蛇腹) の変化[1975]	— 平均に対する割合 —	205
図3-3-3i	グラーベン街の付加価値	(蛇腹) の変化[1955]	— 平均に対する割合 —	205
図3-3-4i	グラーベン街の付加価値	(蛇腹) の変化[1914]	— 平均に対する割合 —	205
図3-3-5a	ハルトナッゲ通りの付加価値	(規模) の変化[1994]	— 高さの絶対値 —	206
図3-3-6a	ハルトナッゲ通りの付加価値	(規模) の変化[1975]	— 高さの絶対値 —	206
図3-3-7a	ハルトナッゲ通りの付加価値	(規模) の変化[1955]	— 高さの絶対値 —	206
図3-3-8a	ハルトナッゲ通りの付加価値	(規模) の変化[1914]	— 高さの絶対値 —	206
図3-3-5b	ハルトナッゲ通りの付加価値	(規模) の変化[1994]	— 平均に対する割合 —	207
図3-3-6b	ハルトナッゲ通りの付加価値	(規模) の変化[1975]	— 平均に対する割合 —	207
図3-3-7b	ハルトナッゲ通りの付加価値	(規模) の変化[1955]	— 平均に対する割合 —	207
図3-3-8b	ハルトナッゲ通りの付加価値	(規模) の変化[1914]	— 平均に対する割合 —	207
図3-3-5c	ハルトナッゲ通りの付加価値	(規模) の変化[1994]	— 平均との差/平均階高 —	208
図3-3-6c	ハルトナッゲ通りの付加価値	(規模) の変化[1975]	— 平均との差/平均階高 —	208
図3-3-7c	ハルトナッゲ通りの付加価値	(規模) の変化[1955]	— 平均との差/平均階高 —	208
図3-3-8c	ハルトナッゲ通りの付加価値	(規模) の変化[1914]	— 平均との差/平均階高 —	208
図3-3-5d	ハルトナッゲ通りの付加価値	(ファード) の変化[1994]	— 高さの絶対値 —	209
図3-3-6d	ハルトナッゲ通りの付加価値	(ファード) の変化[1975]	— 高さの絶対値 —	209
図3-3-7d	ハルトナッゲ通りの付加価値	(ファード) の変化[1955]	— 高さの絶対値 —	209

図3-3-8d	ハルトナッゲ通りの付加価値	(ファード) の変化[1914]	— 高さの絶対値 —	209
図3-3-5e	ハルトナッゲ通りの付加価値	(ファード) の変化[1994]	— 平均に対する割合 —	210
図3-3-6e	ハルトナッゲ通りの付加価値	(ファード) の変化[1975]	— 平均に対する割合 —	210
図3-3-7e	ハルトナッゲ通りの付加価値	(ファード) の変化[1955]	— 平均に対する割合 —	210
図3-3-8e	ハルトナッゲ通りの付加価値	(ファード) の変化[1914]	— 平均に対する割合 —	210
図3-3-5f	ハルトナッゲ通りの付加価値	(ファード) の変化[1994]	— 平均との差/平均階高 —	211
図3-3-6f	ハルトナッゲ通りの付加価値	(ファード) の変化[1975]	— 平均との差/平均階高 —	211
図3-3-7f	ハルトナッゲ通りの付加価値	(ファード) の変化[1955]	— 平均との差/平均階高 —	211
図3-3-8f	ハルトナッゲ通りの付加価値	(ファード) の変化[1914]	— 平均との差/平均階高 —	211
図3-3-5g	ハルトナッゲ通りの付加価値	(開口部) の変化[1994]	— 開口部 —	212
図3-3-6g	ハルトナッゲ通りの付加価値	(開口部) の変化[1975]	— 開口部 —	212
図3-3-7g	ハルトナッゲ通りの付加価値	(開口部) の変化[1955]	— 開口部 —	212
図3-3-8g	ハルトナッゲ通りの付加価値	(開口部) の変化[1914]	— 開口部 —	212
図3-3-5h	ハルトナッゲ通りの付加価値	(蛇腹) の変化[1994]	— 絶対値 —	213
図3-3-6h	ハルトナッゲ通りの付加価値	(蛇腹) の変化[1975]	— 絶対値 —	213
図3-3-7h	ハルトナッゲ通りの付加価値	(蛇腹) の変化[1955]	— 絶対値 —	213
図3-3-8h	ハルトナッゲ通りの付加価値	(蛇腹) の変化[1914]	— 絶対値 —	213
図3-3-5i	ハルトナッゲ通りの付加価値	(蛇腹) の変化[1994]	— 平均に対する割合 —	214
図3-3-6i	ハルトナッゲ通りの付加価値	(蛇腹) の変化[1975]	— 平均に対する割合 —	214
図3-3-7i	ハルトナッゲ通りの付加価値	(蛇腹) の変化[1955]	— 平均に対する割合 —	214
図3-3-8i	ハルトナッゲ通りの付加価値	(蛇腹) の変化[1914]	— 平均に対する割合 —	214

附章 2

テナット 1	Palais Lobkowitz	215
テナット 3	Palais Liechtenstein	216
テナット 4	Stadtpalais des Prinzen Eugen	217
テナット 5	Palais Batthyany-Schoenborn	218
テナット 6	Palais Kinsky	219
テナット 7	Palais Ferstel	220
テナット 8	Palais Todesco	221
テナット 9	Palais Epstein	222
テナット 10	Rudolfshof	223
テナット 11	Kulissen-und Dekorationsdepot der Hoftheater	224
テナット 12	Wiethaus Schottenring	225
テナット 13a	Wiethaus Stadiongasse	226
テナット 13b	Wiethaus Stadiongasse	227
テナット 14	Landerbank	228
テナット 15	Wiethäuser Rennweg	229
テナット 16	Ankerhaus	230
テナット 17a	Wienzeilehäuser	231
テナット 17b	Wienzeilehäuser	232
テナット 18	Wiethaus Steggasse	233
テナット 19	Zacherlhaus	234
テナット 20	Looshaus	235
テナット 21	Wiethäuser Doblergasse	236
テナット 22	ZSK Marienhilf-Neubau	237
テナット 23	Apartment Neulingasse	238
テナット 24	Zentralsparkasse Favoriten	239
テナット 25a	Wohnhaus Einsiedlergasse	240
テナット 25b	Wohnhaus Einsiedlergasse	241

テクト26 Hundertwasserhaus	242
テクト27a Wohnhaus Schrankenberggasse	243
テクト27b Wohnhaus Schrankenberggasse	244
テクト28 Wohnhaus Guspendorferstraße	245
テクト29 Haas Haus	246

補査

図A-1 ウィーン市当局の組織図	247
図B-1 緑図面の例	253
図B-2 赤図面の例	255
図E-1 ウィーン建築史年表	266
写真D-1 Palais Lobkowitz建築許可図面（立面図）	261
写真D-2 Palais Lobkowitz建築許可図面（平面図）	261
写真D-3 Anker Haus<Otto Wagner> 建築許可図面（立面図）	262
写真D-4 Anker Haus<Otto Wagner> 建築許可図面（立面図）	262
写真D-5 Anker Haus<Otto Wagner> 建築許可図面（断面図）	262
写真D-6 Anker Haus<Otto Wagner> 建築許可図面（平面図）	262
写真D-7 Loos Haus<Adolf Loos> 建築許可図面（立面図）	263
写真D-8 Loos Haus<Adolf Loos> 建築許可図面（立面図）	263
写真D-9 Loos Haus<Adolf Loos> 建築許可図面（断面図）	263
写真D-10 Loos Haus<Adolf Loos> 建築許可図面（平面図）	263
写真D-11 Wohnhaus Schrankenberggasse<Rob Krier>建築許可図面（立面図）	264
写真D-12 Wohnhaus Schrankenberggasse<Rob Krier>建築許可図面（平面図）	264
写真D-13 Wohnhaus Schrankenberggasse<Rob Krier>建築許可図面（立断面図）	264
写真D-14 Wohnhaus Schrankenberggasse<Rob Krier>建築許可図面（断面図）	264

序 - 1

はじめに

序 - 1 は じ め に

第1節 研究の背景

我々は常日頃街を見ながら生活している。「見る」という行為は、その他の感覚と同じように、我々に多くの情報を与えてくれる。その視覚的情報は、他の感覚と連動して我々に判断する材料ときっかけを与えてくれるが、視覚的情報はそのダイナミックさと即時性のために、他の感覚情報をも左右し、我々の判断に影響を及ぼす。従って、その街が美しいか美しくないか、醜いか醜くないか、そしてそこに感じられる歴史や人間性をも含めた視覚的情報は、我々の生活や価値観を左右する非常に重要な問題である。それらは、そこに住む人間の感覚に強烈に働きかけ、他の感覚まで左右することさえあり得る。都市における美の問題、即ちタウンスケープを如何に扱うべきかを検討する必要がある。

我が国における景観への取り組みはここ20年間で活発化し、多くの成果を挙げるに至った。近代化への反省のもと、神戸市を始めとして、景観条例が定められ、景観賞による表彰などの啓蒙活動も行われ、周辺環境への調和のための意識の拡大が図られてきた。景観に関する研究も盛んに行われている。しかしながらそこには、スクラップ・アンド・ビルドを繰り返すだけで、街の景観が歴史的なストックにはならないという日本の街づくりの仕組みの根本的問題がある⁽¹⁾。まちづくりの論理をどう考え組み立てるべきか、我が国の全ての都市に共通する課題である。

一方で、「建築の自由」⁽²⁾の問題がある。それは、(1)用途地域、容積率などに代表される「公権」対「私権」の問題、(2)日照問題などに代表される「私権」対「私権」の問題、(3)法律の範囲内で行われる表現（デザイン）の自由などに代表される「私権」の問題に大別することが出来る。これらの問題をどのようにコントロールするかということはその国あるいは地域の自由化と社会化がどのように進んでいるかということと、法体系がどのようなになっているかということに集約される。例えば我が国は自由主義であり、また法的には(1)(2)については合法性の確認がなされればよく、(3)については原則的に自由である。一方ウィーンは自由主義ではあるが文化的に社会主義的側面も持っていて、また法的には(1)(2)については行政官の裁量による特別許可が認められ、(3)については法レベルでも規制されている。

そのような国ごとの事情はあるが、個々の建物が勝手に自己主張すると都市全体がバラバラでまとまりのない空間になり、全ての建物が画一的で統一的なものになると無味乾燥な空間になるのは明らかである。その一方で、何方を是とし、何方を非とするかは、これまた国または地域毎の文化性・民族性・風土性それから人々の価値観によっており、一概に決定するわけにもいかない。そこには人間社会のジレンマが存在する。しかし、そのジ

レンマは、真の意味での民主的法治社会の確立と建築家を始めとする専門家による積極的な提案が受け入れられる社会環境の形成とによって解決することができると考えられる。即ち、民主的合意形成を図る場を設定し、まちづくりを国や地域の特性に合わせた形でコントロールすることである。それは、個々の権利や自由な発想が受け入れられる環境づくりとそれを明文化したルールづくりである。それによって、周辺住民をも含めた議論が行われて、民主主義に則った合意形成が行われ、新しいデザインの可能性も生まれてくる。そのように民主的な解決の場が設けられ、法制度を含めたシステムが確立し、そして都市の文脈から読み取られた都市空間の多様性と統一性との微妙なバランスが反映された客観的なルールをそのまちづくりシステムの中に組み込むことが出来れば、「建築の自由」を快く受け入れられる環境が整えられ、最終的に地域の特性にあったタウンスケープの「多様性」と「統一性」が達成された均衡の共存空間が実現すると考えられる。

さてウィーンは、世界中の多くの都市の中で、美に対して歴史的に意識を払っている都市の一つである。その魅力は、伝統的かつ蓄積的にウィーンらしい「統一性」と「多様性」とが形成されてきたところにあると考えられる。それは例えば、以下のようなウィーンの都市としての発展の歴史の中に見て取れる。

即ち、13世紀頃より神聖ローマ帝国の首都となり、その市街地内ではその権威を飾るかの如く、バロック、ロココ、新古典主義などのクラシック建築が建設された。19世紀後半のグレンデア・ツァイトには、近代化の対応のためにリンク道路が建設され、オット・ワグナー²²、テオフィル・ハンゼン、ゼンパーらが中心となって、フランツ・ヨーゼフⅡ世のもと、帝国の威信をかけた都市の大改造が行われた。カミロ・ジッテ²³は、そうした都市の芸術的なあり方に対する啓蒙者として、ウィーン都市構造の改造に鋭い批判を込めながらウィーンの都市計画を先導していった。そうして形成されたウィーン市都心部には、王宮や国会議事堂等の国家施設、オペラ座や美術館等の文化施設、庶民のための都市住宅が投資され、ドナウ川の治水工事、橋梁の建設、鉄道網の整備等の都市基盤整備も行われた。現在のウィーン州建設法（以下、「建設法」と略す）の大本となる法制度もこの頃に明文化され、街並みを意識した街づくりのためのシステムづくりが行われた。こうした仕組みと街の形態は、現在のウィーンの都市の中に脈々と受け継がれている。

さらに戦後の戦災復興期には、ウィーンも他の多くの西欧諸都市と同様に数多くの近代建築が建設されたが、そうしたことに對する反省から1973年には保存地区が制定され、都心部における建築活動を凍結し、歴史的景観の保存を都市計画的に行うようになった。そして記念物や伝統的建造物の調査もおこなわれた。このように、歴史的な文脈を如何に扱うべきかという議論が活発化してきている。

こうしてウィーン市都心部における街づくりを概観すると、それは伝統的に、1928年に設立されたC I A Mの思想と対立するものであったことが分かる。すなわち、C I A Mの場合は、緑、太陽、空間を享受することができ「公園の中の建築」を目指したが、ウィーン市都心部の場合は伝統的市街地の形成原理を踏襲し、連続建築形式を主とした街区型市街地¹³（こうした市街地のタウンスケープを、以下「連続建築によるタウンスケープ」と略す）を指向していたのである（図0-1参照）。これは街路沿いに連続したキャンパス（壁面）が都市計画的に用意され、建築家がそのキャンパスの担当する部分（敷地）に平面的かつ立体的な変化をつけながら絵を描いていき、街並みが形成され更新されて

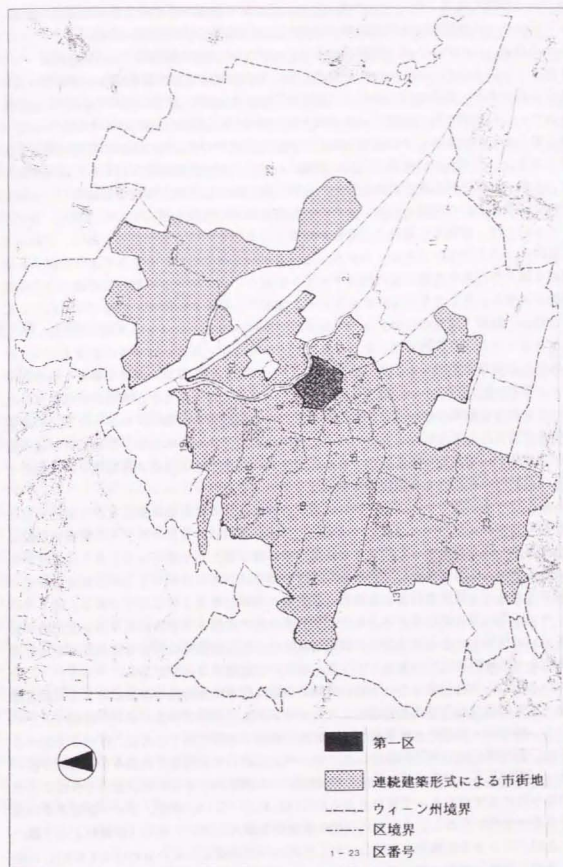


図0-1 ウィーン市における連続建築形式による市街地の拡がり

るという構図である。ウィーンでは、そのように街の景観を歴史的ストックとして蓄積していくシステムが既に19世紀後半から育て上げられてきていたといえる。

そのウィーン市のシンボリック的存在であるシュテファン教会の前に、1990年建築家ハンス・ホラインによるハース・ハウスが完成した。その建築の都市計画的試みは非常にユニークなものであり、保存地区における「建築の自由」が広がるようなものであった。しかし一方で、この建築が持つ建築ヴォキャブラリーはウィーン市都心部のタウンスケープを大きく変えるものであるという反対も起こった。そしてその合法化のための建設法の改正及びDプラン・Bプランの変更や住民の意見に対する対応は非民主的に行われ、問題が残った。それは、民主的に都市計画を策定したり、建築物の公共性に関する議論を行うための環境の未整備という問題であり、それは法制度自身の問題点も孕んでいる。即ち、ウィーンにおいては、建築家の個性と芸術性が尊重される歴史的な土壌があり、かつ、それらを客観的かつ民主的にコントロールするシステムが一見確立しているようでありながら、建築線を越える行為や外観に現代的なデザインを行うことに対する客観的な評価手法や市民参加システム、そしてそれに対するアペールなどが、明快に法制度に位置づけられていないために、結局「建築の自由」とその公平性が担保されていないという問題である。

ハース・ハウスの事例では、そうしたウィーン市の建築・都市に関する法制度と街づくりシステムの問題が噴出した。それはタウンスケープにおける非常に特殊な事例であり、ウィーン市第一区の中心という特別な場所における問題ではあったが、それだけにタウンスケープにおける建築の自由や住民反対運動などの問題が顕著に現れ、ウィーン独自の建築事情を如実に示してもいた。こうして今では、ハース・ハウスの建設を契機に再び建設活動が活発化し、法制度も改正され、都心部の街並み保全と都市構造の再編成という相反する二つの問題の解決へと都市の課題が移行しつつある。

しかしながら、そのハース・ハウスにおける問題に対する反省は残念ながらもまだ十分にされていない。ハース・ハウスは建築的・都市計画的に非常にユニークで実験的な試みであったにもかかわらず、このままでは単なる特殊事例として終わってしまう可能性がある。もし逆に、この点について実証的な検討を行えば、新しいデザインの可能性も正しい意味で広がり、「建築の自由」も全ての建築家に公平に与えられるはずである。従って、ウィーン市都心部におけるタウンスケープ形成のための法的システムのあり方を歴史的事実に基づいて検討し、さらに公共性に関する議論の必要な建築物に対する建築許可を如何に民主的かつ客観的に行うべきかということについて議論する必要がある。

このように19世紀後半という早い時期から近代化という時代の要請に対する対応と歴史的・芸術的街並みの形成と更新がシステムチックに行われていたウィーンの街づくりについて、歴史的・制度的・定量的かつ実証的に分析し考察を行うことは、序-2で述べるように、我が国においては勿論のことで、ウィーンにおいても既存の街並みを「図解分析」によって類型化し、保存地区の整備に役立てている研究があるものの、街づくりのシステムのあり方にまで立ち入って言及するものは行われていない。また、ウィーンのタウンスケープを定量的に分析し、その都市空間に建築物を挿入していく時に「多様性」と「統一性」とのバランスを客観的に判断していくための手法が確立しているわけでもない。しかし、その必要性和意義は既に述べた通りである。

以上述べた問題意識を背景として、本研究ではウィーン市都心部のタウンスケープの形

成と更新を題材に研究を行うが、ウィーンにおける景観の認識とそのタウンスケープ形成のシステムの問題を、我が国の景観問題および街並みの保全と開発の問題と直接比較し、さらにそのシステムを我が国に直接導入するのは、政治・経済・文化そして国民性の大きな違いがあるし、我が国の現状の都市景観を考えてみても無理があると思われる。しかしながら、景観への意識が高まってきている今日、ウィーンのようなタウンスケープの先例について考察を行っておくことは必要であるし、参考になると思われる。即ち、ウィーンの連続建築によるタウンスケープの形成と更新がどの様に行われ、その結果どのような街並みが形成されているのかをスタディし、その街づくりシステムの長所及び短所を知り、そのあり方に検討を加えることによって、我が国におけるタウンスケープの形成と更新に関するコントロールシステムのあり方を考える上で、多くの知見を得ることができるだろう。

第2節 研究の目的

前述の研究背景を踏まえ、本論文ではウィーン市都心部（特に保存地区内）を対象地区として、その都市計画システムとタウンスケープ形成のされ方とに関する問題点を見出し、その地区内で現代的な建築物や建築線を越える建築物を許可する場合に、建築物の都市計画的意図と建築許可との妥当性を如何に客観的かつ公平に評価すべきかという点を論じ、民主的土壌に立脚した建築許可のあり方を提案することを主たる目的とする。

そのために具体的には、以下の様に研究を進める（研究の方法）。即ち、①建設法によるタウンスケープに関する法的枠組みを歴史的に整理し理解した上で（第1章）、②それを背景とした建築家の建築デザイン活動（特にハース・ハウス）とそれに対する住民の反応を考察することによって、ウィーン市都心部のタウンスケープの形成と更新に関する問題点を整理し、そのタウンスケープの「多様性」と「統一性」を議論するための基本的考え方とタウンスケープの形成と更新における民主的土壌のあり方に関する知見を得る（第2章）。次に、③その基本的考え方をベースとして街区ファサードの分析手法を構築し、それを用いてウィーン市都心部の街区ファサードを歴史的・実証的かつ定量的に分析し、ウィーン市都心部のタウンスケープにおいて「統一性」と「多様性」とを同時に実現するための定量的目安を導き出し（第3章）、④さらにそこから、簡便で住民に分かりやすく建築物を分析・評価する方法を構築し、それをウィーン市都心部の著名建築家の作品に対してケース・スタディし、その有効性と可能性について論ずる（第4章）。⑤以上の知見を総合化して、タウンスケープのコントロール・システムとそれを背景に形成される街区ファサードのあるべき方向性について検討し、最終的に景観評価と住民参加を含む建築許可プロセスを提案する（結章）。

第3節 用語の定義

景観とタウンスケープそして本研究で扱う「街区ファサード」

タウンスケープには「景観」⁽⁴⁾ という訳語がしばしば使われる。しかし、この「景観」は地理学をはじめ、土木工学、建築工学、都市工学（都市計画）、造園学（緑地学）などの各専門分野で様々に使われており、またその使われ方は使う人により多岐に渡り、非常に曖昧である。本論文は都市における景観論の一端を担うものであるため、このように曖昧に使われ方を「景観」を整理し、その中で本論文が扱う対象を明解にしておくことは必要である。

井手久登(1975)⁽⁵⁾は、景観計画を土地利用計画の中に位置づけることを前提に、景観の概念にはLandschaftとlandscape とがあることを指摘し、前者は地理学的であり地域概念に重きを置くことから「景域」⁽⁵⁾に相当するとし、後者は工学的、緑地学的であり風景＝景観という視覚的側面が強く出る傾向があるとしている。

渡辺定夫(1985)⁽⁶⁾は、「まちづくりにおける景観整備の意味」という言葉で景観を捉え、それは都市設計、或いは都市デザインであるとし、「それは空間をつくり、維持する過程で参画する主体と物的要素、多様なヒトとモノの複雑な関係自身がデザインという創造力の源泉に他ならない」と述べている。

山田学(1993)⁽⁷⁾は、「景観は、視覚による空間知覚を意味として構成することによって生じる認識であるとされる。この定義によれば景観研究や景観設計の対象は、視知覚される可能性のある物的空間である。この物的空間は、道路や建築や植物などの形状や色彩とそれらの配置によって規定することができる。」としている。

ゴードン・カレン(1971)⁽⁸⁾は、タウンスケープを「ひとつの建物は建築だが、二つの建物はタウンスケープである」と定義し、都市の環境をかたちづくる要素——建物、街路、空間の混乱した関係に視覚的な一貫性と組織を与えようと試みている。そして、その著「都市の景観」においては、建物が集合することによって、個々の建物からは得られない視覚的喜びを得られるに違いないが、これは科学的技術的な都市づくりでは得られないものではないとし、そのために、都市の要素を織りあわす「関係の技法」が必要であるととし、これを人間の情緒への働きかけの経路から分類している。

本研究では、「タウンスケープ」を「主に自然の営みによって形成される『風景』」と対置する「主に人間の営みによって創造される『街の景観』」⁽⁹⁾と捉える。なぜなら、街（タウン）は人間によってつくられるものであるからである。街の土台となる大地にも人間の手が加えられ、そこにある自然物も人間の手が加えられるからである。そして、それには多くの人間の意思が反映される。従って、タウンスケープの物的環境に対して人間がどのような意思決定を行ったかということは重要な問題である。そうしたことを踏まえた上で、本研究ではヨーロッパの多くの都市に見られ、かつウィーンの都心部を形づけている「連続建築によるタウンスケープ」を扱う。しかしながら、一般的な景観構成要素に含まれる動的景観要素（自動車、鉄道等）や自然的景観要素（樹木、動物、地形等）は扱わない。なぜなら、動的景観要素はタウンスケープの中では偶発的で創造的でなく、ウィーンの「連続建築によるタウンスケープ」を法的に誘導していくという意味においては対象物ではないし、さらに自然的景観要素は建設法においては土地利用的には扱われるも

の、土地詳細計画（Bプラン）における主たるコントロール対象は「建築物」であり、また本研究の最終的目的は建築許可のあり方について提言を行うことであるからである。ましてや、ウィーン市の都心部は比較的平坦で地形の変化が少なく、リング道路・公園・広場などの比較的大きな空地があるところ以外には樹木は植えられていない。そういう意味では、本研究の第3章及び第4章で対象とする「街区ファサード」は、ゴードン・カレンの定義する「タウンスケープ」と基本的に似ている。また、「街区ファサード」というと、開放型街区と閉鎖型街区の両方のパターンがあるように思えるが、開放型街区の場合は建築物が孤立しており、結局は建築物のファサードと同じである。以上より、本研究における「ウィーン市都心部のタウンスケープ」と特に第3章及び第4章で扱う「街区ファサード」（図0-2参照）を次のように定義する。

ウィーン市都心部のタウンスケープ（＝Stadtbild der Innenstadt von Wien）

連続建築形式によって形成される閉鎖型街区が主たる街区を構成しているウィーン市都心部における、人間の営みによって創造される「街の景観」

街区ファサード（＝Hausfront⁽¹⁾又はFassadenfront）

連続建築形式によって形成される閉鎖型街区における、複数の建築物のファサードが連なることによって形成される連続立面

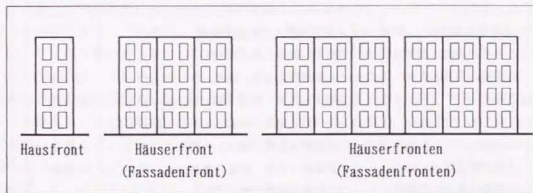


図0-2 街区ファサードの定義

タウンスケープの構成要素と街区ファサードのデザインエレメント

タウンスケープの構成要素（＝街の景観構成要素⁽¹⁾）にはいろいろな種類がある。

ジェラルド・パーク(1976)⁽¹⁰⁾は、その著「街の景観」でタウンスケープの構成要素とそれに影響を及ぼす要因としてそれらをコントロールする方法について、網羅的に整理し

ている。そこに登場するキーワードは、地理、地形、気象などの自然的存在理由から、建築建材、建築技術、政治、経済、などの人為的存在理由まであり、さらにタウンスケープ自身の構成要素としても、建築物の大きさからディテールまで、そして自動車・人間・動物などが、その変遷の歴史とともに説明されている。

田村明(1985)^{*11}は、既に各自治体が行っている景観整備の対策として、(1)緑の保全・創造、(2)水辺の修景・整備、清流の復活、(3)歩行者空間の充実・拡張整備、広場の整備と創造、(4)歴史的建造物・街並みの保全と活用、(5)優れたデザインの建築物・構造物の建設、(6)ストリートファニチャー・彫刻などの効果的配置、(7)景観を妨げる広告・看板・電柱等の撤去・抑制、(8)景観整備のルールの制定、(9)景観整備にかかわるイベントを挙げている。これらは前述の人為的存在理由における政策とその対象を示しているといえる。

大野秀敏(1994)^{*12}は、都市景観を構成する要素として、「物(の形)」「人のアクティビティ」「歴史性」を挙げている。前者2つの要素は現在を構成するものであり、それらを歴史性によって時間軸のなかに位置づけることができるとしている。

布野修司(1994)^{*13}は、景観のレベルとして、「大景観」「中景観」「近景観」をあげ、景観の次元として「音」「匂い」などの人間の関わりをのなかでの営みの結果出てくるものを挙げている。

その他、景観研究の対象として、スカイライン^{*14}、街路樹・電柱・看板・編^{*15}、屋外広告物^{*16}、動的要素(車、人間など)^{*17}、色彩^{*18}を扱っているものがある。

このようにタウンスケープの構成要素は色々あり、人間の営みの結果生まれてくるものである。そしてその様相も多種多様である。こうした構成要素とそれに関わる要因を整理すると、図0-3のようになる。

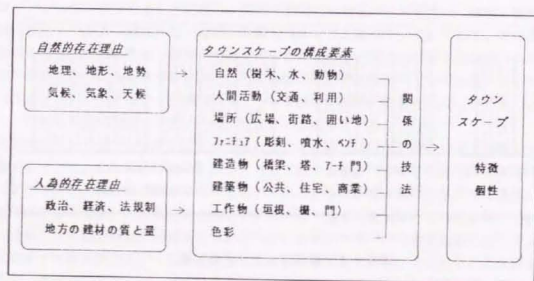


図0-3 タウンスケープの構成要素と要因

本研究の特に第1章及び第2章で議論している内容は、図0-3の人為的存在理由に相当する。そして、特に第3章及び第4章で議論している「街区ファサードのデザインエレメント」は、図0-3のタウンスケープの構成要素の中で、「建築物」のデザインエレ

メントに相当する。既にタウンスケープの定義の部分で述べたように、街区ファサードは複数の建築物が連続して集合することによって形成されるものであるからである。従って、これらは建築物のデザインエレメントであり、建築家が建築を設計していく段階でそのファサードにおいて考えていくエレメントである。すなわち、基本的には建築物の高さ、ファサードの分割、窓や出入口などの開口部、付け柱などの附属物、材料、色などである(詳しくは、第3章において定義する)。

「統一性」と「多様性」、そして市街地特性に対する景観コントロール

松本直司他(1992)^{*19}は、名古屋工業大学の学生を被験者に実験を行うことによって、街路景観における乱雑性及び整然性とその魅力との関係について分析を行っている。その結果、乱雑感と整然感の感じ方に関する個人差は少ないこと、その魅力に関する個人差は大きいこと、官庁・オフィス街などの整然性が極端に高い街路や伝統的建築物の多い観光地では魅力を感じるものが多く、乱雑性が高まると魅力度の評価傾向に個人差が生じることを導いている。

G. カレン(1971)は、「一様性」は「一面で、かなり退屈なもの」とし、「一様性に代わって、暗然のうちに了解された枠内で、多様性の発露が許される」としている。そして、「プランナーの立場からは、一様性を排除することは難しい。また、人工的な転換策によって意図的に一様性の回避をはかって、それは最初の退屈よりいっそう悪い結果しかもたらさない。無秩序ではなく、明晰さを生み出す共通の枠組みが必要である」と述べている⁽¹⁹⁾。即ちそれは、ある範囲の中で自然発生的に「多様性」が発現するような仕組み(枠組み)を作ることであるといえる。

これらのことから本論文では、「一様性」や「整然性」等の総体として「統一性」を捉え、ある画一的な感覚を与える都市空間の特性を指すものとし、一方で「多様性」はそれに対立する語であり、「乱雑性」や「多元性」「複雑性」等の総体として捉え、多くの様相が集合してある種のまとまりのなさを感じさせる都市空間の特性を指すものとする。そうしたタウンスケープにおける「統一性」と「多様性」との共存(バランス)状態が、人間に都市の魅力やある種の心地よさを感じさせるものであると考えるが、その状態は場所によって異なり、また道徳的・文化的或いは社会的ルールの中で、自然発生的に生じるのが好ましいと言える。そしてそのルールの内容や拘束力は、対象とする地域の特性によって異なるべきである。

例えば、G. バグ(1976)は、デザインの規制について、「タウンスケープは静的なものではあり得ず、新しい形態の建物・空間の開発を要求し正当化する都市生活や都市活動を反映しなければならぬ(中略)」。計画規制がこのような変化に適應できるように運営されるべきであるということは、建築家すべてとは言えないが、広く受け入れられていることである。同じく、保持するに値する建築的・歴史的価値、もしくは「集団としての価値」を持つ建築環境では計画規制は変化に抵抗するように作用しなければならない。」と述べている⁽¹⁹⁾。

このように、特に歴史的環境を有する市街地に関して言えば、そのルールの明文化や許容される「統一性」と「多様性」の範囲について記述しておくことは必要であるといえる。

即ち逆に言うと、第3章で導かれる「統一性」と「多様性」との同時実現の目安や、第4章における「一致度」による隣接部分の評価に関する議論は、ウィーン市都心部においても特に保存地区に指定された地区のような歴史的建築物が集積する伝統的市街地に限定しておく必要がある。例えば、全く特徴がなくつまらない建築物が並んでいる街路や新しい地区においては、「一致度」を高めるよりも、最低限のルールだけを整えて、かなり自由なデザインを許容するようにした方が望ましいかもしれない(図0-4参照)。

また、タウンスケープの「統一性」と「多様性」には、幾つかのレベルがある。それは次のようである。即ち、①公共性との関係(建築限界線を越えること等の権利関係)、②土地や建築物の用途、③建物の粒の大きさ(ヴォリューム)、④平面的な凸凹、⑤ファサードの凸凹、というようである。しかし、本論文の性格上、その議論は章毎に限定されている。即ち、第1章と第2章及び結章においては特に①⑤及び①に関係している④の一部分に限定し、第3章と第4章では特に⑤に限定している。そして最終的には、第3・4章において構築された⑤に関する評価手法と民主的土壌の確立によって、結果的に保存地区における①⑤、さらにはその他のレベルにおいても公平に「建築の自由」が実現することを議論する。

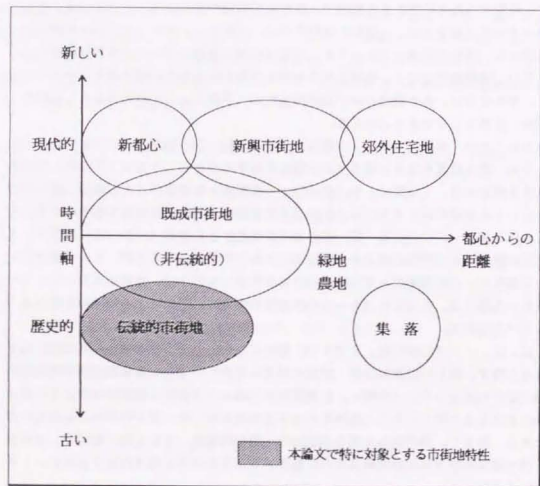


図0-4 時間軸と都心からの距離による市街地の分類

建築許可と建築確認

我が国において「建築許可」というと、都市計画法第53条の『建築の許可』が想起される。これは、「都市計画施設の区域又は市街地開発事業の施行区域内において建築物の建築をしようとする者は、建設省令で定めるところにより、都道府県知事の許可を受けなければならない(後略)」という内容のものであり、建築大辞典(彰国社)⁽¹¹⁾には、「(前略)都市計画施設などの区域内における建築行為は一般に禁止されているが、一定の要件を満たすことが認められれば都道府県知事の許可が得られる」と書いてある。しかし、本論文での「建築許可」は、ドイツ語のBaugenehmigungあるいはBaubewilligung⁽¹²⁾を指す。これは我が国における「建築確認」に相当するものであるが、「確認」と「許可」とではその行政のあり方において本質的な部分が異なる。即ち、「確認」業務は、提出された建築図面が建築関係法規に従っているかどうかを確認することであり、「許可」業務は、まず建築関連公法の規定に違反していない場合には許可を与え、規定に一致していない場合にも例外許可や特例許可を与えることを公平な裁量で検討すること⁽¹³⁾である。従って、行政官の裁量の自由が認められているかいないかが大きな違いである。

第4節 論文の内容と構成

本論文は、4章及び結章から構成される(図0-5参照)。

そして各章は、その内容と性格によって、大きく①景観評価・分析論、②都市計画制度論、③計画論と整理できる。例えば、第1章では、特にウィーン市都心部のタウンスケープを①の観点で定性的に分析し、さらに建設法については②の観点で議論した。また第2章では、ウィーン市都心部における建設活動(特にハース・ハウス)によるタウンスケープの変化に対して住民から起こった論争について、②と③の観点から議論した。第3・4章では、ウィーン市都心部のタウンスケープについて、①の観点から定量的に分析を行った。結章は、それら全体の統合である。

以下、具体的にその内容を述べる。

第1章では、ウィーン市のタウンスケープの形成過程を歴史的及び制度的に分析し、ウィーン州建設法の中ではどのような建築デザインが可能であり、どのようなデザインが行われてきたのかを考察することによって、建設法の長所と問題点を把握することを目指した。その具体的内容は以下の通りである。

すなわち第一に、ウィーン市が近代都市に生まれ変わったグルンデア・ツァイト(GRÜNDERZEIT)について整理し、その時期に行われた建設活動と法制度の整備がウィーン市の都市景観の基礎を作り上げたことを歴史的に把握した。第二に、ウィーン州建設法(BAUORDNUNG für Wien)の全体像を整理した上で、都市計画(Fプラン・Bプラン)がどのようにして策定されるのかを整理し、建築許可がどのようなプロセスによって与えられるのかを理解した。第三に、そのような法規制の中で、一般規制の範囲の中ではどのような建築が可能なのかを、特に建築線と建築クラス及び外観に関する規定について歴史的に

整理し、近年の建築家の作品について考察した。第四に、1972年以降ウィーン都心部のタウンスケープの保全に大きく寄与している保存地区とその中で適用される特別規制について事例を含めて考察した。

第2章では、ウィーン市都心部のタウンスケープにおいて建築家の作品がどのような景観論争を踏まえて建設されてきたかを考察することによって、そこで偶発的に展開された住民参加がどのように法制度のなかに組み込まれていくべきか、そして景観評価手法はどのような視点で行うべきであるかを抽出することを目的とした。その具体的内容は以下の通りである。

すなわち第一に、ウィーンにおける景観論争の流れを把握し、この章で特に整理と分析を行うハース・ハウスに関する景観論争を顕在化するために、保存地区指定以前の景観論争としてリング道路沿いの近代建築と中心部の歩行者天国化について整理し、さらに最近完成したケルトナーリング・ホーフについて考察した。第二に、ハースハウスの概要を整理し、そのハースハウスが計画され実現するまでの法規制の変遷について整理を行った。第三に、ハース・ハウスの建設プロセスにおいて、どの時点でどのような議論が起こったのかを反対意見と容認意見とに分けて整理し、ウィーンにおいてタウンスケープがどのような理解されているのかを把握した。これらの作業によって、タウンスケープに対するウィーン市民の思想を理解するとともに、ウィーン市都心部のタウンスケープ形成における建設法の問題点と今後のあり方を整理し、さらに第3章で議論する街区ファサードの分析項目を構築するための基本的考え方を導き出した。

第3章では、ウィーン市都心部の中でも「統一感」と「個性」のある2街路空間（グラベン街、ケルトナー・リング通り）を対象として、その街区ファサードのデザインエレメントが場所と時間によってどのように変動するのかを分析することによって、保存地区における「統一性」と「多様性」との同時実現の目安はどの程度であるのかを定量的に導くことを目的とした。その具体的内容は以下の通りである。

すなわち第一に、街区ファサードのデザインエレメントの定義付けを行った。第二に、対象とする街路にかかるFプラン及びBプランの歴史的变化とその内容について整理した。第三に、この2対象街路の個々のデザインエレメントについて、1914年、1955年、1975年、1994年の4時点における番地毎の変化の平均値と標準偏差を算定することによって、定量的に分析した。これらの数値的データは、建築許可の図面によって、この作業によって、対象街区の街区ファサードにおいてデザインエレメントがどれだけの範囲内で変化しているかを考察し、建築家や都市計画家が街区ファサードに「統一性」と「多様性」を同時実現させるための定量的目安を導いた。第四に、対象街区の街区ファサードの中での著名建築家の作品と他の建築との相違点と共通点を分析することにより、著名建築家の作品が街区ファサードの「統一性」と「多様性」に与える効果について考察した。以上の結果を基に、第4章で行う隣接部分の分析と評価の基準を導くことを試みた。

第4章では、第3章で導いた考え方に基づいて、ウィーン市都心部の街区ファサードにおける建物の隣接部分を分析・評価する手法を構築し、それを用いたケース・スタディを

行うことによって、その有効性を検証し、今後の展開の可能性について議論することを目的とした。そのケース・スタディは、第3章の街区ファサード全体の分析に対して個性を捉えるという意味で、著名建築家の作品を対象建築物とした。その具体的内容は以下の通りである。

すなわち第一に、対象とする建築物の抽出を行い、そのデータの整理を行った。第二に、各デザインエレメントについて分析の考え方を整理し、分析手法の定義を行った。第三に、その分析手法を用いて対象とする著名建築家の作品を分析し、建築物毎及びデザインエレメント毎の分析ポイントの合計（「一致度」と「不一致度」）を算出し、その結果を第4章の結果と比較することにより、「一致度」による隣接部分の分析が街区ファサードの特徴を十分に説明しうることを検証し、その有効性を示した。第四に、時代毎に「一致度」を集計し、各時代における傾向を考察した。これらの一連の作業によって、街区ファサードの中に建築物を挿入する場合あるいは良い建築物に隣接させて街区ファサードを形成する場合に考慮すべき点と建築家が設計するときの数値的目安を導き、さらに建築許可における景観評価へと発展させていく可能性を議論した。

結章では、以上の議論を通じて得ることができた知見の総合化を行い、計画論へ発展させるための今後の課題と将来に向けて展望を述べることを主たる目的とした。その具体的内容は以下の通りである。

すなわち、まず現行の建設法に基づいた建築許可プロセスにおいて、特に建築線を越える行為に対する客観的評価が不十分であること等のウィーン市都心部における都市計画上の問題点を整理した。さらにその上で、それらの問題点を解決し、正しい意味での「建築の自由」を確立させるために、民主的かつ公平な建築許可が行われるようなシステムとして、「景観評価（例えば、「一致度」による評価をさらに発展させたもの）と住民参加を含む建築許可プロセスの提案」を行い、それによって、「タウンスケープのコントロールシステムと建築デザインとの均衡的共存」とは何であるのかを論じた。

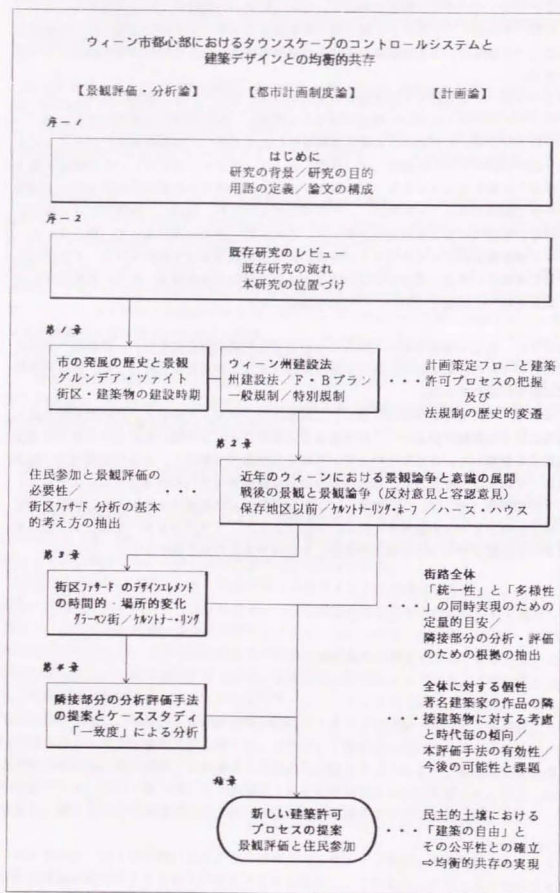


図0-5 論文の構成

【序-1 補註】

- (1) こうした問題について、渡辺定夫(1985)は「景観整備はものづくりであると同時に、人とのものの関係、即ち管理する仕組みと能力によってよくもわるくなる。」と述べ(参考文献47、p.20)、また市野修司(1994)は京都タワーの例などを挙げながら景観管理システムの必要性を指摘している(参考文献41)。
- (2) 日笠暁(1993)は、建築の自由について、「封建的な束縛から離れて個人の自由が確立したとき、土地の絶対所有権が認められ、建築もまた自由な権利を主張した。これが建築の自由(Baufreiheit)である。しかし、都市全体の構成要素である個体としての建築の自由には限界があることは当然であった。このため建築に対して一定の制限を課することになる。これが地域制(Zoning)に代表される建築に対する一連の都市計画制限である。」と述べている(参考文献41、p.78)。
- (3) 林泰義(1991)**は、「道路が街区という単位を形成するのが街区型市街地」とし、それを建築形式と対応して開放型街区(独立建築形式)と閉鎖型街区(連続建築形式)の大きく二つの基本型に分け、我が国の建築制度が独立建築形式のみを想定していることに我が国の都市型住宅の成立が立ち遅れている原因があることを指摘している。又、大村健一(1993)**は、「都市型住宅は、かつて住宅公団が市街地住宅と呼んだタイプで、(中略)形態的には、道路と建物の内包する光庭や街区内の中庭に面する街区型ないしは沿道型を原則とする」としている。
- (4) 建築大辞典(彰国社)には、「けいけん(景観): landscape, townscape ①風景、景色。②ある土地において自然と人間の交渉によって形成される可視的事象のすべて、すなわち視覚的環境のことをいう。これは自然的条件や人間生活の歴史的試練を受けつつ互いに影響しながら変容する。ゆいけい」とある。(参考文献419、p.460)
- (5) 「景観」は、井手久登(1975)**によると、「同様な特徴を有する地表の一部であって、地表より生ずる自然地理的、生物地理的かつ文化地理的の機能の標準として統一性、同質的面相を有し、同様な機能をなすもの」である。また、このような事情を反映し、建築界においても、景観を第一義的には風景、景色としながらも、第二義として「ある土地においては自然と人間の交渉によって形成される可視的事象のすべて、即ち視覚的環境のことをいう。これは自然条件や人間生活の歴史的試練を受けつつ互いに影響し合いながら変容する。この概念を地域的拡がりおよび環境秩序を強く意識する生態的概念でとらえとき「景観」とよぶ」としている。
- (6) ドイツ語で「街の景観」を「Stadtbild」といい、これは「Townscape」とほぼ同義である。
- (7) ドイツ語で1棟の建物はHausで、その複数はHäuserであるが、このHausは例えばHausblock(=mehrere aneinandergestellte Häuser; die von vier Straßen umgebene Häusergruppe =接合している家屋群、4つの街路に囲まれている家屋群)と言われるように、一般的に壁面を連続して建設されている建物群を指す(参考文献222、p.817)。
- (8) 建築大辞典(彰国社)には、「けいけんこうせいようさ(景観構成要素): 景観を構成している要素。そのとらえ方には次の二つの立場がある。①景観を一般的にとらえる立場では、地形、河川、植生、船などの固定的、非固定的の目に見える要素や気候、地質、土壌などの景観の生成要因を指す。②分析や計画、設計など特定の目的のために用いる立場では、対象を景観把握モデルのようにより観点場、対象(主対象、副対象)、対象場別に把握する。」とある。(参考文献419、p.460)
- (9) 参考文献49、pp.19-21参照のこと。
- (10) 参考文献410、p.162 参照のこと。
- (11) 参考文献420 p.493 参照のこと。
- (12) 同じドイツ語圏でも、ドイツ共和国とオーストリアでは文化も違えば言葉の使い方も違う。「建築許可」は、ドイツ共和国ではBaugenehmigungと呼び、オーストリアではBaubewilligungと呼んでいる。意味はほぼ同じであるが、法体系と運用システムが異なるので、その業務内容は若干異なる。
- (13) 参考文献421、pp.107-123

【序-1 参考文献】

- #1 日笠端：「都市計画 第3版」、共立出版株式会社、1993
- #2 Heinz Geretschger, Max Peintner: "OTTO WAGNER 1841-1918", Deutscher Taschenbuch Verlag GmbH München, 1980
- 伊藤哲夫・斎藤信一訳：「オットー・ワグナー —— ウィーン世紀末から近代へ」、鹿島出版会、S D選書 No.187、1984
- #3 Camillo Sitte: "DER STADTBAU NACH SEINEN KÜNSTLERISCHEN GRUNDSÄTZEN", Verlag von Carl Gröner & Co. Wien, 1901 ;
大石敏雄訳：「広場の造形」、鹿島出版会、S D選書 No.175、1983
- #4 林泰義：「街区型建築の成立と現行法制度」、すまいろん、No.18、pp.4-9、1991
- #5 大村俊一：「専断・新都市住宅地のデザイン」、(渡辺定夫編著：「アーバンデザインの現代的展望」、pp.44-59、鹿島出版会、1998)
- #6 井手久登：「景観の概念と計画」、(都市計画 83、日本都市計画学会、pp.10-13、1975)
- #7 渡辺定夫：「景観行政の展開と課題」、(都市計画 134、日本都市計画学会、pp.17-23、1985)
- #8 山田孝：「景観問題を解く」、(渡辺定夫編著、'アーバンデザインの現代的展望」、pp.185-191、鹿島出版会、1993)
- #9 Gordon Cullen: "The Concise TOWNSCAPE", Architectural Press, 1971 ;
北原理雄訳：「都市の景観」、鹿島出版会、1975
- #10 Gerald Burke: "Townscapes", Penguin Books LTD., 1976 ;
長素連・長も子訳：「街の景観」、鹿島出版会、1980
- #11 田村明：「都市景観整備のためのアーバンデザインと都市計画」、(都市計画134、日本都市計画学会、pp.24-30、1985)
- #12 大野秀敏：「現代日本の都市空間とアーバンデザイン」、(建設省住宅局建築指導課・市街地建築課監修、建築技術教育普及センター・創全国市街地再開発協会編、建築・まちなみ景観研究会著：「建築・まちなみ景観の創造」、pp.14-31、技報堂、1994)
- #13 市野修司：「新たな建築・都市景観の創造に向けて」、(建設省住宅局建築指導課・市街地建築課監修、建築技術教育普及センター・創全国市街地再開発協会編、建築・まちなみ景観研究会著：「建築・まちなみ景観の創造」、pp.2-13、技報堂、1994)
- #14 奥俊信：「都市スカイラインの視覚形態的な複雑さについて」、日本建築学会計画系論文報告集、412号、pp.61-71、1990
- #15 舟越敏・横田洋：「街路空間における空間構成要素の分析(物理量分析)：街路空間の研究(その2)」、日本建築学会計画系論文報告集、364号、pp.102-111、1986
- #16 小林正美：「京都の都心街路沿い建物の形態・業種・サインに関する調査研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、27号、pp.499-504、1992
- #17 丹羽富士雄：「ビデオを利用した景観の評価：キャンパス景観を対象にして」、日本都市計画学会学術研究論文集、17号、pp.499-504、1982
- #18 横山明彦：「都市景観の色彩に関する研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、16号、pp.367-372、1981
- #19 松本直司、高井智代：「個人差をふまえた街路景観の乱雑・整然性および魅力度の関連：中心市街地における乱雑・整然性に関する研究 その2」、日本建築学会計画系論文報告集、440号、pp.89-98、1992
- #20 「建築大辞典 第2版<普及版>」、彰国社、1993
- #21 Bartaut Dieterich, Jürgen Koch: "BAULEITPLANUNG: Recht und Praxis", Deutsche Verlags-Anstalt GmbH., 1977 ;
阿部成治：「西ドイツの都市計画制度 —— 建築の秩序と自由」、学芸出版社、1981
- #22 Gerhard Wahrig, DEUTSCHES WÖRTERBUCH mit einem Lexikon der deutschen Sprachlehre, Bertelsmann Lexikon Verlag, 1991

序-2

関連研究のレビューと
本研究の位置づけ

序 - 2

既存研究のレビューと

本研究の位置づけ

第5節 研究レビューの目的と概要

前述したように、我が国におけるタウンスケープ（街の景観）に関する研究は、ここ20年盛んに行われている。ここでは、そうした既存研究と本研究との差異を明確にし、本研究の位置づけを行うことによって、本研究の必要性を明らかにする事を目的とする。従って、タウンスケープに関する研究がどの時期にどのような内容で行われているのかを把握する必要がある。その点を踏まえ、まず我が国のタウンスケープに関する既存研究を①景観運動・思潮、②景観規制誘導手法・行政・政策、③歴史的街並みの景観、④街路景観、⑤広場の景観、⑥景観に対する意識調査・評価分析及びSID法、⑦景観分析・分類、⑧コンピュータ・シミュレーション、画像処理、⑨色彩、⑩夜景・照明、⑪絵画的・文学的景観研究、に分類し整理する。

次に、本研究はウィーン市のタウンスケープに関する研究であるから、ウィーンではどのような研究が行われているのか、さらに我が国ではウィーンについてどのような研究が行われているのかも知る必要がある。それについては、「ウィーンにおける景観及び保存地区に関する研究」と「ウィーン及びオーストリアに関する我が国の研究活動」の大きく2つに分け、レビューを行った。

第6節 我が国における景観研究の流れ

0.6.1 既存研究の分類別概要

1) 景観運動・思潮

伊東孝(1973, 74, 75, 78) ^{①②③④⑤}は、景観運動史という側面から景観に対する考え方と傾向すなわち景観観と景観思潮が具体的に明らかにできるとし、それを京都タワー問題、丸の内美観問題、戦前の東京における美観地区・風致地区の指定経緯などから考察している。そして、こうした都市美や景観に対する運動はけっして現代の新しい問題ではなく戦前からあったのであるが、その根底にある思潮は天皇制の維持強化から歴史的景観の保全という公共的な資産に対する意識を経て、日照問題を含んだ住民自身への意識へと大きく

変わりつつあることを示している。

2) 景観規制誘導手法・行政・政策

安田丑作、嶋田勝次、三輪康一(1986)⁸⁸は、建築デザイン誘導方策の運用面に関する都市計画的な検討がなされていないことを指摘し、神戸市における具体的実施例に関して建築主と設計者に対するアンケートを行い、それを通じて制度への対応状況・評価構造についての分析・把握を行っている。その結果、建築デザイン誘導の必要性は認識されているものの、より地域特性に対応した基準や誘導方策が求められていること、制度の効果はある程度認められていること、誘導方策の具体化・精緻化よりも一般的規制に留め、制度の弾力的運用が望まれていることを結論として導いている。

建築デザイン誘導は各自治体の自由裁量ですめられるが、その一方で建築基準法が景観に与える影響は非常に大きい。鄭賢、紙野桂人(1991)⁸⁷は、こうした面に着目し、いくつかの地区において抽出された景観因子との相関関係を分析している。

3) 歴史的街並みの景観

歴史的街並みに対する研究は、開発・保全の問題をからめ、建築単体から面的整備に因するまで数多くの調査・研究がなされている。しかし、ここではそれら全てについてレビューするのではなく、特に景観に関するものだけを選び出すことにする。

山岸常人、小野正俊、福川裕一(1982)⁸⁹は、歴史的環境において文化財保存と都市計画とが物理的に同一のものを扱いながら、お互いが排他的であることを指摘し、埋蔵文化財、飛鳥問題、街並み保存といった我が国の開発と保全の問題をレビューした上で、これからの都市計画が持つ課題を整理している。

そうした課題を踏まえ、福川裕一(1982)⁹⁰は、奈良と川越の町家における道路を軸とした空間構成について考察を試み、こうした町家がお互いの規範を守りながら存続するかぎりにおいては、単独の建物では維持し難い環境条件を各戸に確保することができること、「一般化をこころける都市計画」ではこうした伝統的な街並みを保全することはできず、個々の街並み自体とそこに内在する問題・仕組みから出発する都市計画が求められていることを示している。

岡島達雄他(1987, 88, 89)^{91, 92, 93}は、日本の伝統的な街並み空間を構成する要素が空間のイメージにどの様な影響を与えているかを明らかにするために、CRT画像上で景観構成要素を操作することにより、そのイメージがどのように変わるかを分析している。

その他には、京都のモニュメンタルな建築配置が都市景観に及ぼした影響について考察した山崎正史(1989)⁹⁴の研究や、パリにおける景観保全手法のひとつである景観保護基準線を鎌倉市に適用することを試みて、景観阻害地区の抽出、規制範囲の検討などを行った片山律(1993)⁹⁵の研究がある。

4) 街路景観

舟越徹、積田洋(1983)^{96, 97, 98}は、特に街路景観について「空間のあり方」と「心理」の対応関係を明らかにすることを目的に、街路空間の心理量分析、物理量分析、相関分析という一連の研究を行っている。即ち、街路空間における特に街路幅、電柱、看板、壁

等の各要素が心理に与える影響を定性的・定量的に導き出している。

小長井由隆、川崎雅史(1989)⁹⁹は、被験者に街路景観をラフスケッチさせ、それによって景観を評価している。

矢田努、仙田満、国吉真哉(1990)¹⁰⁰は、歩行者の行動が、建物の壁面線の形態に左右されることに着目し、ビデオ撮影によって歩行者の軌跡を観察し、建物のセットバック・段差と歩行者の軌跡との関係を分析している。

その他には、景観の与える被験者への印象の類似性をもって街路景観の分類を試み、用途地域との照合を行った窪田陽一(1983)¹⁰¹の研究や、街路空間の自動販売機の実態分析を行った伊藤見之、藤原修(1991)¹⁰²の研究、京都の都心街路において建物の形態とそれに附属する広告物及び業種との相互関係をクラスター分析により考察した小林正美(1992)¹⁰³の研究などがある。

5) 広場の景観

三浦金作(1986, 89)^{104, 105}は、ゲシュタルト質に富んだイタリアの広場の空間構成を把握するために、広場を取り囲む建築物の用途特性の把握、用途別周長構成比による広場の類型化を行い、さらにそれを踏まえて識別距離、水平角、仰角を視覚媒体として広場空間の特性を解析している。

小島淳、琴基正、山川仁、秋山哲男(1991)¹⁰⁶は、スライド提示、映像固定提示、映像移動提示の3つの景観提示方法を用いて、駅前広場景観の評価構造を分析している。

6) 景観に対する意識調査・評価・分析、S/D法

山田学、後藤庄吉、平沢薫、福川裕一(1973)¹⁰⁷は、松本城周辺整備計画のための研究・調査活動としての市民意識調査を行い、それを通じて具体的にコントロールすべき景観対象・保護対象を示している。

北村真一(1976)¹⁰⁸は、歩行者からみた街路景観の情緒の評価と、景観の構成要素との関連性を、スライド実験の結果を基に、形容詞対に対する要因分析を用いて分析しているが、これがS/D法を用いた景観評価の先駆けとなっている。この研究では、建物の高さ、色彩、テクスチャ、自然の量、要素数、文字の量などとの関係を扱っている。

さらに渡辺貴介、大下茂(1982)¹⁰⁹は、同様の手法を地方都市の中心市街地に用い、街路の特に公共的な構成要素に対する改善指針の検討を行っている。

丹羽富士雄(1982)¹¹⁰は、時々刻々と変化する付加的な景観構成要素が景観に与える影響を測定するため、ビデオとアイマークカメラで注視点と注視時間を測定し、さらに好ましい景観・嫌いな景観を連続評価で分析した上で、イメージ評価をS/D法を用いて行っている。これらの相関関係より、基本的要素と付加的要素がどの様に評価されるかを明らかにしている。同様な研究に、ビデオとスライドをそれぞれ用い、動的要素の影響を測定した橋本崇、土肥博至(1993)¹¹¹の研究がある。

奥俊信(1982, 85, 88, 89)^{112, 113, 114, 115}は、街路景観の視覚特性並びに心理的效果に関する一連の研究を行っている。すなわち、①スライドの提示時間を変化させ、それによって街路景観の視覚的分化の過程を分析することによって街路景観構成要素の分類と特徴の考察を行い、②モニター写真を用いて、景観要素が心理に及ぼす影響を分析し、③さら

にどの景観要素が「まとまりのよさ」に影響を与えるかについて分析を加え、④2戸連続延物の景観について、お互いの要素の違いが与える心理的效果について分析し、最後に総合的に「まとまりのよさ」について考察を行っている。

松本直司(1987)⁸⁸⁸は、伝統的環境の街路空間において電柱撤去などの修景の効果を確認するため、現状図と修景図の比較を因子分析を用いて行っている。さらに松本直司他(1991, 92)^{889, 890, 891}は、街路景観における各要素の無秩序な配置、視覚的混乱に問題意識を置き、それを視覚的整然・乱雑性という概念で捉えた上で、スライド実験と因子分析を用いて、要素の存在状況との関連性を分析している。

山岸良一、内田茂、久我新一(1988)⁸⁹²は、街路景観の複雑さと秩序について実験を行い、それには情報理論的な測定が極めて有効であることを導き出している。即ち、スライドを用いたSD法・因子分析による景観評価、抽象画像を用いた情報量との対応実験、さらにビデオ画像を用いた追加実験により、それらを明らかにしている。

山元英敬、丸茂弘幸、高橋昭子、斉藤潔治(1991)⁸⁹³は、見通し距離が与える印象をSD法によるイメージ評定実験によって分析し、景観上望ましい見通し距離を見いだす可能性を提示している。

宮岸幸正、材野義英(1991, 92)^{894, 895}は、シークエンス景観に関するいくつかの分析を行っている。即ち、まず、その視覚的特性とそれに対する人間の行動原理については、我が国の歴史的空間における歩行者の行動を追跡・記録及びアンケート調査した上で、写真により測定した空間の開閉度との関係性を分析している。さらに、人間の行動は目と受ける刺激にもよることから、インパクト度なるものを定義し、それとの関係も同様な手法により分析している。

その他には、幾つか異なる景観提示方法の景観評価に与える差異を把握することを試みた田島学、朝倉博樹(1985)⁸⁹⁶の研究、昼夜間の景観の変化について実験を試みた鈴木ひろ枝、土肥博至(1992)⁸⁹⁷の研究、駅前広場においてその景観の多様性と好ましさのあり方を分析した志水英樹、鈴木信弘、山口満(1993)⁸⁹⁸の研究などがある。

7) 景観分析・分類

ここでは、6)のアンケートなどを用いた景観評価・分析以外の、都市景観の分析に関する研究をレビューする。

北原理雄、横山明彦(1983)⁸⁹⁹は、フォトグリッド分析によって線的な景観の変化と構造の調査を行い、さらにスケッチ分析によって典型的な場所における問題点と可能性の抽出を行い、街路の色彩景観の特性を色相・明度・彩度の分布変化によって分析している。

磯田節子、両角光男、木島安史(1990, 91)^{900, 901}は、ランドマークの眺望可能領域を測定することができる眺望モデルを作成し、それを用いて仮想都市モデルの眺望に関する影響度評価を行った後、新築計画案へのケース・スタディとして適用し、最適案を検討するための評価を行っている。

奥俊信他(1990, 92)^{902, 903}は、都市のスカイラインに着目し、その視覚形態的な複雑さを分析するために、①一対比較法と順位法による評価実験を行い、感覚的な複雑さの認識について分析し、②フラクタル次元との相関関係を基本的な統計量と①の結果との比較から導き出した上で、③形態分解法によって段階的に取り出した都市のファードとフラク

タル次元との関係を考察し、どの段階で個性の要因となるものが出現するかを検討している。

水野節子、掛井秀一(1990)⁹⁰⁴は、フラクタル解析とテクスチャ解析の2つの手法を用い、中世ドイツ都市及び中世イスラム都市の街路形態を分析し、これらの方法が街路形態の定量的な解析に適していることを導き出している。

これ以外には、スカイラインをフーリエ変換して計算したパワースペクトルを直線回帰させた値を「ゆらぎの値」として、それと快適感との相関関係を明らかにすることを試みた亀井栄治、月尾嘉男(1992)⁹⁰⁵の研究や、天空遮蔽率と街路景観を決定付ける大きな要因でもある建蔽率・階数・道路幅員との関係を、「モデル街区」を用いて解析し、用途地域との関連を考察した松川信治、佐藤誠治、有馬隆文(1993)⁹⁰⁶がある。

8) コンピュータ・シミュレーション、画像処理

間瀬実郎、瀬口哲夫(1989)⁹⁰⁷は、GISを利用した都市景観シミュレーションのためのデータベース作成を支援することを目的に、建物形状データを入力するシステムの開発を行い、簡便した中景景観に有効であることをケーススタディによって検証している。後藤孝臣、川上光彦、竹田恵子、三谷浩二郎(1990)⁹⁰⁸は、土地区画整理事業などの新規開発地を対象として街路景観を考慮した整備計画立案を支援するのに有効なシステムを開発することを目的に、CG画像の作成から実景写真との合成まで対話型で与えるシミュレーションシステムを開発し、それを関連事業者にアンケート調査することによってその有効性を示している。

伊藤恭行、近藤裕幸、飯塚拓生(1992)⁹⁰⁹は、デジタル景観画像を画像処理することによって得られた直線より、水平強度・垂直強度を測定し、さらにクラスター分析を行って景観を分類している。

佐藤誠治、有馬隆文(1992)⁹¹⁰は、スライド撮影した景観サンプルをベクトル化あるいは領域分割化して得た画像を、フラクタル分析、境界線特性分析、面特性分析などを行って、都市中央部・近郊部及び農村部の景観特性について解析を行っている。

この他には、CGを用いて街路景観をモデル的に定量化した三橋正邦(1992)⁹¹¹の研究などがある。

9) 色彩

乾正雄(1963)⁹¹²は、建築学における色彩研究の草分け的存在であるが、まず現実建物の色彩計画の性状を各用途の建築物について実測・分析を行い、さらに標準色・室内色彩調和・色彩心理効果の3項目について色彩計画技法の理論化を行っている。

横山明彦(1981)⁹¹³は、様々なタイプの都市景観の色彩を、色相、明度、彩度の三属性に関して調査分析し、比較検討することによって、類似した性格の都市景観が類似したパターンを持つことを導き出している。即ち、現代都市街路型、歴史的町並み型、特殊型であり、都市の色彩を分析する手法の可能性を示している。

小柳桂久、佐藤誠治(1990)⁹¹⁴は、都市景観の類型を行った上で、それぞれの街路景観についてコンピュータ画像処理を行い、色相については出現頻度ヒストグラム、明度・彩度については度数分布図によって提示し、その空間の色彩特性を分析している。

その他には、カット、OSA等に提唱された様相の種類を基に、個性や魅力のある都市について、その色彩の様相を分析・分類を行った奥俊信、紙野桂人、舟橋國男、小浦久子、木道宏(1993)²⁷³の研究や、屋外広告物の属性(設置場所・業種・管理主体)ごとに画像処理を行い、色彩調度による分析とカラーイメージスケールによる分析によって、屋外広告物の都市景観の色調に与える影響を考察した、小柳武和、志摩邦雄、山形耕一、金利昭(1990)²⁷²の研究がある。

10) 夜景・照明

羽生冬佳、渡辺貴介、天野光一(1990)²⁷⁴は、都市の遠夜景を対象に、それを把握する尺度群すなわち構図的尺度と質的尺度を整理し、さらにSD法によってイメージ分析を行って、夜景のイメージとそれぞれの尺度との関連性について考察を行っている。

館林史子、仲間浩一(1990)²⁷⁵は、視点場と対象物の位置関係による対象物の「見えの大きさ」を用いて、都市のライトアップ事業について西欧と我が国の比較分析を行い、さらにライトアップのコントロールについて考察を行っている。

その他には、商業地域の夜間景観について、夜間構成要素とその認知との関連を考察した宇崎勝也、小嶋勝衛、根上彰生(1991)²⁷⁶の研究がある。

11) 絵画的・文学的景観研究

須藤拓、樋口忠彦、玉川英則(1990)²⁷⁷は、水墨画に見られる水辺建築について、その種類と出現数、使われ方、立地場所について整理し、さらにその景観構成における構成要素をカテゴリー分析し、現代の水辺建築の計画のための知見を得る研究を行っている。

小柳武和、滝原敏、笹谷康之、山形耕一(1990)²⁷⁸は、夜景に関して日本人が伝統的にどのように把握してきたかを明らかにするために、語彙と名所図絵の分析を行っている。すなわち、夜景の把握モデルを設定し、それに基づいて夜景に関する語彙の抽出を行い、さらにそれぞれの単語を表す活動あるいは風景が浮世絵に描かれている頻度を計測し、夜景の計画について知見を得るための考察をしている。

坂井猛、出口敦、萩島哲、菅原辰幸(1993)²⁷⁹は、浮世絵に描かれる風景において、現在の街道の風景との相違点を明らかにすることによって、その視点場と遠景の山の仰角との関係を分析し、画家として「絵になる風景」を創出しようとする景観構成の方法の特徴を把握することを試みている。

池田朋子、大貝彰(1993, 94)^{280, 281}は、高山を書いた複数の文学作品をもとに、その景観を表現した語句あるいは出現する景観要素を、現状の地形と景観とに対応させることにより、高山の景観の把握を試みている。

その他には、歌謡曲における描写をもとに空間のイメージを把握することを試みたもので、「駅空間」に関して島見伸次、仲間浩一、岡田昌彰(1994)²⁸²の研究、「海」に関して毛利隆子、後藤春彦(1994)²⁸³の研究がある。

0.6.2 景観研究の流れ

我が国における景観研究の発表頻度を年毎に整理してみた(表1-1)。対象とした研究は日本建築学会計画系論文報告集と日本都市計画学会学術研究論文集に掲載されているものである。すなわち審査付きの研究論文を対象とした(但し、1960年代については計画系論文報告集と都市計画学会論文集に対象となる論文がないので、建築学会大会梗概集のものを対象とした)。

これと第1節における既存研究レビューから次のようなことが読み取れる。

- ①景観に関する研究は70年代に意識されるに至り(但し歴史的環境の保全問題を除く)、80年代に増加をはじめ、90年代前半でピークを迎えていること。
- ②その手法と対象は次第に多様化の様相を帯びはじめていること。
- ③その中心となるものは、歴史的環境、景観と人間の心理(五感)との関係に関するものであり、近年は我が国独自の景観を探索するために、絵画や文学にその拠り所を求めるものが増えつつあること。
- ④形態評価・分析、色彩、夜景・照明、絵画的・文学的景観分析を含め、景観の現状分析から、より美的なもの・より個性的なもの・周辺との調和に考慮したものを求める研究が増えつつあること。

表0-1 年毎に見た景観研究の頻度数

(出典：日本建築学会計画系論文報告集及び日本都市計画学会学術研究論文集)
但し、60年代については日本建築学会大会梗概集を出典とした。

No	研究テーマ	六〇 一 七 〇	一 一 二 三	二 四 五	三 五 六	七 八	八 〇	一 一 二	三 四	五 六	七 八	九 〇	一 一 二	三 四	合計
1	景観運動・思潮		1	1	1	1							1	1	4
2	景観規制関係(手法・行政・政策)									1				1	2
3	歴史的景観の景観			1			1			1	1	2		1	6
	(歴史的景観保存関係——上記を含む)	②	①	①			②	②	②	②	②	②	②	②	(20)
4	方法景観							2	1	1	1	1	1	1	8
5	二つの景観									1	1	1			3
6	景観に対する意識調査・評価・分析・SD法		1	1		1	1	2	3	2	2	1	6	3	25
7	都市景観の形態評価・分析								1				2	1	3
8	コンピュータ・シミュレーション・画像処理											1	1	2	4
9	色彩						1						1	2	4
10	夜景・照明												2	1	3
11	絵画的・文学的景観分析												2	4	6
12	景観計画													1	1
	合計	②	②	2	1	1	1	2	3	3	3	2	4	3	11
	(歴史的景観保存関係の研究を含めた場合)	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	15
	都市計画・建築関係等**で採られた景観研究	4		1			1	2	1	4	1	1	1	1	21

**：都市計画、建築関係、都市景観研究、都市環境研究、都市緑地研究

第7節 ウィーンにおける景観及び保存地区に関する研究

0.7.1 ウィーン工科大学における研究活動

1990年から92年及び94年秋における筆者のウィーン工科大学留学期間における調査によると⁽¹⁾、オーストリアには我が国の日本建築学会や都市計画学会のようなアカデミーは存在せず、一部の教授クラスによるハイ・ソサィティなサロンが存在するくらいで、研究機関相互の共同研究や研究発表会、出版物の発行はほとんどなく、住宅建設助成研究（Wohnbauförderung Forschung）、科学研究助成金（Forschungsförderungsfonds für Wissenschaft（FFF））、科学研究助成制度（Förderung der Wissenschaftlichen Forschung（FFW））や、民間企業の助成を受けて各研究機関が行う研究が独自に行われるのが通常ようである。これらの情報もウィーン工科大学の図書館に整理されているわけではなく、各研究機関にストックされているだけであり、目録も公開されていない。このように、オーストリア国内における活動は非常に怠惰であり、我々が彼らの諸研究の状況を把握するのは非常に困難であるばかりでなく、彼ら自身さえもそれを知らないのが現状である。しかし、他の国との交流は研究室及び大学単位で図っており、恐らく諸外国研究者の要請があつてのことであろうが、ウィーン工科大学の活動概要は徐々に出版化されつつある⁽²⁾。

そのような現状における景観研究の草分け的存在は、ガウグシュ（1976）⁽¹⁾⁽²⁾による形態とその効果に関する研究とフリードリッヒ・モーザー（1977）⁽¹⁾⁽²⁾による都市景観操作による影響に関する研究である。その後、モーザーは、ウィーン工科大学の教授として、Institut für örtliche Raumplanung（地域空間計画研究室）の指揮をとり、コンピュータ・シミュレーション、地区の分類などの一連の景観研究において成果をあげつつある。

まず、フリードリッヒ・モーザー（1978, 80）^{(1)(2), (1)(4)}は、都市造形学的立場から、ウィーンの都市形態を特徴づける空間的要素を図描分析（Bildanalyse）⁽³⁾を用いて定性的に分類・整理し、それらの中でも空間を領域化・強調化・差異化・結合化する形態的要素が空間形成上有効であるとしている。その上で、モーザーはその図描分析を用いて、ウィーンの市街地を始めとして都市の文脈を読み取る作業を行っている。

モーザー、マイヤーホフ、ヴォルフ・ディーター・フライ（1985）⁽¹⁾⁽⁶⁾は、ウィーン市街地において、図描分析を用いて、都市の形態的特徴を抽出し、地区の類型化を行っている。さらに、モーザー、フォイト（1988）⁽¹⁾⁽⁷⁾は、地域景観における住宅建築に関する研究を行っている。

ヴォルフ・ディーター・フライ（1991）⁽¹⁾⁽¹⁾は、ウィーンの都市造形上有効な要素である建物の角に注目し、その形態分類の手掛かりとして、幾つかのウィーンのジードルングを対象地区にその事例を図描分析によって示している（博士論文）。

それ以外には、19世紀半ば以降の都市形態と発展についてのポーベック（1987）⁽¹⁾⁽⁸⁾の研究や、エュープリング（1987）⁽¹⁾⁽⁹⁾の建物の角の造形に関する分類などがある。

0.7.2 ウィーン市MA19における景観及び保存地区に関する研究

MAとはMagistratの略で、日本語では「部署」に相当する。全ての公の仕事に係わる部署がMAの名称で番号付けられ、整理されている。この内、MA19は都市形態及び保存地区（Stadtgestaltung u. Schutzzone）を担当している。

保存地区については、このMA19が、区毎及び地区別に形態調査を行い、F/Bプランの策定、保存地区の指定、さらに建築物新築・改築・増築の際の建築承認のための参考資料として役立てている^{(1)(12), (1)(13)-1, (1)(14)}。これは、その地区にいかなる建築物が群として存在しているのか、街路空間の現状などを整理したもので、1981年からまず区毎に調査を行い、1987年からは個々の地区について調査を進めている。その成果は1992年にまとめられ、市の刊行物として発行された^{(1)(14), (1)(15)}。しかし、これらは対象とする地区の歴史を整理し、特徴的な部分を写真に撮るなどの範囲にとどまっている。

こうしてウィーンにおける研究成果を概観するに、都市空間の特徴と資質の把握及びその向上のための法則または手法の整理であり、魅力ある都市空間を形成するものとして評価できようが、一方で以下の点で物足りなさを感じる。

すなわち、第一に、いずれも定性的な空間把握に止まっている。都市空間は様々な要素の複合体であるからあるモデルで定量的にその空間を説明しようとするのと多くの仮定を設定することになり、現実の空間に対応しなくなってしまう可能性はあるが、そこから深く知ることができることは多く、文章と図だけでは空間とそれを定義する言葉との対応も曖昧である。

第二に、地区分類のためのサンプル数が少なすぎる。モーザーによるウィーン市の都市の形態的特徴による地区分類においては各地区におけるサンプルが1または2程度であった。都市の形態は地形などの自然的要因も含め、非常に多岐に分かれる。この程度のサンプル数では地区を分類することはできない。

第8節 ウィーン及びオーストリアに関する我が国の研究活動

0.8.1 海外学術調査における研究

ウィーン及びオーストリアに関する研究は農業経済学、建築学、都市工学などで成果が挙げられているが、その数はその他の国・都市に関する海外学術調査に比べると比較的小さい。

まず経済学において、アルペン農業の担い手であるベルクパウアーの存立について都留大治郎、阿部正昭、梅木利己（1980, 81, 82）^{(2)(5), (2)(6), (2)(7), (2)(8), (2)(9), (2)(10), (2)(11)}が一連の研究成果を挙げている。これは人口の約2割強がウィーン市に集中しているオーストリアにおいて、その都市状況と対比的な存在であり、かつオーストリアの風景資源でもあるアルペン

に対するオーストリア連邦政府および州の経済的・政策的な援助状況を明らかにしたものと興味深い。

0.9.2 建築に関する研究

建築史的には、ウィーンの19世紀末を支えた建築家たちを中心に幾つかの研究がなされている。

岡田浩(1979)^{***}、西島正樹(1983)^{***}は、それぞれ修士論文において、オット・ワーグナー、アドルフ・ロースの作品を分析することによって、ウィーンの世紀末を代表する二人の建築家の思想が近代建築に対していかなる意味を持っていたのかを明らかにしようとしている。

川向正人(1985, 86, 87)^{***, ***, ***}は、19世紀ドイツ・オーストリアで展開された歴史主義における新しい装飾観の生成を、その中核的存在であったG・ゼンパーを中心に史的に解明することを目的として論を進めている。すなわち、まず、G・ゼンパーの「被覆論」が、1830年に刊行されたヒュブシュ著の「我々は何様式で建てるべきか」のなかに見えていないものであることを示し、さらにゼンパーの「被覆論」が「様式」にまで発展していく過程を明らかにしている。

明田川洋、鈴木信宏(1993)^{***}は、オット・ワーグナー設計のウィーン郵便貯金局を対象に、その出納ホールにおける空間構造(物空間)と光による空間イメージ(光空間)との関係について分析を試みている。

0.9.3 都市に関する研究

北山優子(1994)^{***}は、両大戦間期のウィーンの住宅政策に着目し、それが生活環境形成に果たした役割を解明することを目的に、借家人保護をめぐる政党間及び市民との論争・運動が如何に展開されたかを明らかにしている。すなわち、住宅政策は各種団体のイデオロギー・対立の産物であり、結局、市民による下からの突き上げが市民生活の安定のために公的介入が必要であるという思想的基調を生み、住宅政策を一步進める土台を作上げたのだとしている。

このようにウィーンについての我が国における研究は、新古典主義から世紀末建築にかけて独特の建築が数多く建設されたことを時代背景にして、建築史的な興味におけるものが多く、それ以外は農業政策や住宅政策などの政治的な動きを背景としての政策論に関するものがついでである。都市の歴史や都市空間に関するものは、翻訳という形で出版されたものばかりで、研究として分析を試みられたものは見受けられない。

序-2のまとめ

ここでは、我が国及びウィーンにおけるタウンスケープに関する研究、我が国におけるウィーン及びオーストリアに関する研究のレビューを行った。その結果、以下のことが分かった。

- ①我が国において、タウンスケープの分析及びシミュレーション手法に関する研究が増えてきていること、
- ②分析対象も街路・広場から色彩・夜景そして文学に至まで多くの種類に渡っていること、
- ③個々の問題に対する細かい研究は積み重ねられてきているが、それらを街づくりのシステムとしてどのように総合化するかという問題は不十分であると思われること、
- ④ウィーンについての研究も、建築の分野では特に建築史的な視野でのものは多いが、都市に関するものは学術的には少ないこと、
- ⑤ウィーンにおいては、研究活動が個別であり研究組織や体制が総合的でなく、研究のされ方に問題があると思われること、
- ⑥その中で、景観研究に関してはウィーン工科大学のモーザー研究室が最も成果をあげていること、
- ⑦建築物の相互関係という視点での景観研究は「図描分析」によるものなどがあるが少ないこと、
- ⑧社会問題としてタウンスケープを捉え、法制度や街づくりシステムが如何にあるべきかという点での研究は少ないこと。

こうしてみると、我が国におけるタウンスケープに関する研究では、既に多くの分析手法が開発され、その適用対象も多方面に渡り、さらにかなり実証的に進められるようになっている。そうした研究活動によって、我が国のタウンスケープの特徴や問題点もかなり明らかになってきたし、さらに日本的で美的な景観形成のために文学や絵画に着眼することによって新たな空間形成の視点も生まれつつある。しかし、それは一方で危険性も孕んでおり、独りよがりな重箱の隅をつつくような研究を冗長させないとも限らない。タウンスケープの問題は、単に分析手法や分析対象だけが問題ではなく、都市の空間形成を如何に図っていくべきかということ、さらにその手法を街づくりのシステムの中に如何に組み込んでいくべきかということが問題なのである。そういう意味では、個々に充実してきている景観研究を総合化していくことが必要となっているとも言えるだろう。

本研究は、第1節で分類した研究の中では、3)歴史的街並みの景観、4)街路景観および5)都市景観の形態評価・分析の範疇に含まれるものである。これらの範疇においても、単に景観分析をするだけでなく良いものを積極的に評価し、新しい空間形成のための手法を生み出すための研究が増えつつある。しかしながら、このような景観研究の現状の中で、連続建築形式によって形成されるファサード(街区ファサード)について研究をしたものは、我が国そしてウィーンにおいても非常に少ない。我が国においてはわずかに奥俊信

(1989)²²⁷ による一連の景観分析研究の一部としての「2戸連続建物」に関する研究が挙げられるくらいである。また、それが社会的にどのように問題であって、現状の都市計画と照らし合わせてどのように空間誘導を図っていくべきなのか、という点に関しては議論がさらに少ない。

また、ウィーンにおいてはよいもののストックは非常に多いにもかかわらず、その現状に甘んじてか、景観に関する研究はそれほど進んでいるとは思えない。これまでの研究レビューを通じて、地区分類と景観形態分析がいくつかあっただけである。一方で、多くの研究者が集うサロンや意見の交換の場としての学会や委員会がなく、研究が総合的に発展していく機会があまりないようである。それは、類似研究のレビューが非常に困難な環境にあるということであるが、少なくともウィーンの景観に関する研究はウィーン工科大学が最も先進的に行っていることは事実である。そういう意味ではウィーンには類似研究が少ないのは確かのようなのである。

従って以上より、ウィーン市都心部の連続建築形式によって形成されているタウンスケープに首目し、その誘導システムを都市計画的に明らかにし、その問題点を把握し、そのタウンスケープの発展形成・更新過程と現状を定量的に分析を行い、それによって連続建築形式による街並みに適した新しい景観評価手法の可能性を模索し、さらにそれらが生かされた新しいまちづくりシステムを提案することは、タウンスケープに関する研究において類するものはない。そして、序-1で述べたような我が国における景観誘導システムの不十分さや、街区型市街地の見直し論、そしてタウンスケープにおける「統一性」と「多様性」の民主的かつ平等な次元での同時実現などを考えると、本論文によって得られる知見は我が国におけるタウンスケープの形成と更新において十分に意味があるし、またウィーンのまちづくりにおいても重要であると思われる。

【序-2 補註】

- (1) ウィーン工科大学のUniv.Doz.Dr.Dipl.-Ing.Emerich SimonicsとUniv.Ass.Dr.Dipl.-Ing.Voigt A.にヒアリング調査をおこなった。
- (2) 例ば、都市計画の分野に関しては、ウィーン工科大学出版の研究紹介冊子が発行されている。(参考文献#100)
- (3) モーザ自身、その手法では都市形態を十分に記述できるものではないという問題があることは指摘している。

【序-2 参考文献】

(景観運動・思潮)

- #1 伊東孝：「住居環境が住民意識に及ぼす影響(2)：鎌倉市の住民運動にみる」、日本都市計画学会学術研究論文集、8号、pp.13-18、1973
- #2 伊東孝：「戦後における都市景観運動と最近の新たな動向について」、日本都市計画学会学術研究論文集、9号、pp.199-204、1974
- #3 伊東孝：「戦後における都市景観運動：その事例分析：京都タワー問題と丸の内美観問題」、日本都市計画学会学術研究論文集、10号、pp.103-108、1975
- #4 伊東孝：「昭和戦前期における美観運動とその機能性格・機能：主として東京における美観地区・風致地区の指定と都市美運動による考察」、日本都市計画学会学術研究論文集、13号、pp.285-300、1978
- #5 伊東孝：「都市及び地域景観保全制度の展開課程と景観思潮に関する研究」、東京大学博士論文、1978

(景観規制誘導手法・行政・政策)

- #6 安田正作、船田勝次、三輪康一：「建築デザイン誘導による都市景観形成手法とその評価に関する研究：神戸市における建築デザイン誘導事例を通じて」、日本都市計画学会学術研究論文集、21号、pp.463-468、1986
- #7 安田正作：「都市景観形成のための計画構成と建築デザイン誘導に関する研究」、神戸大学博士論文、1990
- #8 鄭賢、紙野佳子：「建築規制が市街地の景観形成に及ぼした影響に関する研究：現行建築規制によって形成された市街地の景観分析」、日本都市計画学会学術研究論文集、第26号、pp.841-846、1991
- #9 中村和宏：「金沢市における条例に基づく景観行政施策に関する調査研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、第29号、pp.139-144、1994

(歴史的街並みの景観)

- #10 山岸宗人、小野正俊、福川裕一、佐々木宏、亀井伸建：「環境の歴史性と都市の計画：その予備的考察」、日本都市計画学会学術研究論文集、10号、pp.97-102、1975
- #11 福川裕一：「伝統的町並みの道路を軸とした空間構成とその現代的意味：町並み保全の意味と方法に関する一考察」、日本建築学会計画系論文報告集、320号、pp.136-145、1982
- #12 岡島達雄、渡辺勝彦、小西啓之、菊地直二、若山雄、内藤昌：「街並みのイメージ分析：日本の伝統的街並みにおける空間特性(その1)」、日本建築学会計画系論文報告集、379号、pp.123-128、1987
- #13 岡島達雄、渡辺勝彦、小西啓之、菊地直二、野田勝久、若山雄、内藤昌：「景観構成要素とその景観評価への影響：日本の伝統的街並みにおける空間特性(その2)」、日本建築学会計画系論文報告集、383号、pp.134-140、1988
- #14 岡島達雄、若山雄、小西啓之、渡辺達夫、内藤昌：「景観構成要素とイメージとの関係(定性的分析)：日本の伝統的街並みにおける空間特性(その3)」、日本建築学会計画系論文報告集、399号、pp.93-101、1989

- #14 山崎正史：「近世初期京都のモニュメンタルな建築配置による都市景観構成に関する考察」、日本都市計画学会学術研究論文集、24号、pp.607-612、1989
- #15 片山律：「歴史的都市の都市景観評価と計画手法に関する研究：景観保護基準案による居住地域環境の視覚分析調査・鎌倉市」、日本都市計画学会学術研究論文集、28号、pp.547-552、1993

(街路景観)

- #16 窪田陽一：「街路景観の類型に関する構造分析」、日本都市計画学会学術研究論文集、18号、pp.331-336、1983
- #17 茅野耕治、後藤春彦：「商業・業務集積地における街路景観に関する研究：看板率と最大開口率を指標とした街路の類型化」、日本都市計画学会学術研究論文集、19号、pp.211-216、1984
- #18 角越徹、植田洋：「街路空間における空間意識の分析（心理量分析）：街路空間の研究（その1）」、日本建築学会論文報告集、327号、pp.100-107、1983
- #19 角越徹、植田洋：「街路空間における空間構成要素の分析（物理量分析）：街路空間の研究（その2）」、日本建築学会論文報告集、364号、pp.102-111、1986
- #20 角越徹、植田洋：「街路空間における空間意識と空間構成要素との関係の分析（相関分析）：街路空間の研究（その3）」、日本建築学会論文報告集、378号、pp.49-57、1987
- #21 小長井由隆、川崎雅史：「輪郭線のラスケッチによる街路景観の基礎的評価」、日本都市計画学会学術研究論文集、24号、pp.445-450、1989
- #22 矢田努、仙田満、国吉真哉：「街路空間におけるセトバックの形態と歩行線形に関する研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、25号、pp.637-642、1990
- #23 伊藤晃之、森原孝：「街路空間における自動販売機設置の形態とその分析：景観形成の観点から」、日本都市計画学会学術研究論文集、26号、pp.805-810、1991
- #24 小林正美：「京都の都心街路沿い建物の形態・業種・サインに関する調査研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、27号、pp.499-504、1992

(広場の景観)

- #25 三浦金作：「広場を囲む建築物の用途特性と広場の類型化：イタリアの広場の空間構成に関する研究（1）」、日本建築学会論文報告集、366号、pp.82-94、1986
- #26 三浦金作：「視覚的構造よりみた広場の尺度：イタリアの広場の空間構成に関する研究（2）」、日本建築学会論文報告集、398号、pp.87-101、1989
- #27 小島淳、野基正、山川仁、秋山哲男：「大都市運動鉄道における駅前広場景観の調査手法と景観評価に関する研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、26号、pp.427-432、1991

(景観に対する意識調査・評価・分析、SD法)

- #28 山田孝、後藤庄吉、平沢薫、福川裕一：「都市景観のコントロール」、日本都市計画学会学術研究発表会、8号、pp.171-176、1973
- #29 北村真一：「街路の景観構成に関する基礎的研究」、日本都市計画学会学術研究論文集11号、pp.169-174、1976
- #30 青木陽二、笹谷康之：「茨城研究学園都市の景観の分類と評価に関する研究：写真の分類と評価の試み」、日本都市計画学会学術研究論文集、15号、pp.295-300、1980
- #31 青木陽二：「茨城研究学園都市住民の景観評価に関する研究：地図を用いた面接調査の試み」、日本都市計画学会学術研究論文集、16号、pp.385-390、1981
- #32 渡辺貴介、大下茂：「中小商業地における街路景観の改善方法の研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、17号、pp.517-522、1982
- #33 丹羽富士雄：「ビデオを利用した景観の評価：キャンパス景観を対象にして」、日本都市計画学会学術研究論文集、17号、pp.499-504、1982
- #34 奥俊信：「瞬間視実験に基づく街路景観構成要素の分析：街路景観の視覚特性ならびに心理的効果に関する実験的研究：第1報」、日本建築学会論文報告集、321号、pp.117-124、1982
- #35 奥俊信：「街路景観構成要素の景観評価への影響について：街路景観の視覚特性ならびに心理的効果に関する実験的研究：第2報」、日本建築学会論文報告集、351号、pp.27-37、1985

- #36 奥俊信：「街路景観構成要素と心理的効果との関係：主としてままとりの良さについて：街路景観の視覚特性ならびに心理的効果に関する研究：第3報」、日本建築学会論文報告集、389号、pp.108-115、1988

- #37 奥俊信：「2戸連続建物景観の視覚形態評価：街路景観の視覚特性ならびに心理的効果に関する研究：第4報」、日本建築学会論文報告集、403号、pp.87-96、1989
- #38 西岡秀三、原科幸彦：「スライド写真を用いた一般住民による街並み評価法に関する研究：その2、一次元尺度評価の妥当性の検証とスライド写真評価の限界についての検討」、日本都市計画学会学術研究論文集、20号、pp.373-378、1985
- #39 田島孝、朝倉博樹：「景観提示方法による街路景観評価実験に関する比較研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、20号、pp.385-390、1985
- #40 松本直司：「伝統環境の街路空間における修景効果：透視図を用いた実験的研究」、日本建築学会論文報告集、380号、pp.46-55、1987
- #41 松本直司、寺西政敏、仙田満：「街路景観の乱雑・整然性要因に関する研究：中心市街地における乱雑・整然性に関する研究その1」、日本建築学会論文報告集、429号、pp.73-82、1991
- #42 松本直司、高井智代：「個人差をふまえた街路景観の乱雑・整然性および魅力度の関連：中心市街地における乱雑・整然性に関する研究：その2」、日本建築学会論文報告集、440号、pp.89-98、1992
- #43 松原雅輝、松本直司：「景観シミュレーション手法の有効性に関する研究：既往研究調査及び認知実験からの検討」、日本都市計画学会学術研究論文集、26号、pp.385-390、1991
- #44 山岸良一、内田茂、久我新一、街路景観の「複雑さ」および「秩序」に関する実験知見研究：視覚環境の構成と評価に関する研究・1」、日本建築学会論文報告集、384号、pp.27-35、1988
- #45 小嶋倫二：「日本大正村における街並形成の課題に関する考察：写真指摘調査法を利用した景観分析」、日本都市計画学会学術研究論文集、24号、pp.427-432、1989
- #46 宮本孝孝、青山純一、紺野昭：「モデルスコープシステムの映像を用いた都市景観評価の特性に関する研究：模型を用いた景観評価と現地評価との比較」、日本都市計画学会学術研究論文集、25号、pp.289-294、1990
- #47 青山純一、河野勝利、紺野昭：「精度の異なる模型を用いた画像の評価特性：モデルスコープシステムによる都市景観評価に関する研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、26号、pp.379-384、1991
- #48 山元英樹、丸茂弘幸、高橋昭子、齊藤憲治：「見過し距離の相違が街路景観評価に及ぼす影響」、日本都市計画学会学術研究論文集、26号、pp.817-822、1991
- #49 森本章雄、中川義英：「面的な広がりをもつ地区空間の景観評価方法に関する研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、26号、pp.823-828、1991
- #50 宮岸孝正、材野博司：「景観のシークエンスに関する基礎的研究：景観視覚行動と空間の開閉度を中心として」、日本都市計画学会学術研究論文集、26号、pp.433-438、1991
- #51 宮岸孝正、材野博司：「シークエンス景観における景観行動と空間の開閉度・インパクト度との関係」、日本建築学会論文報告集、440号、pp.119-125、1992
- #52 鈴木若枝、土肥博至：「商業地区における経路開閉景観変化に関する考察」、日本都市計画学会学術研究論文集、27号、pp.781-786、1992
- #53 志本英樹、鈴木信弘、山口満：「駅前広場における景観の多様性と好ましさに関する研究」、日本建築学会論文報告集、445号、pp.63-71、1993
- #54 上杉和也、中川義英、森本章雄：「地区イメージを考慮した地区景観の評価に関する研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、28号、pp.601-606、1993
- #55 橋本孝、土肥博至：「都市景観における動的要素の影響について：ビデオ映像を用いた景観評価実験」、日本都市計画学会学術研究論文集、28号、pp.607-612、1993

(その他の都市景観の形態評価・分析)

- #56 北原理恵、横山明彦他：「都市景観計画のための調査・分析方法に関する考察：名古屋広小路中心商店街を事例として」、日本都市計画学会学術研究論文集、18号、pp.139-144、1983
- #57 磯田節子、南角光男、木島安史：「ランドマークの眺望モデルを用いた建築物の複合影響度評価

- 手法」、日本都市計画学会学術研究論文集、25号、pp.643-648、1990
- #58 磯田節子、両角光男：「ランドマークの眺望阻害に着目した建築物の三次元形状評価手法：市街地整備への適用方法とその評価」、日本都市計画学会学術研究論文集、26号、pp.421-426、1991
- #59 奥俊信：「都市スカイラインの視覚形態的な複雑さについて」、日本建築学会計画系論文報告集、412号、pp.61-71、1990
- #60 奥俊信、高橋雅俊：「形態分析法による都市ファサードの特徴分析」、日本都市計画学会学術研究論文集、27号、pp.733-738、1992
- #61 水野節子、掛井秀一：「都市街路形態の定量化手法：フラクタル解析及びテクスチャ解析」、日本都市計画学会学術研究論文集、28号、pp.253-258、1990
- #62 亀井栄治、月尾嘉男：「スカイラインのゆらぎとその快適感に関する研究」、日本建築学会計画系論文報告集、432号、pp.105-111、1992
- #63 松川信治、佐藤誠治、有馬隆文：「視覚の密度感指標（天空遮蔽率）による景観分析」、日本都市計画学会学術研究論文集、28号、pp.517-522、1993
- （コンピュータ・シミュレーション、画像処理）
- #64 間瀬実郎：「都市景観シミュレーションのための建物形状データ入力支援システムの研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、24号、pp.421-426、1989
- #65 後藤孝広、川上光彦、竹田恵子、三谷浩二：「街路景観シミュレーションシステムの開発とその計画の利用：金沢駅西地区土地地区画整理事業施行区域におけるケーススタディ」、日本都市計画学会学術研究論文集、25号、pp.277-282、1990
- #66 伊藤志行、近藤裕幸、飯塚拓生：「街路景観の水平・垂直性に関する研究：コンピュータ画像処理による都市景観の分析：その1」、日本建築学会計画系論文報告集、441号、pp.103-113、1992
- #67 佐藤誠治、有馬隆文：「都市景観画像の形態特性に関する研究：コンピュータ画像処理を用いた都市景観研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、27号、pp.739-744、1992
- #68 三橋正邦：「CGによる街路景観の定量分析」、日本都市計画学会学術研究論文集、27号、pp.745-750、1992
- （色彩）
- #69 乾正雄：「色彩計画理論に関する研究」、東京大学博士學位論文、1963
- #70 横山明彦：「都市景観の色彩に関する研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、16号、pp.367-372、1981
- #71 小柳桂久、佐藤誠治：「都市景観画像の色彩特性に関する研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、25号、pp.271-276、1990
- #72 小柳武和、志摩邦雄、山形耕一、金則明：「屋外広告物が都市景観の色彩調和・イメージに与える影響」、日本都市計画学会学術研究論文集、28号、pp.523-528、1993
- #73 奥俊信、紙野桂人、舟橋國男、小池久子、木多道宏：「色彩の様相に基づく都市景観の分析」、日本都市計画学会学術研究論文集、28号、pp.529-534、1993
- （夜景・照明）
- #74 羽生冬佳、渡辺貴介、天野光一：「夜景の構成とイメージに関する基礎的研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、25号、pp.661-666、1990
- #75 館林史子、仲間浩一：「都市におけるライトアップ事業の景観効果に関する考察」、日本都市計画学会学術研究論文集、25号、pp.655-660、1990
- #76 宇野崎勝也、小柳勝春、根上彰生：「商業地域における夜間景観に関する基礎的研究：繁華地区における夜間の活動と夜景構成要素の実験分析を中心として」、日本都市計画学会学術研究論文集、26号、pp.445-450、1991
- （絵画的・文学的景観分析）
- #77 須藤拓、樋口忠彦、玉川英則：「近世以前の水墨画にみる水辺の景観構成について」、日本都市計画学会学術研究論文集、25号、pp.667-672、1990

- #78 小柳武和、滝原敏、笹谷康之、山形耕一：「語彙および浮世絵にある夜景の認知特性に関する研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、25号、pp.649-654、1990
- #79 坂井猛、出口敦、萩島哲、菅原辰幸：「浮世絵風景画の視点位置と減景に描かれた山の仰角に関する分析」、日本都市計画学会学術研究論文集、28号、pp.505-510、1993
- #80 仲間浩一：「眺望景観の分析に基づく空間のつながりに関する考察：図説資料の分析を通じて」、日本都市計画学会学術研究論文集、28号、pp.511-517、1993
- #81 高田朋子、大貝彰：「文学作品中の空間描写にみる都市景観に関する研究：高山のケーススタディ」、日本都市計画学会学術研究論文集、28号、pp.583-588、1993
- #82 高田朋子、大貝彰：「高山の地方文学賞受賞作品に書かれた都市景観に関する研究——レベールの分析を通じて」、日本都市計画学会学術研究論文集、29号、pp.601-606、1994
- #83 島見伸次、仲間浩一、岡田昌彰：「歌謡曲の情景描写からみた駅空間のイメージに関する基礎的研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、29号、pp.589-594、1994
- #84 毛利隆子、後藤孝彦：「歌にあらわれる『海』のイメージの変容——日本人の海の原風景観に関する基礎的研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、29号、pp.595-600、1994

（ウィーン・オーストリアに関する既存研究）

- #85 都留大治郎：「オーストリア東南部における家族小経営の存在条件の調査」、昭和57年度海外学術調査、pp.106-107、1981
- #86 都留大治郎：「オーストリア・ベルクパウエルン」、九州経済学会年報、第29号、1979
- #87 阿部正昭：「ベルクパウエルンとアルペンヴィルトシフト」、日本農業経済学会誌・農業経済研究、第51-4号、1980
- #88 阿部正昭：「オーストリア産産の経済構造」、農政調査委員会報告書、1980
- #89 梅木利己：「オーストリア山地農業の安定性と農産物流通」、日本農業経済学会誌・農業経済研究、第51-4号、1980
- #90 梅木利己：「オーストリア山地農業と農産物市場」「オーストリア東南部における家族小経営の存在条件の調査」（都留大治郎編）、九大経済学部科研報告書、pp.70-99、1981
- #91 梅木利己：「オーストリア山地農民の農産物市場対応」「家族小経営の存在条件」（都留大治郎編）、pp.193-227、九州大学出版会、1982
- #92 岡田浩：「Otto Wagner の造形理論と近代主義」、東京大学修士論文、1979
- #93 西島正樹：「アドルフ・ロースの作品研究——内部空間の変遷に関する構造論的分析」東京大学修士論文、1983
- #94 川向正人：「19世紀歴史主義の建築史的研究——ドイツ・オーストリアを中心として——」、東京大学博士論文、1985
- #95 川向正人：「1830年頃の新しい装飾観の生成について——ドイツ・オーストリアを中心とする19世紀歴史主義の研究（その1）」、日本建築学会計画系論文報告集、第370号、pp.102-111、1986
- #96 川向正人：「G. ゼムバーの『建築の四要素』について」、日本建築学会大会学術講演梗概集、1986
- #97 川向正人：「G. ゼムバーの『被覆論』の形成過程について——ドイツ・オーストリアを中心とする19世紀歴史主義の研究（その2）」、日本建築学会計画系論文報告集、第379号、pp.138-147、1987
- #98 明田川洋、鈴木信宏：「ウィーン郵便貯金出納ホールの空間構造と光（光の見える建築空間の構造——その2）」、日本建築学会計画系論文報告集、第444号、pp.67-76、1993
- #99 山田優子：「兩大戦間期のウィーンにおける住宅政策に関する研究——借家人保護をめぐる論争と運動に関して」、日本建築学会計画系論文報告集、第456号、pp.214-225、1994
- （ウィーンにおける景観研究）
- #100 Arbeitsgruppe Peter Bleier, Dieter Bokmann (Vorsitz), Christian Eisinger, Bardo Morl, Friedrich Mosser, Gerhard Schmal, Stefan Winkelbauer, "Studienrichtung Raumplanung", Fakultät für Raumplanung und Architektur Technische Universität Wien, 1993
- #101 Gausch K., "Ordnung und Gefallen. Ein Versuch zur Bestimmung eines Indikators für die Beziehung zwischen Gestalt und Wirkung - Gestaltungs-kennzahl", Skriptum 5 des

- Institutes für Gestaltungslehre TU Wien, 1976
- #102Friedrich MOSER, "Der Einfluß des Handels auf die Stadtgestalt". Aufbau 6/1977
Wien, 1977
- #103Friedrich MOSER, "Charakteristik der Stadtgestalt, gezeigt am Beispiel Lienz".
Aufbau 6/1978, Wien, 1978
- #104Friedrich MOSER, "Mehr Phantasie kostet nicht mehr — Stadtgestaltung in Wien".
Wien Aktuell, Heft 4, 1980
- #105Friedrich MOSER, "Stadtgestaltung. Aufgaben für morgen". Arbeitsbericht 40 des
Städtebaulichen Institutes der Universität Stuttgart, 1. Auflage, Stuttgart, 1983
- #106F. MOSER, R. MAYKHOFER u. Wolf-Dieter FREI,
"CHARAKTERISTIK DER STADTGESTALT WIEN — Grundlage für Stadterneuerung und Wohnbau".
Gefördert aus Mitteln des Bundesministeriums für Bauten und Technik (Wohnbauforschung).
Wien, 1985
- #107Friedrich Moser, Frei W., D., Voigt A., "Wohnbau im Ortsbild, Regionsspezifische
Verdichtungsformen zwischen Tradition und Transformation", Wien, 1988
- #108Bobek H., "Wien. Bauliche Gestalt und Entwicklung seit der Mitte des 19. Jahrhunderts".
Wien, 1987
- #109Jochlinger K., "Die Ecke, Konstruktiv — Gestalterische Typologie". Diplomarbeit an der
TU Wien, Institut für Hochbau, Wien, 1987
- #110Zabrana K., "Städtebauliche Restflächen — Restflächen der Stadtgestaltung. Begriffs-
bestimmung, Bewertung und Bewältigung städtebaulicher Restflächen im Grund- und Aufriss
geschlossen bebauter Stadtgebiete — dargestellt an Wiener Beispielen und an einem
Teilgebiet des 4. Wiener Gemeindebezirks". Diplomarbeit an der TU Wien, Wien, 1988
- #111Dipl.-Ing. Wolf-Dieter FREI, "DIE GEBÄUDECKE ALS RAUMMARKIERENDES ELEMENT DER STADT-
GESTALTUNG — Gezeigt am Beispiel der Blockrandbebauung Wiens". Dissertation,
ausgeführt zum Zwecke der Erlangung des akademischen Grades eines Doktors der tech-
nischen Wissenschaften, eingereicht an der Technischen Universität Wien, Fakultät für
Raumplanung und Architektur, Wien, 1991
- #112Adolf KRISCHNITZ, Leopold REDL, "DISKUSSIONSGRUNDLAGE IM AUFTRAG DES MAGISTRATS DER
STADT WIEN", Geschäftsgruppe Planung und Stadtentwicklung Magistratsabteilung 19
- #113-1 "Meidling", 1981
- #113-2 "Stadttrüme", 1981
- #113-3 "Stadtteilplanung", 1982
- #113-4 "Rathaus", 1982
- #113-5 "Gestaltungskonzept Ottakring-Neulerchenfeld", 1983
- #113-6 "Gestaltungskonzept Stammersdorf", 1984
- #113-7 "Gestaltungskonzept 15. Bezirk", 1984
- #113-8 "Gestaltungskonzept 17. Bezirk", 1984
- #113-9 "Gestaltungskonzept 13. Bezirk", 1984
- #113-10 "Gestaltungskonzept 14. Bezirk", 1984
- #113-11 "Gestaltungskonzept Bebauungsstudie 19., Gugitzgasse, 1984
- #113-12 "Gestaltungskonzept 445. Bezirk", 1985
- #113-13 "Gestaltungskonzept 23. Bezirk Altdorf", 1985
- #113-14 "Gestaltungskonzept Ottakring-Filbelsienstraße", 1985
- #113-15 "Gestaltungskonzept 21., Strebersdorf", 1985
- #113-16 "Wohnbaubjekt 12., Aßnergasse, Flurschutzstraße", 1985
- #113-17 "Bebauungsstudie 19., Hackenberg", 1985
- #113-18 "Handbuch für Kleingärten", 1985
- #113-19 "Gestaltungskonzept 647. Bezirk", 1986
- #113-20 "Gestaltungskonzept 22., Kagran Ost", 1986
- #113-21 "Gestaltungskonzept 10., Nord", 1986
- #113-22 "Gürtel Süd- und Westeinfahrt", 1986

- #113-23 "Studie Bauklasse I. II Döbling", 1986
- #113-24 "U3 Stationsbereich Schlachthausgasse", 1986
- #113-25 "Vorortelinie", 1987
- #113-26 "Gestaltungskonzept 9., Bezirk", 1987
- #113-27 "Gestaltungskonzept 22., Hirschstetten", 1987
- #113-28 "Ein Wiener Kleingartenhaus", 1987
- #113-29 "Gestaltung Aspern", 1987
- #113-30 "Gestaltung Bahngasse", 1987
- #113-31 "Mariabilfer Straße Gutachterverfahren", 1987
- #113-32 "Mariabilfer Straße Ausschreibungsunterlagen", 1987
- #113-33 "Mariabilfer Straße Gutachterverfahren Dokumentation", 1987
- #113-34 "Mariabilfer Straße Straßenaufgestaltung Variantenanalyse", 1987
- #113-35 "Gestaltungskonzept 6., Mariabilf 7., Neubau", 1987
- #113-36 "Donauwettbewerb", 1987
- #113-37 "Prater-Osttrasse", 1987
- #113-38 "Gestaltungskonzept", 1988
- #113-39 "Triesterstraße", 1988
- #113-40 "Gestaltungskonzept Rodauer Straße", 1988
- #113-41 "Alte Ortskerne", 1988
- #113-42 "Donaukanal", 1988
- #113-43 "Weltausstellung", 1988
- #113-44 "Wiental", 1988
- #113-45 "Gestaltungskonzept 12., Netzdorf", 1989
- #113-46 "Gestaltungskonzept Handelskai", 1989
- #113-47 "Leopoldstadt Wien 2", 1989
- #113-48 "Modifiziertes Leitprojekt Donaukanal", 1990
- #113-49 "InBeres Wiental — Hütteldorf", 1990
- #113-50 "Experten verfahren Philadelphiabrücke", 1990
- #113-51 "Leitprojekt Stammersinger Hauptstraße", 1991
- #113-52 "Nutzungskonzept Donaukanal", 1991
- #113-53 "A3 — Vehlstraße Nachbarschaftsuntersuchung", 1991
- #113-54 "Europas Essling", 1991
- #113-55 "Wienfluß Ausstellung", 1991
- #113-56 "Wienflußpromenade", 1991
- #113-57 "Wien im Wandel des Planes", 1991
- #113-58 "Marchegger Ast", 1992
- #113-59 "Marchegger Ast (Kurzfassung)", 1992
- #113-60 "7., Bandgasse", 1992
- #113-61 "Überbauung Vorortelinie", 1993
- #113-62 "Schulbauprogramm der Stadt Wien", 1993
- #114Verfasser:Arch. Dipl.-Ing. K. GRUBER, Mitarbeiter: Dipl.-Ing. P. Scheuchel,
Dipl.-Ing. Dr. Techn. R. SCRACHEL, Dr. Phil. E. KAESSWAYER, D. REINBERGER, H. TYRA,
"WIENER SCHUTZZONEN — Bestandsaufnahme und Grundlagensammlung der Rechtskräftigen
Schutzzonen", Magistrat der Stadt Wien, Magistratsabteilung 19 (Geschäftsgruppe
Stadtentwicklung, Stadtplanung und Verkehr), Wien, 1992
- #115Author: Arch. Dipl.-Ing. K. GRUBER, co-authors: Dipl.-Ing. P. SCHEUCHEL, D. REINBERGER,
Dipl.-Ing. Dr. Techn. R. SCRACHEL, Dr. Phil. E. KAESSWAYER, "REGISTER OF PROTECTION ZONES
IN FORCE IN VIENNA", Drawn up on behalf of municipal department 19, division for
general planning, Vienna, 1992
- #116Konzeption und Zusammenstellung: Gustav Piechl, "NEUER WIENER WOHNBAU", Wien, 1991,
Locker Verlag

各章の了ちて一了百了におけ

ウィーン州建設法の法的役割

第 1 章

タウンスケープ形成における
ウィーン州建設法の法的役割

第1章

タウンスケープ形成における

ウィーン州建設法の法的役割

第1節 ウィーン市の発展とウィーン州建設法

1.1.1 グルンデア・ツァイトと建設法の成立

1) グルンデア・ツァイトの概要

ウィーン市の都市の歴史については、文化史、都市自身の歴史⁸¹、都市と建築の変遷⁸²など、幾つかの視点で我が国で紹介されている。また、ここで紹介するグルンデア・ツァイトに関する記述もその中でされている。これらについて改めて詳しく紹介する必要はないだろうが、次の2点においてここでグルンデア・ツァイトについて整理する意味がある。即ち、①この時期にウィーン州建設法のOriginである低地オーストリア州法が制定されていること(1883年)、②本論文で扱っている建築・街路及び保存地区は、このグルンデア・ツァイトの都市の大改造によって大きな影響を受け今日に至っていることである。つまり、グルンデア・ツァイトは、それまでの中世の街並みから近代化へと発展するための一連の大事業が行われた時期を指し、それによって、城壁が撤廃され、リング道路の建設、地下鉄の整備、治水、住宅・文化施設等の整備そしてそのための近代的法制度の整備がなされたのである。従って、グルンデア・ツァイトに関して記述することは、本論文においても非常に重要な意味を帯びている。

ここで、グルンデア・ツァイトの意味を記しておく。グルンデア・ツァイトはドイツ語でGründerzeitと書く。Gründerは動詞のgründen(=基礎を置く/創設〔建設〕する)の派生語で、Zeitは時間/時代/時期である。従って、Gründerzeitは「基礎時代/創設時代」と訳すことができるだろうが、ウィーンにおいては特に19世紀後半のウィーン大改造の時期を指し、「新ウィーンの基礎(となる都市基盤)が創設・建設された時期」という意味で使われる。そこで本論文では、ウィーンにおけるGründerzeitの意味が失われないように、グルンデア・ツァイトと片仮名で記すことにした。

まず、グルンデア・ツァイト期までの、ウィーン都心部の系譜を、図1-1-1に示しておく。これは、Albert v. Camerlinoが作成した1137年から1310年のウィーンの発展の地図と1858年のウィーン市街地の地図をもとに筆者が書き直したものである。これを見ると、ウィーンの旧市街地は、ほぼ13世紀の初頭から14世紀にかけて旧城壁までの大きさに達したこと、13世紀初頭までの発展と現在の道路網が一致すること、グルンデア・ツァイトのリング道路の建設は、旧城壁を完全に取り壊して行われたことが分かる。

THE EXPANSION OF THE CITY

WIEN



- | | |
|--|-------------------------|
| before 13c. (Romanesque) | 1850-1890 (Gründerzeit) |
| 14c. -15c. (Gothic) | 1890-1945 |
| 16c. -17c. (Renaissance) | 1945- |
| 18c. -1850 (Baroque, Rococo and Classic) | |

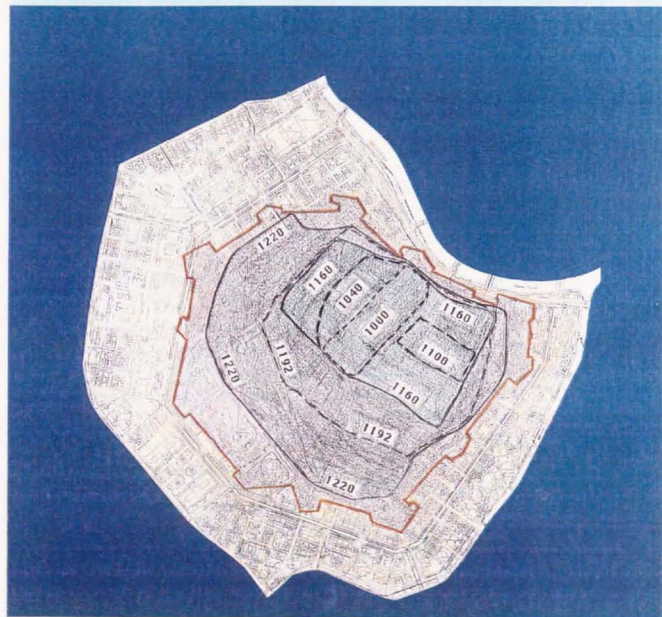


図1-1-1 ウィーン都心部発展の系譜 (1000~1900年)

【参考】1-Plan der Stadt Wien von 1137-1310, mit Zugrundelegung des Planes von Albert v. Camessina, beschrieben von Richard Müller

2-Gesamtplan No.1355, Wien, 1858, reduziert nach der Originalaufnahme des k. k. Catasters vom Jahre 1858, Maßstab 1:1440 ⁽¹⁾】

2) グルンデア・ツァイトの時代区分

グルンデア・ツァイトの時期および都市の発展に関する時代区分の見解については、都市計画的に、いくつか説が分かれるようである。

Univ.Prof.Dr.Ing.Reinhard Gieselmann und Univ.Prof.Dr.Tech.Friedrich Moser(1985)

*等は、ウィーンの建設形態を分類するにあたり、それらの建設時期を、

グルンデア・ツァイト以前 (Vorgründerzeit)	1850 年まで
グルンデア・ツァイト (Gründerzeit)	1850 ~ 1890
後期グルンデア・ツァイト (Spätgründerzeit)	1890 ~ 1918
戦間期 (Zwischenkriegszeit)	1918 ~ 1945
再建期 (Wiederaufbau)	1945 ~ 1955
都市の拡張 (Stadterweiterung)	1955 以降
都市構造の再編 (Montagebauten)	1961 以降
大規模プロジェクト (Grossprojekte)	1970 以降
小規模都市拡張および都市再開発	1975 以降

に分類している。

Ing.Wolf-Dieter Frei(1991)²⁾は、街角の形態を年代別に分類しているが、

グルンデア・ツァイト以前 (Vorgründerzeit)	1850 年まで
グルンデア・ツァイト (Gründerzeit)	1850 ~ 1914
戦間期 (Zwischenkriegszeit)	1918 ~ 1938
再建期 (Wiederaufbau)	1945 ~ 1959
都市拡張 (Stadterweiterung)	1960 ~ 1974
都市再開発 (Stadterneuerung)	1975 以降

としている。

これはすなわち、グルンデア・ツァイト及びそれ以外の時代の捉え方に、人による差異があることを示している。即ち、分類の目的によって、

- ①グルンデア・ツァイトを前期と後期に分けるか分けないか、
- ②グルンデア・ツァイトを第一次世界大戦までとするか、戦後までとするか、
- ③再建期を、ウィーンの独立まで(1955)までとするか、1960年で区切るか
- ④都市拡張、都市再開発などの起こった時期をどう捉えるのか

ということが問題になってくると思われる。

一方、リング道路の建設期でもあるグルンデア・ツァイト期における成果について、最も充実している文献は、文献6のKURT MOLLIK, HERMANN REINING, RUDOLF WÜRZER(1980)による“PLANUNG UND VERWIRKLICHUNG DER WIENER RINGSTRASSE”であるが、これでは、リング道路の建設とそれに伴うプロジェクトを論じるために、ウィーンの発展の歴史を大きく

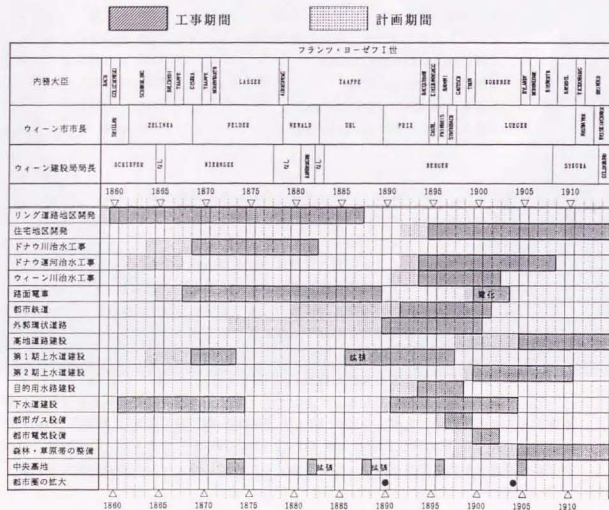
1857年以前と1858年以降に分け、さらにグルンデア・ツァイト期のプロジェクトを整理して、1859年から1914年までのダイアグラムを作成している⁽²⁾（表1-1-1）。この文献から、次のことがわかる。

- ①ウィーンの拡張に関する計画は、1850年以前から、19世紀初頭より起こっていたこと。
- ②リング道路建設などに関する委員会が、フランツ・ヨーゼフ2世のもと、1849年に発足していること。
- ③1850年から1858年まではコンペなど、プロジェクトの準備期間であり、1859年にプロジェクトが始動していること
- ④グルンデア・ツァイトのプロジェクトの時期は、前期と後期の大きく2つに分けられ、前期は1859年から1889年まで、後期は1890年から1914年までであること

以上の各研究成果を踏まえて、本研究では時代の区切りという点を考慮して、グルンデア・ツァイトを1850年から1914年と捉えることにする。

表1-1-1 グルンデア・ツァイトのプロジェクトとその建設時期

【出典：参考文献6、p.381】



3) グルンデア・ツァイトの成果と低地オーストリア州法

グルンデア・ツァイトの成果としては、以下のことが上げられる（図1-1-2参照）。

まず第一に国家施設の整備（王宮、国会議事堂、市役所）、第二に交通基盤の整備（リング道路、道路網、鉄道網）、第三にドナウ川の治水（運河の建設、監視所、ダム、橋梁）、第四に公共施設の整備（教会、大学、美術館、オペラ座、ホール）、第五に都市住宅の建設、第六に処理施設の整備（上下水道、ガス、電気）、第七に公園・緑地の整備（国民公園、森林緑地帯）、第八に墓地の整備（中央墓地）、第九に法制度の整備（建設法）である。この中で特にウィーン市都心部のタウンスケープに影響を与えたのは、交通基盤の整備、都市住宅の建設、法制度の整備である。

特に法制度は、建築線を定めたものとして非常に重要であり、近代化的都市を作るために庶民の土地を収用し、道路と民地の境界を定めていくことを明文化し合法化した意味で、その後のウィーン州建設法の前身的役割を果たしている。この低地オーストリア州法（1883年制定）における建設法は、全体調整計画（Generalregulierungsplan）と全体建築線計画（Generalbaulinienplan）とを都市計画の計画手法として持っているが、1883年の制定後、実に約10年後の1893年11月にウィーンの全体調整計画のためのコンペが行われている。その結果、一等にオットー・ワグナーの案とヨーゼフ・シュテューベンの案が入选し、ウィーンの全体像が定められ、鉄道網も含めた都市基盤が実現していくことになるのである⁽³⁾。これによって、全体調整計画が具体的な都市像をもつようになり、これに従った全体建築線計画が定められていくようになった。

また、オットー・ワグナーは、街区の形態を次のように定める事を提案している。

- ①自由別荘地
- ②前庭住宅のクローズ型住宅地（最高高さ14m）
- ③3階建て住宅のクローズ型街区
- ④4階建てのクローズ型街区かつ最高高さ17m
- ⑤5階建てのクローズ型街区かつ最高高さ21m
- ⑥6階建てのクローズ型街区かつ最高高さ25m（オープン街区でも可）
- ⑦工場用街区
- ⑧自由建設街区

一方、建築物の高さに関する規定は、1893年3月24日の建設法改正による「建築地区計画（Bauzonnenplan）」の制定により定められた⁽⁴⁾。これによると、「建築地区計画」は、4つの建築地区（Bebauungszonen）から成り立っている。即ち、

- ①最も中心の住居地区（Wohnzone）：土間階と4階（例外的に5階）
- ②住居地区：最高3階建て
- ③住居地区：1土間階及び2階の建築物のみ
- ④工業地区

である。このこととウィーンの現状から推測すると、このグルンデア・ツァイトの時期に建設された都心部（リング沿い）の住宅等は、階数が5又は6で、最高高さ21mもしくは25mの建物だったと考えられる。



図1-1-2 グルンデア・ツァイト期に第一区で成された事業
 【出典：Magistrat der Stadt Wien: "DIE STÄDTBAULICHE ENTWICKLUNG DER STADT WIEN IN BEZIEHUNG ZUM VERKEHR", Beiträge zur Stadtforschung, Stadtentwicklung und Stadtgestaltung, Heft 6, Wien, 1981】

4) 都心部における街区と建築物の現状

1883年の低地オーストリア州法の制定による全体調整計画 (Generalregulierungsplan) と全体建築線計画 (Generalbaulinienplan) の施行に従い、旧市街地の道路拡幅計画が1895年に立案された⁽⁸⁾。しかしながら、これらの計画は途中で中止され、現在の街並みと比較すると、一部の道路の拡幅のみ実現している。これには、カミロ・ジッテの業績も影響していると思われる。これらの史実と筆者の現地での現況調査を基に作成したのが図1-1-3である。これより、さらに次のことが理解できる。

- ① グルンデア・ツァイト以前の街並みは、要所に広場空間が存在し、そのシンボルは教会であり、必ず広場と教会が一体であること
- ② それらに道路が接続するようにして、街区が形成されていること、
- ③ それらのグルンデア・ツァイト以前の街区は不整形なものも多く、街区の大きさもまちまちであること
- ④ 孤立した建築物は少なく、シュテファン教会、ペータース教会などの教会のみであり、貴族たちのパレスなどの大きな建築物も他の建築物と一体的に作られ、街区が形成されていたこと
- ⑤ グルンデア・ツァイトに形成された街区は、殆どが長方形であり、整形であること
- ⑥ 道路に囲まれた公園が、憩いの場として形成されたこと
- ⑦ グルンデア・ツァイトの時期の公共建築物は、基本的に一街区一建築物であり、孤立した建築物であること
- ⑧ 公共建築物の街区は、他の住宅街区より、比較的大きいものであること

第二次世界大戦中、ウィーンは連合軍による数回の爆撃により、潰滅的な被害を受ける。その後、1955年までの独立まで、戦災復興計画によって街の修復と住宅などの供給を行った。従って、第一区の中の多くの建物が、比較的新しい材料とスタイルによってつくられている。その復興計画に際し、ウィーンでは連邦記念物保護局 (Bundesdenkmalamt) が中心となって、ウィーン市の歴史的建造物の被害状況及び、その建設年代について調査を行っている。図1-1-4は、その調査によって作成された第一区の全ての建築物の建設年代を記した図面と、筆者の現地調査によって作成したものである。これより次のことが分かる。

- ① 都心部の多くの住宅建築物は戦災を受け、戦後の復興計画のときに新築したものであること
- ② 戦後、修復により歴史的建築物が再現されたのは、美術館、オペラ座、王宮などの公共建築物であること
- ③ シュテファン教会の裏手 (東側) と、王宮の辺りの大きく2つの地区に古い建築物が残っていること
- ④ 第5章で分析する歩行者天国であるグラーベン通りの殆どの建築物が、19世紀から20世紀にかけて建設された比較的新しいものであること
- ⑤ 同じくケルトナーリングの建築物は、グルンデア・ツァイト以降に建設された

ものであること

以上の市街地の発展、街区と建築物の歴史に関する調査により、次のことが明らかとなった。

- ①ウィーン市街地の形成は11世紀初頭より始まり、17世紀頃の城壁の完成により1つ区切りを迎え、グルンデア・ツァイトまでその中世の市街地形態を維持したこと。
- ②グルンデア・ツァイトの大規模な都市改造によって、現在の市街地形態は形成され、またリング道路沿いの建築物もその頃にほぼ建設されたこと。
- ③旧城壁内の街区構成は、グルンデア・ツァイト以前の姿をほぼ保っているが、グルンデア・ツァイト後期の建築線計画によって、道路拡幅などの手が入られ、その遺構が多く残っていること。
- ④現在歩行者天国であるケルントナー通り、グラーベン街、コールマルクト街の街路空間は、グルンデア・ツァイト以前には形成されているが、グルンデア・ツァイトの建築線計画による街区の再編により、現在の街区が完成したこと。
- ⑤また、それらの建築物は戦災復興の時に新築されたものが多いこと。
- ⑥第3章で分析するグラーベン街とケルントナーリング通りとを比較すると、街路としてグラーベン街の方が古く、また古い街路のわりには比較的幅員が広い上に建物に囲まれ、広場空間としての意味を持っていること。
- ⑦グラーベン街にはグルンデア・ツァイト以前の建築物があるが、まず少なくともグルンデア・ツァイトの建築線規制などの影響を受け、さらに戦災でかなりの被害を受けており、最終的に現在の空間が形成されたのはグラーベン街もケルントナーリング通りもグルンデア・ツァイト以降であること。

THE AGE OF BLOCKS

WIEN



	before 13c. (Romanesque)		1850-1890 (Gründerzeit)
	14c. -15c. (Gothic)		1890-1945
	16c. -17c. (Renaissance)		1945-
	18c. -1850 (Baroque, Rococo and Classic)		



図1-1-3 ウィーン第一区の街区の形成時期

【参考文献11、12をもとに筆者が作成】

THE AGE OF BUILDINGS

WIEN



- | | |
|--|-------------------------|
| before 13c. (Romanesque) | 1850-1890 (Gründerzeit) |
| 14c. -15c. (Gothic) | 1890-1945 |
| 16c. -17c. (Renaissance) | 1945- |
| 18c. -1850 (Baroque, Rococo and Classic) | |



図1-1-4 ウィーン第一区の建築物建設時期

【参考文献：BAUALTEN DER HAUSER, Baualterpläne der Bezirke 1-9
von Adalbert Kläaer(Bundesdenkmalamt), Wien, 1947-50, No. 1122】

1.1.2 ウィーン州建設法の概要

1)ウィーン州建設法の特徴と法的位置づけ

ウィーン州建設法は、個々の土地所有者の建設に関する権利を規制・誘導する行政法であり、市でもあるウィーン州の州法である。その計画内容と執行並びに法的手続きなど全ての権限を州自身が持っている。ドイツの場合は上位法として連邦建設法が存在するが、オーストリアの場合は、個々の州が独自に建設法を定め、それを統括する連邦法は存在しない。これは2つの意味合いがある。ひとつは、オーストリアは国自身が小さいので、ドイツのように全体を統括する法律体系をつくるより、州の自治権を維持したほうがよいということ、そして全国人口700万人のうち170万人が集中する首都ウィーン市の街並みをきめ細かくコントロールするのに、現在の法体系のほうが適しているということである。

ウィーン州建設法（以下、「法」と略す）は、都市計画及び建築法であって、都市計画に関連する部分が法§1～59、建築に関する部分が§60～139となっている。その中で、都市計画の実現手段としてはFプラン及びBプランがあり、2段階計画になっているのはドイツの場合と同じである。また、現法では、Bプランの中に保存地区が位置づけられていて、建築線、建築クラス（高さ規制）、建築方式（オープン型、クローズ型など）等の形態規制と連動して規制できるようになっている。さらに、建築線に関しては、建築に関する規定の中に「建築線を越えてよい建築の部分（§83、84）」の規定があり、法§85には、建築物の外観に関する規定も設けられている。以上のことを図にまとめておく（図1-1-5）。

オーストリア共和国

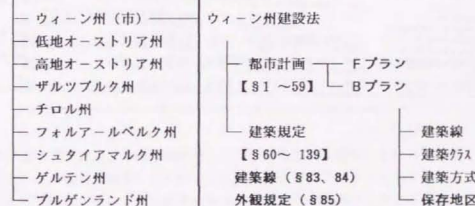


図1-1-5 ウィーン州建設法の法的位置づけ

ウィーン州建設法は、1930年、第一共和国時代に制定された。これは、1883年の低地オーストリア州法の全体調整計画(Generalregulierungspläne)を土地利用計画(Flächenwidmungspläne)に、全体建築線計画(Generalbaulinienpläne)を土地詳細計画(Bebauungspläne)に組み換えることによって実現された。その後、ナチス軍の侵攻によりその効力を失ったが、戦後の戦災復興のために1947年復活している。これは、1955年のオーストリア独立後も保存地区の付加などの変更があるが、基本的に1976年の大改正まで存続する。現在のウィーン州建設法は、1976年の大改正によって制定されたものであるが、その後も毎年のように小さな法改正を行っている。このうち、形態規制および保存地区に関する改正は、1987年と1991年である。これらの改正については、再び第3節において詳しく述べる。表2-2-1に、ウィーン州建設法の変遷をウィーンにおける都市及び建築に関する出来事などに対してできるうちに、年表にまとめておく。

[illegible]

ウィーン州建設法(1976年法)に規定してある内容は表1-1-3の通りである。これを見れば分かるように、まず、前半が都市計画に関するところで第1章から第6章までを占めている。そのうち、第1章が都市計画(FプランとBプラン)の位置づけと内容であり、第2章から5章にまでが、不動産に関すること、特に土地の収用である。次に、後半が建築に関する規定であり、第7章から第14章までである。そのうち第7章から第11章が建築単体に関する規定で、第12章から第14章が建築許可、建築の登録などの手続きに関する部分である。このうち、特にタウンスケープに関係する規定は、第1章のFプラン・Bプランに関する規定、第7章の建築意図に関する規定と、第8章の建築敷地における建築利用に関する規定である。

(出典: Das Wiener Baurecht Band2, BAUORDNUNG FÜR WIEN
Textausgabe nach dem Stande vom 1.9.1992, 4. Auflage,
Eisenstadt, 1992, Prugg Verlag Eisenstadt)

第1章	都市計画（Fプラン、Bプラン）	§ 1	～ § 12
第2章	不動産境界の変更	§ 13	～ § 37
第3章	土地の収用	§ 38	～ § 46
第4章	他の所有制限	§ 47	～ § 49
第5章	隣接行為	§ 50	～ § 56
第6章	補償	§ 57	～ § 59
第7章	建築意図における形式的必要条件	§ 60	～ § 74
第8章	建築敷地における建築利用可能性	§ 75	～ § 86
第9章	特に保護衛生に関する規定	§ 87	～ § 96
第10章	ことに構造に関する規定	§ 97	～ § 115
第11章	特別な建築施設に関する規定	§ 116	～ § 122
第12章	建築行為の実行、利用、保存に関する規定	§ 123	～ § 129
第13章	土地台帳における義務の明確化	§ 130	～ § 131
第14章	役所：関係部局と関係者	§ 132	～ § 139

ＦプランとＢプラン、都市計画図として市役所で資料で交付しているが、同一図面上に１：２０００の縮尺で表現しており、この点もドイツのＦプラン・Ｂプランと異なる点である。その凡例は、表１-４のようになっている。この凡例でも分かるように、保存地区はＢプランの附属決定の一つとなっている。即ち、他の建築線、建築物・建築方丈、建築方丈構造に関する規定などが決定されたので、必要と認められた地域にのみ適用することができるときのものである。この附属決定に準じて、特に必要と認められる保存地区内の地区あるいは建築の部分においては、そのＦプラン・Ｂプランの地区ごとに特別規定を適用することができるようにしている。

表1-1-4 Fプラン・Bプランの規定内容

【出典：WA21 - Flächenwidmungs- und Bebauungsplan.

Magistrat der Stadt Wien, Plandokument Nr. 5992】

土地利用計画 (Fプラン) 【84】

<FLÄCHENWIDMUNGSPLANE>

緑地 <GRÜNLAND>	
郊外緑地 <Ländliche Gebiete>	L
レクリエーション緑地 <Erholungsgebiete>	
駐車場	Epk
クライン・ガルテン	Ekl
運動公園	Eap
自由水面	Ebd
余暇広場	Eap
水泳小屋のための土地	Ebh
国民健康及び必要な土地の	
確保のための土地等 (例)	E.....
保存地 (広域) <Schutzgebiete>	
森林及び草原等	Sev
公園保存地	Sek
墓地 <Friedhöfe>	F

交通帯 <VERKEHRSBÄNDER>

建設用地 <BAULAND>

住居地域 <Wohngebiete>	W
住居地域 - 商業区	W..
庭園住宅地域 <Gartensiedlungsgebiete>	GS
庭園住宅地域 - コミュニティ施設	GS..
複合建築地域 <Gemischte Baugebiete>	GB
複合建築地域 - 商業地区	GB..
複合建築地域 - 工業地区	GB..
工業地域 <Industriegebiete>	IG
利用・用途決定済 (制限付)	IG..
倉庫及び空港滑走路 <Lagerplätze und	
landesflächen>	LL
倉庫決定済 (制限付)	LL..

特別地域 <SONDERGEBIETE>

観光場・浄化装置・貯水池等及び	
その他の土地利用 (例)	SO.....
詳細計画 (Detailplan) 付の空間における	
土地利用計画の決定 (例)	GB/Dpl

その他計画や計画図書のための凡例

計画地域境界	-----
建設禁止地区境界	-----
許可及び制限の決定 (黒)	■ II o
許可の決定	■ II o
新しい許可の決定 (赤)	■ II o
道路コード	Kärntnerstrasse 2303

土地詳細計画 (Bプラン) 【85】

<BEBAUUNGSPLANE>

建築線 <FLUCHTLINIEN>	
建築境界線 <Baulinien>	-----
道路境界線 <Straßenfluchtlinien>	-----
交通境界線 <Verkehrsfluchtlinien>	-----
公共用地境界線 <Grenzfluchtlinien>	-----
建築用地線 <Baufuchtlinien>	-----
規制境界線 <Grenzlinien>	-----

許可高度 <Genehmigte BEEDENLAGE>	
第1区域内の交通用地の許可高度	25'4
その他の区域内	31'4

許可交差点 <Genehmigte QUERSCHNITTE>	
交差点マークのある許可交差点	S ₁ S ₂
歩行者路 <Fußweg>	Fw

建築クラス (875) <BAUKLASSES>	I bis VI
建築クラスVIにおける高さ制限	
(例) 最低建築高さ32m 最高38m	32-38m

建築方式 (876) <BAUWEISEN>	
オープン (開放型) <offene>	o
連続住宅 <gekuppelte>	ok
オープン又は連続住宅	okg
グループビング <Gruppenbauweise>	gr
クローズ (閉鎖型) <geschlossene>	g

構造 (877) <STRUKTUREN>	
構造地区 <Strukturgebiet>	StrG
構造単位 <Struktureinheit>	StrE
76年11月法85(4)による構造計画	Str
詳細計画 (Detailplan) 付の空間における	
土地詳細計画の決定	GB II g/Dpl

附属決定 85 (4)	BB
保存地区 <Schutzraumes>	-----
倉庫・駐車場による禁止区域	-----
ショッピング・センター	EXZ

建築可能敷地の制限 (例)	
底地は20%以上	100m ²
底地は20%以上	20%

バイパス	La	アークード	Ak
道路 (車用)	Dl	公共道路 (車用)	odf
道路 (人用)	Dg	公共道路 (人用)	odg

公共の公開管理	Ebt	-----
建築高度の制限		
ウィーン0 mより14 m以上	14m	
67.5 m以上	+67.5m	
公共目的のための土地	02	
造園的修繕すべき土地	6	
敷地境界線で出入口	P	
貨物自動車用を駐車するための施設		

1.1.3 Fプラン・Bプランの策定プロセスと建築許可

1) 都市計画及び都市形態専門委員会

ウィーン州建設法 83 に、都市計画及び都市形態専門委員会について定められている。この専門委員は全部で12人であり、市長によって任命され、任期は3年間である。専門委員は、法で定められるところの大学の教授または技術院のメンバーであることが条件であり、彼らの任務に対しては無報酬であり、名誉職である (表1-1-5)。ちなみに、この専門委員会は既に1930年の建設法制定の時に設けられた。この時には8人の専門家で構成されており、市民から高層建築技術士1人、建築士2人、測量士1人、大学等の専門家から4人 (記念建造物、交通など) となっている。それが、76年法に11人、そして87年に現在の12人に改正された。

表1-1-5 都市計画及び都市形態に関する専門委員会の委員とその所属

【出典：83. "BAUORDNUNG FÜR WIEN — Das Baurecht für Wien, Band 2 —", Textausgabe nach dem Stande vom 1.9.1992, 4. Auflage】

建築家 3人	ウィーン工科大学 空間計画・建築学科 ウィーン応用美術大学建築学科若しくは ウィーン美術アカデミー・マクスター・シュル リ・フ・低地・ストリート・フ・フ・フ 技術院
土木民間技師	同上
空間計画学	ウィーン工科大学
記念物学	連邦記念物局
測量技術コンサルタント	リ・フ・低地・ストリート・フ・フ・フ 技術院
都市生態学又は衛生学	ウィーン大学
交通計画学	ウィーン工科大学
社会問題	ウィーン労働院
緑地空間学	ウィーン工科大学若しくは土地文化大学
立地問題学	ウィーン産業経済局

この専門委員会は、都市と建築において大きく2つの役目を果たしている。一つは、Fプラン、Bプランを制定するときの諮問としての役目であり、もう一つは建築許可申請が提出されたとき、その形態と機能が都市に適合であるかを審査する役目である。

まず前者の役目については、法2(5)に次のように記してある。

Fプラン及びBプランの策定プロセス (82)

(5) MA (Magistrat) は、Fプラン及びBプランの策定及び正当な変更のための計画を、ある決められた期限内に地区の管轄庁に提出しなければならない。そしてその計画は、次の条件を以て、3ヵ月間は書き替えてはならない。即ち、都市計画及び都市形態専門委員会によって鑑定された意見に従っていること、及びその

計画内容と専門委員会の鑑定意見が4週間の鑑査を受けること。

【出典：“BAUORDNUNG FÜR WIEN. Textausgabe nach dem Stande vom 1.9.1992. 4. Auflage”. Das Baurecht für Wien, Band 2. Prugg Verlag Eisenstadt, p.8, 1992】

次に後者の役目については法86(2)に、次のように記してある。この部分は、1956年の法改正の時に付け加わった。

建築計画の検査 (§ 67)

②都市計画及び都市形態専門委員会は、ある建築計画がその地域の都市景観に社達な影響を与える場合には、市当局の依頼によってその鑑査に従事することができる。その時専門委員会は、正当な理由によって1人若しくは2人の建築家をメンバーに加える権利を有する。

【出典：“BAUORDNUNG FÜR WIEN. Textausgabe nach dem Stande vom 1.9.1992. 4. Auflage”. Das Baurecht für Wien, Band 2. Prugg Verlag Eisenstadt, p.95, 1992】

以上のことを考察すると、次の問題点を指摘することができる。すなわち、法83によって、その人数が定められているばかりか、その所属先まで指定しており、さらに市長による任命が定められているので、市民には専門委員の選任権がないことである。つまり、その選任と罷免は民主的な方法によって行われるわけではなく、選任する権限がある市長の良心によっているのである。また、決定されるFプラン及びBプランが十分に平等であるか、建設される建築物が十分にタウンスケープを考慮しているか、建築線を越えて建築するのに妥当なものであるか、という判断は、選任された専門委員の責任感に委ねるしかない。この点において、十分に民主性及び平等性を担保するためには、十分な公聴会が行うことができるようになっていて、それによって決定事項の変更を請求する権利が与えられているか、あるいはFプラン・Bプランの策定及び建築許可のプロセスにおいて、それらの各項目を客観的に採点することが出来るシステムを保有しているかが必要である。

しかしながら、今回の調査において、市当局の都市景観及び保存地区に関する部署であるMA19にて、保存地区担当の Scheuchel氏にヒアリングをおこなったところ、目下当局においてはそのような客観評価をおこなうシステムは持っていないということであった。さらに、その評価の判断においては、専門委員の主観的な判断によっていることも明らかになった。また、公聴会、展示などの手続きが用意されているが、それに対する反対に対して十分に検討する可能性が法的に担保されているわけではない。4週間の展示が義務づけられているだけである。

2) F・Bプランの策定プロセス

Fプラン、Bプランは、MA21(都市計画)とMA19(都市形態、保存地区)が主体となって策定される。その流れは、まずMA21が緑図面⁽⁷⁾をもってたたき台を作り、MA19によってその妥当性が検討され、赤図面⁽⁷⁾を作成し、それをさらに政治家、専門委員会、4～5週間の公開を経て、再びMA21に戻され、最終図面になる、という具

合である⁽⁸⁾。この赤図面から最終図面になる段階で、3か月間は変更を許されないこと、都市計画及び都市形態専門委員会の鑑査を受けること、4週間の公開をすること(展示及び新聞など)が法によってMA19及び21に義務づけられており、さらに住民及び地区の団体には複写する権利があることが明記されている。

以上のフローチャートを図1-1-6に示す。

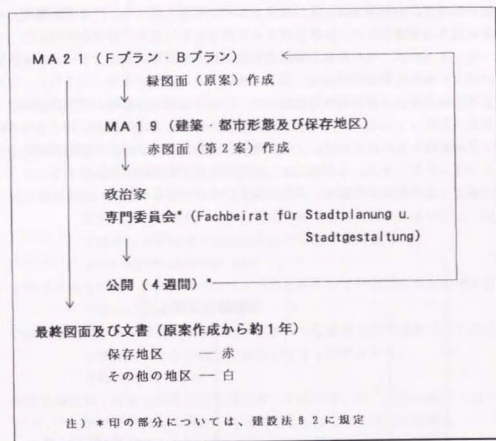


図1-1-6 Fプラン、Bプラン策定のプロセス

【MA19所属の Dipl.-Ing. Peter SCHEUCHEL氏へのヒアリング調査(1994.11.10.)に基づいて作成】

3) 建築許可プロセス

建築許可は、MA37(建築警察 Baupolizei)が主体となって行い、施主は図面及び申請用紙の提出によって、建築許可の申請を行うことができる。しかし、建築許可を受けるとは、多くのMA⁽⁹⁾の審査と許可を受けなければならない。

まず、MA37が行うのは、合法性の審査である。すなわち我が国の建築審査課と同じようなもので、法的に技術的問題点がないかどうかをチェックする。次に、MA7(文化局)、MA15(保健局)、MA19(都市形態)、MA21(建築禁止に関するものの審査)、MA22(環境保護)、MA28(歩道)、MA30(下水道)、MA45(浄水装置)、MA36(冷暖房、エネルギー)、MA38(地下鉄)、MA42(都市

公園)、MA 4 6 (交通)、MA 5 8 (水利権)、MA 6 8 (消防)、労働局、記念物局、のうち、必要とされる審査を受けて、問題がなければ、許可を得ることができる。この審査については、チェックリストがあって、法との対応を見ながら審査をするようになっている。しかしこの中には、本論文で重要視している「建築線に関する規定」、「外観に関する規定」、「特別規制」については、「建築線」に関するものしかなく、審査の対象は、建築線の範囲内に建てられているか、建築指定線を遵守しているか、建築線を越えている建物の部分は法の範囲内か、ということだけである。従って、この建築審査においては、景観に関する客観的なチェックシステムが確立していないことがわかる。

一方、市当局は、その建築が地区の景観に大きな影響を及ぼすと認められる時には、都市計画及び都市形態専門委員会に監査を依頼することができる(法 8 67)。これによって、大きな問題があると認められる場合には、市当局は施主に建築の変更を依頼することができるようになっている。すなわち、前述したように市当局は景観に関する技術的な審査のシステムを持っていないので、全ての判断を都市計画及び都市形態専門委員会に委ねているということができる。したがって、専門委員会が客観的な判断をするということが、タウンスケープの形成に非常に大きな意味を持つのである(図 1-1-7)。

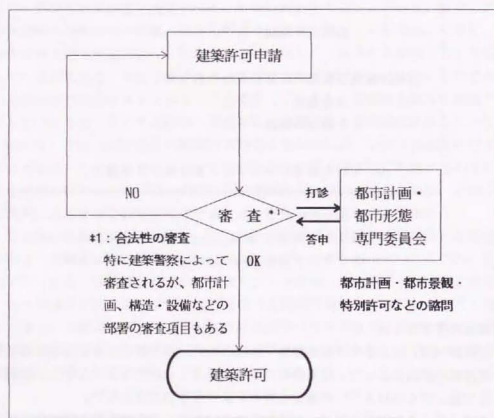


図1-1-7 建築許可のプロセス

【MA 1 9 所属のDipl.-Ing. Peter Scheuchel 氏へのインタビュー及び、建築許可申請における審査表(Prüfungsbogen)から作成】

第2節 一般規制と建築家の活動

1.2.1 建築線等による規制

1) 建築線等とその変遷

ウィーン州建設法 B プランには、現在全部で 6 種類の建築線が用意されている(以後、これらを「建築線等」と呼ぶことにする)。この 6 種類の使い分けと、概念については法 8 5 に記述されている。まずそれらを整理すると次のようになる。

- ① 建築限界線：建築敷地における公共交通用地（道路等、広場）との境界線
【Baulinie】
- ② 道路境界線：公共交通用地における緑地あるいは特別用地とその他の全ての敷地との境界線【Straßenfluchtlinien】
- ③ 交通境界線：交通帯と全ての他の用途の地域との境界線あるいは、建設用地、緑地、特別用地内の道路との境界線（交通境界線においては、建築限界線及び道路境界線の権利及び義務とは関係ない）
【Verkehrsfluchtlinien】
- ④ 公共用地境界線：公共目的の敷地とそれ以外の全ての敷地との間の境界線
【Grenzfluchtlinien】
- ⑤ 建築指定線：ある建築物あるいはその部分の位置を指定する線（法 8 84 により部分的にそれを越えて建築することは許される）
【Baufuchtlinien】
- ⑥ 規制境界線：異なる用途地域の境界線、あるいは、同一用途地域内の異なる B プランまたは利用の規定が定められている部分の境界線
【Grenzlinien】

この建築線等のシステムは、1 9 5 6 年の法改正において確立している。それまでの土地詳細計画すなわち 1 9 3 0 年法においては、まず①建築線と②建設計画とに分かれていて、建築線計画において定められているのは建築限界線、道路境界線、公共用地境界線、建築指定線の 4 種類であった。ちなみに、建設計画によって定められるのは、建築クラス、建築方式、宅地における特別規制（通路、建物高さ、屋根、ファサードに関するもの、特にその造形が都市景観に影響を与える場合あるいは与えられる場合）である。この特別規制については特に詳しい規定があるわけでもなく、また適用された例もないので、これが保存地区の特別規制と特に関係があるということはないようである。

2) 建築線等を越えて建築できる部分

法 8 83 及び 8 84 には建築線等を越えて建築できる部分の規定がある。法 8 83 が建築限界線及び道路境界線に関して建築線を越えることが出来る建築の部分の規定であり、法 8 84 は建築指定線を越えることが出来る建築の部分である。

建築限界線及び道路境界線に関して（法 83）

①同意の必要のないもの

- a) 地下、基礎壁：20cm以内
- b) 建物の足元回り：20cm以内かつ高さ2m
- c) 外観の仕上げ材：7cm以内
- d) 足元回り突出部分の階段
- e) 既存の建築エレメント：15cm以内
- f) 既設の冷暖房等の設備：15cm以内
- g) 主要な蛇腹及び屋根の突出：1m以内
- h) 電線や水道などの引き込み

②交通用地の所有者の同意が必要なもの

- a) ①a)～g)の中で、定められた大きさより大きいもの
- b) 支持壁と飾り柱
- c) 日照・通風・交通及び乗車用の堅穴
- d) 庇、軒および風除け
- e) 広告物等
- f) エルケア（出窓：部屋の一部が突出しているもの）、バルコン、階段室：全長が壁面長さの1/3以内で、隣地との距離を3m以上あるものに限り、建築線より1.5mまで

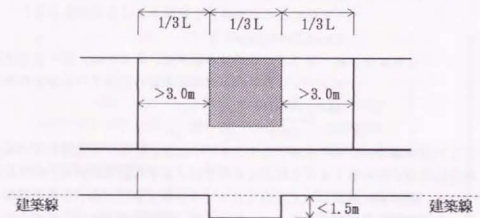


図1-2-1 エルケアに関する規定

建築指定線に関して（法 84）

③全長が壁面長さの1/3以内のもの

- a) エルケア（出窓）、バルコン、階段室：隣地との距離が少なくとも3m以上あるものに限り、建築指定線より1.5mまで
- b) 庇、自由階段、入口上部の庇：高さ3m以内かつ隣地境界線から1.5m以上離すこと

これらの規定は、1976年の大改正のとき付け加えられたものである。しかしながら、1930年法において既にこれとはほぼ同じ規定が設けられている。即ち、

建築限界線より前の建築部分（1930年法 85）

(1) 以下の建築の部分は建築限界線を越えることができる：

- a) 建物前面においては、エルケア（出窓）、バルコン、庇、門、ベランダ、自由階段、テラスで、奥行きが最高3m、幅の合計が建物の長さの1/3までのもの。……（中略）……
- b) 扉前の部分で、入口上部に庇がついていて、横はオープンがガラスであるもの、突出の最高は2mのもの。
- c) 中庭等に対しては、エルケア（出窓）、バルコン、庇、扉前の部分、自由階段、テラス、階段室、便所などで、奥行きが最高3m、幅の合計が建物の長さの2/3までのもので、かつ隣地境界線から最低3m離すこと

この30年法による規定は、特に歴史的建造物を意識したものではなく、「歴史的に存在するから新築等においても適用しよう」という考えのものである。それは、エルケア・バルコンの類が、庇、門、扉前の部分等と一緒に扱われていることから明らかである。しかしながら、この規定が76年法以降のBプランにおける建築線等を越えてよい建築物の部分に関する規定の源流であることは間違いない。

従って、72年法における保存地区（当時は開発等の凍結を目的としていた）の枠組みが76年法によって変わり、Bプランと連動し、弾力的に活用できるようになったことは、この建築線等を越えることが出来る建築物の部分に関する規定において、非常に重要な意味を持つ。保存地区に存在する建築物のように、すでに既得権で認められるようなエルケア・バルコン等、あるいはそのようなものが認められる地区においてのみ許可されるということである。勿論、庇や門扉のような建築の附属物に関しては問題がないが、建築物の主要な一部でもあるエルケア・バルコンの類は理解が得にくくなる。他人の権利を脅かす可能性があるからである。従って、MA19所属の Scheuchel氏へのヒアリング調査によると、今のところこの規定の運用は保存地区やこのような建築物があるところのみでしか認めていないということであった。つまり、積極的に新築の建築物などに適用することは、現在のところ行っていないのであるが、それにはそうした保存地区等以外の地区における運用を積極的に認めるためのシステムが確立していない事にも問題があるようである。

3) エルケア・バルコン

以上の建築線等を越えることの出来るもののうち、我が国になく、かつ特殊な規定であるのは②f)と③a)におけるエルケア（出窓）、バルコニー及び階段室に関する部分である。これらは明らかに単なる飾りではなく、建物の機能として利用される建築物の部分であるからである。ここでは、この2つの建築の部分で、どのようなものが歴史的にウィーンの中で存在し、あるいは保存地区制定前に適格物としてOKになったのかを見ておく。まず、

エルケアとバルコニーの違いを整理しておく。* W a h r i g DEUTSCHES WÖRTERBUCH, Bertelsmann Lexikon Verlag によると、

エルケア：建築物において、前方に飛び出した窓付きの建物の部分
(すなわち、出窓)

バルコン：手すりや欄干によって囲まれた、建物の飛び出した部分
(すなわち、バルコニー) または、劇場の第一列。

である。

第1区の中にある例を写真1-2-1 及び写真1-2-2 に示す。

このうち、写真1-2-1 は歴史的建造物の一部で、既得権として既に存在するエルケアである。一方、写真1-2-2 は、保存地区制定前に、正しくは戦間期に建設されたジードルンクにおいてつくられたバルコンである。

このようなものが存在することによって、タウンスケープの中で得られる効果としては次のようなことが考えられる。

- ①建物のファサードに変化をつけること
- ②建物のヴォリュームを分割し、ヒューマンなスケールを与えること
- ③平面的な利用によって、人の活動が知覚され、街に賑わいを生みだすこと
- ④エルケアの場合は、外からの人に知覚されことなく外を見ることができ、また日照も得られ、内部における平面的な日常の活動が活発化されること
- ⑤バルコンの場合は、内部の人間が直接外に出ることが出来るので、外部と内部との連続性を上げる効果が期待できること

しかしながら、一方で、タウンスケープにおける効果があるといっても、他人の権利を脅かす可能性のあるものであることも事実である。すなわち、敷地境界線を越える行為であること、道路上の採光・日照を阻害するものになりえること、である。従って、それがどの程度のマイナス効果であるのか、それがある程度に押さえることが出来たとした場合、エルケア・バルコンを設けることによって、タウンスケープにどの程度プラスの効果を与えることができ、公共のものとして認知できるかということが課題となる。



写真1-2-1 歴史的建築物のエルケア（第1区）



写真1-2-2 20世紀初頭のバルコン

1.2.2 建築クラスによる規制

1) 建築クラス

建築クラスというの是一种の高さ規制で、建築線の位置における高さ（Gebäudehöhe）を規制するものである。ドイツのBプランと異なり、ウィーン州建設法のBプランにおける高さ規制は一般的には建築クラスのみである。これは歴史的に見ると建築物の最低高さ・最高高さを規制するものであるが、建築線等から離れるとそれに応じた高さの規定があるので、結局最高高さの規制ではなく、建築指定線の場合は「軒高」の規制になる（建築限界線が定められている場合はこの限りではない）。

法875には次のように規定してある。

建築クラス・許可建築高度（875）<以下、下線部筆者>

(1) 建築クラスは、住居地域と複合用途地域に定められる。（中略）

建築クラス I	最低	2.5 m	最高	9 m
建築クラス II	最低	4.5 m	最高	12 m
建築クラス III	最低	10 m	最高	16 m
建築クラス IV	最低	16 m	最高	21 m
建築クラス V	最低	21 m	最高	26 m
建築クラス VI	最低	26 m		

交通用地から見たときに、他の建物の全く後ろに建てる場合には、建築クラスによる建物高さの最低は厳守しなくてよい。

(2) リング道路によって囲まれた部分とその外側で建築クラスVの規制がかかった部分においては、その景観保護のために、Bプランにおいて建築クラスにおいても例外的な高さ規制を定めることができる。

(3) 建築クラスVIにおいてはもう一つ別の建築高度規制をBプランにおいて定めなければならない。

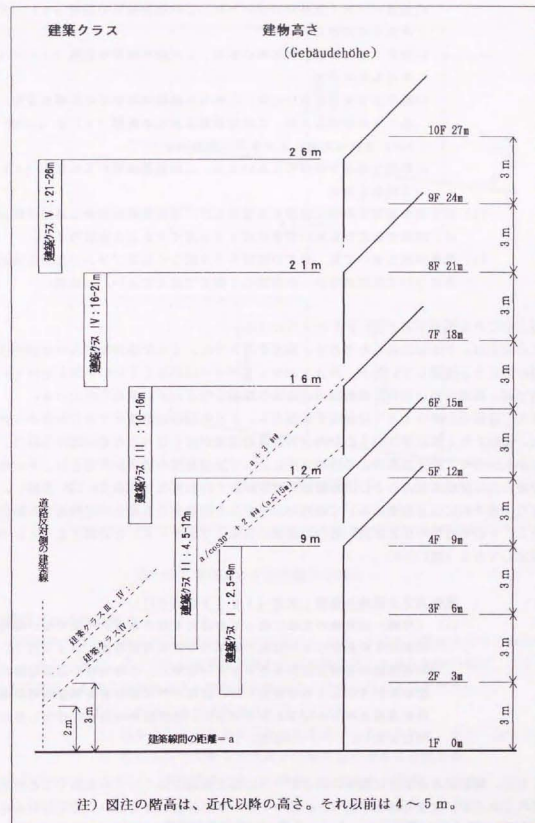
この中で、「景観保護のために、（中略）例外的な高さ規制を定めることができる」というのは、保存地区における特別規定を指している。例えば、第一区においては21mを越えていない建築物が数多くある。しかしながら、ウィーン州建設法は基本的に街区単位の規制になっているために（この点については次第に明らかになる）、個別の敷地で特有の事情がある場合（特に既存不適格建築物）には特別規制で対応しているのである。

2) 建築線等からの距離に応じた規定

法875には、道路反対側の建築線等からの距離の応じた規定があり、法881(4)には屋根の角度に関する規定がある。この屋根の角度は1930年法の時から4.5°である。

建築クラス・許可建築高度（875）

(4) 建築限界線、道路境界線、交通境界線もしくは建築指定線にある建築物については、それ以上の建築高さが許可される場合においても、これらの建



注) 図注の階高は、近代以降の高さ。それ以前は4～5m。

図1-2-2 建築クラスによる建物高さ制限

建築等における建物の高さが次の高さを越えてはならない：

- a) 建築クラスⅠ及びⅡにおいては、この建築線等の距離（a）に2 mを足した大きさ
 - b) 建築クラスⅢ及びⅣにおいては、この建築線等の距離（a）に3 mを足した大きさ
 - c) 建築クラスⅣにおいては、これらの建築線等からの距離が少なくとも1.5 mの部分では、この建築線等を $\cos 30^\circ$ (0.866) で割った値に2 mを足した大きさ
 - d) 建築クラスⅤ及びⅥにおいては、この建築線等からの距離（a）の2倍の大きさ
- (5) 前4項の規定を角地に適用する場合には、当該敷地の部分に通路を設ければ、建物の両正面においてさらに1.5 m高くすることを許可する。
- (6) 保存地区においては、全ての建築クラス若しくはBプランで定められた高さについて建築線等からの距離の2倍まで越えてよい。（後略）

以上のことを図示すると図1-2-2 のようになる。

この規定は、76年法のものである。後述するように、30年法当時のものは前面空地を設けることを推奨していたが、今日ではセットバックは好ましくないと考えられている。現法では、道路が狭い場合に最低限の道路採光環境を守るために定められている。

また、屋根の勾配を45°に制限する規定も、30年以前は建築クラスしかなかったために、蛇腹より上部に塔状のものが作られ、道路環境が悪くなったために設けられた。

しかし一方で、被災復興時には時限立法によって屋根裏階の増築が許可され、その時には定められた屋根勾配より上に出た屋根の増築が多く行われた（本論文p.129 参照）。

また、法81には道路側において地盤が水平でなく傾斜がある場合の建物高さの測定の方針と、その時建物の長さが長い場合の建物の輪郭（ファサード）を分割することについて規定してある（図1-2-3）。

建物高さと建物の輪郭：測定（1976年法881）

- (1) （前略）道路側の立面に沿っての道路地盤の高度が一定でない場合は、建物高さの測定はその立面の両端の中心の地盤高度によって行う。その道路側の建物立面の長さが30 mを越え、その両端の道路地盤の高度の差が3 m以上ある場合には、区切られた建物前面部分両端の道路地盤高度差が3 m以下となるように、建物前面の長さを分割しなければならない。（後略）・・・

これは、傾斜がある場合に建物の高さが一方の端で極端に高くなるのを防ぐことが主たる目的であるが、あまり建物が長いと街区ファサードが単調になるという考え方があると思われる。それは次の建築クラスの変遷に中々分かるように、1930年当初には30 mではなく40 mであり、3 mも2.5 mだったことから、あまり建物の分割が長すぎるのはよくないという考えもあるのではないかと想像できるからである。

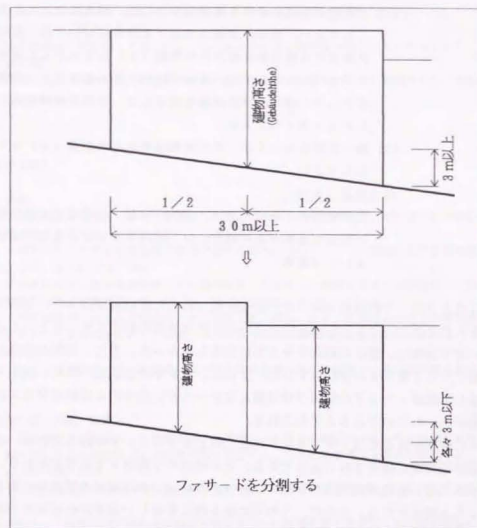


図1-2-3 建物高さと建物輪郭の測定

3) 建築クラスの変遷

1930年のウィーン州建設法制定のときの建築クラスは、5段階の建築クラスしかなかった。しかし一方で、法878には道路反対側からの距離に応じた高さ制限の規定、法879には例外規定、880には建物高さや建築指定線長さの関係に関する規定があった。

1930年法における建築クラス（875）

- (1) 建築クラスは住居及び複合建築地域に定められる。また、法878から80によって定められた高さに従わない場合に適用する。

建築クラスⅠ	最低	4.5 m	最高	9 m
建築クラスⅡ	最低	10.5 m	最高	12 m
建築クラスⅢ	最低	14 m	最高	18 m
建築クラスⅣ	最低	17 m	最高	20 m
建築クラスⅤ	最低	20 m	最高	25 m

建築線等からの距離に応じた建物の高さ(§78)

- (1) 建築物の前面に空地を設けた場合には、建築クラスより次のように高くしてよい。即ち、建築クラスⅠ及びⅡにおいては、反対側の建築限界線または建築指定線からの距離(a)に2m足した高さ、建築クラスⅢ及びⅣにおいては、2mではなく3mとする。(中略)また、慣習として一階に店舗等がある場合には、各自治組織議会によって、さらに2m高くしてよい。
- (3) 第一区等においては、その建築線等からの距離(a)の2倍の大きさにしてよい。

例外規定(§79)

- (1) 記念建築物、公共建築物、病院、店舗、工場並びに景観保護及び造形に特別な効果がある場合には、建築クラスによる高さ規制を緩和してよい。(後略)・・・

このように、この規定は明らかに前面空地に応じた緩和規定だった。道路空間に光を入れようということ、高密度化への近代化政策の始まりだったといえる。一方で当時は、現法の建築クラスⅥは存在しなかった。また、現法の建築クラスⅡが、建築クラスⅠ及びⅢに分かれていた。これは、76年の法改正の時に、既存不適格建築を考慮して建築クラスⅤの位置づけは変えなかったが、全体的には高密度化を図ろうという意図があったためであると考えられる。

次に変化があるのは1956年の法改正のときである。すなわちこれは、戦災復興計画が建築線計画に統合されたときである。その時始めて建築クラスⅥが加わり、現在の建築クラスに近いものが出来上がった。これは、ウィーンの高層ビル建設を目標とするものでもあったと考えられる。さらに、この時に法§78にも新しい規定が付け加えられている。

1956年法における建築クラス(§75)

- (1) 建築クラスは住居及び複合建築地域に定められる。また、法§78から80によって定められた高さに従わない場合に適用する。

建築クラスⅠ	最低	3.2m	最高	7.5m
建築クラスⅡ	最低	8m	最高	11m
建築クラスⅢ	最低	12m	最高	14m
建築クラスⅣ	最低	16m	最高	20m
建築クラスⅤ	最低	20m	最高	25m
建築クラスⅥ		25m以上		

建築線等からの距離に応じた規定(§78)

- (3) 建築クラスⅤ及びⅥにおいては、前面の建築限界線あるいは建築指定線からの距離の2倍の大きさにしてよい。しかし、建築クラスⅤについては、25mを越えないこと。

また法§81は、30年法では§80であったのが76年法において§81となり、建物前面

【序-2 補註】

- (1) ウィーン工科大学のUniv.Doz.Dr.Dipl.-ing.Emerich SimoncsicsとUniv.Ass.Dr.Dipl.-ing.Voigt A.にヒアリング調査をおこなった。
- (2) 例えば、都市計画の分野に関しては、ウィーン工科大学出版の研究紹介冊子が発行されている。(参考文献100)
- (3) モーザー自身、その手法では都市形態を十分に記述できるものではないという問題があることは指摘している。

【序-2 参考文献】

(景観運動・思潮)

- 81 伊東孝：「住環境が住民意識に及ぼす影響(2)：鎌倉市の住民運動にみる」、日本都市計画学会学術研究論文集、8号、pp.13-18、1973
- 82 伊東孝：「戦後における都市景観運動と最近の新たな動向について」、日本都市計画学会学術研究論文集、9号、pp.199-204、1974
- 83 伊東孝：「戦後における都市景観運動：その事例分析：京都タワー問題と丸の内美観問題」、日本都市計画学会学術研究論文集、10号、pp.103-108、1975
- 84 伊東孝：「昭和戦前期における美観思潮とその機能性格・機能：主として東京における美観地区・風致地区の指定と都市美観による考察」、日本都市計画学会学術研究論文集、13号、pp.295-300、1978
- 85 伊東孝：「都市及び地域景観保全制度の展開課程と景観思潮に関する研究」、東京大学博士論文、1978

(景観規制誘導手法・行政・政策)

- 86 安田丑作、嶋田勝次、三輪康一：「建築デザイン誘導による都市景観形成手法とその評価に関する研究：神戸市における建築デザイン誘導事例を通じて」、日本都市計画学会学術研究論文集、21号、pp.463-468、1986
- 87 安田丑作：「都市景観形成のための計画構成と建築デザイン誘導に関する研究」、神戸大学博士論文、1990
- 87 鄭賢、紙野桂人：「建築規制が市街地の景観形成に及ぼした影響に関する研究：現行建築規制によって形成された市街地の景観分析」、日本都市計画学会学術研究論文集、第26号、pp.841-846、1991
- 88 中村和宏：「金沢市における条例に基づく景観行政施策に関する調査研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、第29号、pp.139-144、1994

(歴史的街並みの景観)

- 89 山岸常人、小野正俊、福川裕一、佐々木家、亀井伸雄：「環境の歴史性と都市の計画：その予備的考察」、日本都市計画学会学術研究論文集、10号、pp.97-102、1975
- 90 福川裕一：「伝統的街並みの道路を軸とした空間構成とその現代的意味：町並み保全の意味と方法に関する一考察」、日本建築学会計画系論文報告集、320号、pp.136-145、1982
- 91 岡島達雄、渡辺勝彦、小西啓之、菊地貞二、若山雄、内藤昌：「街並みのイメージ分析：日本の伝統的街並みにおける空間特性(その1)」、日本建築学会計画系論文報告集、379号、pp.123-128、1987
- 92 岡島達雄、渡辺勝彦、小西啓之、菊地貞二、野田勝久、若山雄、内藤昌：「景観構成要素とその景観評価への影響：日本の伝統的街並みにおける空間特性(その2)」、日本建築学会計画系論文報告集、383号、pp.134-140、1988
- 93 岡島達雄、若山雄、小西啓之、渡辺達夫、内藤昌：「景観構成要素とイメージとの関係(定性的分析)：日本の伝統的街並みにおける空間特性(その3)」、日本建築学会計画系論文報告集、399号、pp.93-101、1989

- #14 山崎正史：「近世初期京都のモニュメンタルな建築配置による都市景観構成に関する考察」、日本都市計画学会学術研究論文集、24号、pp.607-612、1989
- #15 片山律：「歴史的都市の都市景観評価と計画手法に関する研究：景観保護基準線による居住環境の視覚分析調査・鎌倉市」、日本都市計画学会学術研究論文集、28号、pp.547-552、1993

(街路景観)

- #16 窪田陽一：「街路景観の類型に関する構造分析」、日本都市計画学会学術研究論文集、18号、pp.331-336、1983
- #17 茅野耕治、後藤春彦：「商業・業務集積地における街路景観に関する研究：看板率と最大開口率を指標とした街路の類型化」、日本都市計画学会学術研究論文集、19号、pp.211-216、1984
- #18 舟越雄、横田洋：「街路空間における空間意識の分析（心理量分析）：街路空間の研究（その1）」、日本建築学会論文報告書、327号、pp.100-107、1983
- #19 舟越雄、横田洋：「街路空間における空間構成要素の分析（物理量分析）：街路空間の研究（その2）」、日本建築学会論文報告書、364号、pp.102-111、1986
- #20 舟越雄、横田洋：「街路空間における空間意識と空間構成要素との相関関係の分析（相関分析）：街路空間の研究（その3）」、日本建築学会論文報告書、378号、pp.49-57、1987
- #21 小長井由隆、川崎雅史：「輪郭線のラフスケッチによる街路景観の基礎的評価」、日本都市計画学会学術研究論文集、24号、pp.445-450、1989
- #22 矢田秀、仙田隆、国吉真哉：「街路空間におけるセットバックの形態と歩行線形に関する研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、25号、pp.637-642、1990
- #23 伊藤元之、藤原裕：「街路空間における自動販売機設置の実態とその分析：景観形成の観点から」、日本都市計画学会学術研究論文集、26号、pp.805-810、1991
- #24 小林正美：「京都の都心街路沿いの建物の形態・覆幕・サインに関する調査研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、27号、pp.499-504、1992

(広場の景観)

- #25 三浦金作：「広場を囲む建築物の用途特性と広場の類型化：イタリアの広場の空間構成に関する研究（1）」、日本建築学会論文報告書、366号、pp.82-94、1986
- #26 三浦金作：「視覚的構造よりみた広場の尺度：イタリアの広場の空間構成に関する研究（2）」、日本建築学会論文報告書、398号、pp.87-101、1989
- #27 小島淳、野基正、山川仁、秋山哲男：「大都市通勤鉄道における駅前広場景観の調査手法と景観評価に関する研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、26号、pp.427-432、1991

(景観に対する意識調査・評価・分析、SD法)

- #28 山田学、後藤正吉、平沢重、福川裕一：「都市景観のコントロール」、日本都市計画学会学術研究発表会、8号、pp.171-176、1973
- #29 北村真一：「街路の景観構成に関する基礎的研究」、日本都市計画学会学術研究論文集11号、pp.169-174、1976
- #30 青木隆二、菅谷康之：「景観研究学園都市の景観の分類と評価に関する研究：写真の分類と選択評価の試み」、日本都市計画学会学術研究論文集、15号、pp.295-300、1980
- #31 青木隆二：「景観研究学園都市住民の景観評価に関する研究：地図を用いた面接調査の試み」、日本都市計画学会学術研究論文集、16号、pp.385-390、1981
- #32 渡辺貴介、大下茂：「中小商業地における街路景観の改善方法の研究」、日本都市計画学会学術研究論文集、17号、pp.517-522、1982
- #33 丹羽富士雄：「ビデオを利用した景観の評価：キャンパス景観を対象にして」、日本都市計画学会学術研究論文集、17号、pp.499-504、1982
- #34 奥俊信：「瞬間視実験に基づく街路景観構成要素の分析：街路景観の視覚特性ならびに心理的効果に関する実験的研究：第1報」、日本建築学会論文報告書、321号、pp.117-124、1982
- #35 奥俊信：「街路景観構成要素の景観評価への影響について：街路景観の視覚特性ならびに心理的効果に関する実験的研究：第2報」、日本建築学会論文報告書、351号、pp.27-37、1985

この法改正は、第2章で取り上げるハース・ハウスを始めとする、特に第一区を中心とした保存地区における新しい建築を可能にした画期的な改正であると言える。

2) 外観に関する規定の変遷

この外観に関する規定は、ウィーンの歴史的な都市景観を守ってきた大事な法文である。というのは、1930年のウィーン州建築法制定の時から存在したものであるからである。当時の法においては、条文の(2)(3)は現在のものとほぼ同じである。それ以外のが多少異なっている。

建築物の外観について（30年法885）＜但し、下線部筆者＞

- (1) 工作物の外観は、その建築形態、建築材料、色彩において、その地域の都市景観の有する統一された形態を壊してはならない。永続的に存在する防火壁は、その地域の景観に相応しいものでなければならない。
- (2) 建築物の外装工事或いは建築物の設置及び除去が都市景観に何らかの影響を与える限り、当局の建築許可が必要である。建築線などを越えた部分の防火壁にそのような行為を行う場合には、地域集会の同意が必要である。

76年法には存在しなかったものとして、「地域集会の同意」がある。これは建築線などを越えた部分の防火壁についてのみのものであるが、現在はDプラン及びBプランの公開のみが規定されていることを鑑みると、注目に値する。即ち、建築線を越える行為については慎重であったことが伺える。市当局で何によって外観の規定を遵守しているのかを判断する基準を持っていない限りは、地域集会などにおける公聴会や展示によって、市民の意見を仰ぎ、建築家のやろうとしていることについて同意を得るという手続きを踏むことなしには、建築の平等性・民主性が担保されないからである。恐らくこの規定がなければ、「あちらではできて何故こちらではできない」という議論が出るであろう。30年法におけるこの規定は、一種の建築協定のようなものであると理解できるが、どのような形で運用されていたのか興味がある部分である。また、何故この規定がなくなったのかも明らかにすることが望まれる。今回の調査では調べられなかったが、今後の課題の一つということができるだろう。

76年法及び現法を通じて言えることであるが、建築線などを越えることができる建築の部分及び建築クラスの緩和についてと同じで、タウンスケープに関する制限を越えることができる多くの手法が用意されかつそれがタウンスケープに調和することを今世紀の初頭から推進しているにも関わらず、それらの規定を満たすための基準や審査するためのシステムが確立していないために、全ての建築家に平等のチャンスを与えること、新しい試みをより普遍的に行うことができないことが問題であると言える（これは、第2章で扱うハース・ハウスの事例によってより明らかに）。ウィーン州建築法の、特にタウンスケープに関する部分における、最大の問題点である。

1.2.4 一般規制を越える近年の建築家の活動

ここでは、近年のウィーンにおける著名建築家の活動のなかで、建築線等や建築クラスを越えており、かつ現代的な建築で法85の外観に関する規定において、「時代の様式に則った」建築とみなされるものについて事例をあげておく。

1) ルーフトップ・リモデリング (1989年)

ルーフトップ・リモデリングは、建築家コープヒンメルブラウによる既存建築の屋上に増築をおこなった弁護士のための事務所である。これは、建築の屋内部分については建築線を越えていないが、屋根の底の部分の構造が建築線を越えている。図1-2-4はこの敷地のFプラン・Bプランであるが、これと写真1-2-4及び写真1-2-5とを比較してみればそれは自ずと明らかである。

<建築概要>

所在地 : FalkestraÙe 6, A-1010 Wien
 発注者 : Dr. Walter Schuppich
 設計者 : Coop Himmelblau
 延面積 : 400㎡
 構造・階数 : RC・S造、屋上1階
 設計期間 : 1987~1988年
 施工期間 : 1988~1989年

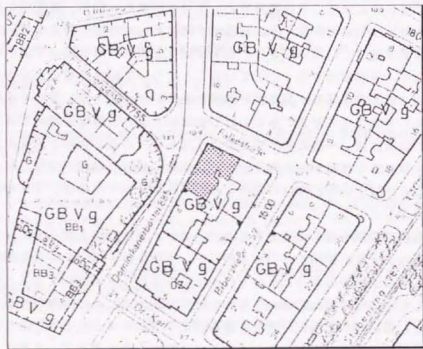


図1-2-4 ルーフトップ・リモデリングの敷地にかかるFプラン・Bプラン

【出典 : Magistrat der Stadt Wien, MA21 — Flächenwidmungs- und Bebauungsplan, Plandokument Nr. 5992, 23. Nov. 1989, Pr. Z. 3318/89】

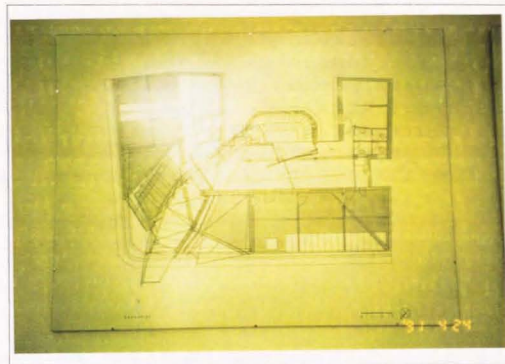


写真1-2-4 ルーフトップ・リモデリング平面図



写真1-2-5 ルーフトップ・リモデリング内部

2) Zバンク・ファボリッテン

この事例は、建築家ギュンター・ドメニク設計の銀行であり、ウィーンの副都心でもある第10区を中心商店街に立地している。Fプラン・Bプラン(図1-2-5)と写真1-2-6を比較すれば分かるように、この建築は建築線を越えている。しかもその大きさとその形態とは非常に特殊なものである。この地域は、比較的新しい地域であり、保存地区にも指定されるような所ではなく、周辺にエルケアを有するような建築は全くない。建築線を越える範囲が1/3を越えているので、法883のエルケアとみなすこともできない。また、この建築は設計及び工事期間が1975〜79年であることから、特別規定(BB)によって実現したものでもない。以上より客観的に判断して、法885(1)の「地域の都市景観の有する統一された形態を壊してはならない」とする外観の規定からも逸脱していると思われる。

しかしながら、最終的な建築許可図面(写真1-2-6)によると、当該建築物の横線(窓枠の線)の一部を両側の建築物に合わせることを条件として、例外的に許可を得ている。この建築許可のプロセスについては建築許可図書にも十分な記述はされていない。また、それに対する周辺住民の反対運動も展開されていない。しかし恐らく、立地場所が比較的新しい地域であり、新しいサブセンターとして位置づけられていた地区に立地しているために、ランドマークとして建設されることが期待されたものであると思われる。

このように、Zバンク・ファボリッテンは建築線等の規定からは大きく逸脱しているにも関わらず、都市計画上何ら特別な処置をしていないので、法的に問題のある建築である。最終的には例外的にその建築許可が下りたが、真に民主的で市民の参加が実現するようなまちづくりが展開されるためには、現状のウィーン州建設法は大きな問題を抱えていると指摘することができる。

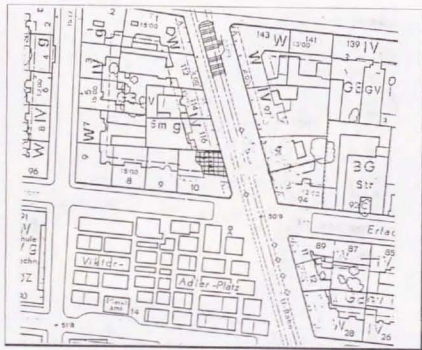


図1-2-5 Zバンク・ファボリッテンの敷地にかかるFプラン・Bプラン

【出典：Magistrat der Stadt Wien, MA21 — Flächenwidmungs- und Bebauungsplan, Plandokument Nr. 5992, 23. Nov. 1989, Pr. Z. 3318/89】



写真1-2-6 Zバンク・ファボリッテン

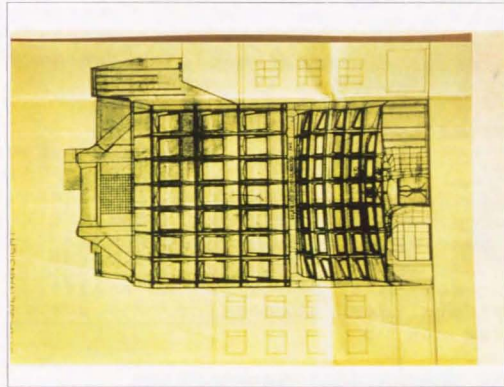


写真1-2-7 Zバンク・ファボリッテン立面図

【建築許可図面より】

第3節 保存地区と特別規制

1.3.1 保存地区の法的位置づけと変遷の概要

1) 保存地区の目的

保存地区の目的については、法文そのものには直接書かれていないが、MA 19 がまとめた保存地区に関する文献の中に、次のように記されている⁽¹¹⁾。

ウィーンは、ウィーン州建設法57によって、記念物保護とは独立して、その外観に関する都市景観の保護のために、Fプラン及びBプランの中に保存地区という形で保存する価値のある都市の部分と定めることができる。この規定は、形態的に価値のある、完結した地区の保存に貢献しており、ある都市の部分、街並み、街の家並み、街路空間及び緑地空間の形態の保存のために役立てられるだろう。

それ自身が完結しているものは保存される。それは即ち、保存地区においては、一方においては建築物を保存することができ、また他方においてはその建築様式或いは建築形態について特別の意味はないが、その外観が都市景観に肯定的に影響を与えているようなものは保存対象になる。

【出典：参考文献12、"1. Einleitung", 11.1-22】

すなわち、保存地区は記念物保護とは異なり、どちらかという街並みにおいて貢献するものであれば、単体であろうが群であろうが、それ自身が完結したものであれば保存地区指定の対象になるのである。これは我が国の伝統的建造物群保存地区の枠組みと似て異なるものである。ウィーンという歴史的環境が整っていて、そういうものの保存に歴史的意識を払っていて合意を得やすい都市ならではの法制度である。

2) 保存地区の変遷とその背景

1972年、60年代の無制限な交通流入から都心部を守り、歴史的遺産である市街地の景観を保存するため、保存地区が定められた。従ってこの保存地区は、都心部の歩行者天国化及び一方通行などの交通体系の再構成と同時平行的に進められた⁽¹²⁾が、目的自身は特に歴史的景観の保全に重きが置かれている⁽¹³⁾。そのために、保存地区の制定のために保存すべき建築物のファサードについて調査が行われている。図1-3-1は、そのアウトプットである。

さて、この保存地区の導入も、法体系の中では段階的に進められたようである。

まず1972年法では、保存地区は、都市計画の手法として、Fプラン、Bプランに並ぶものとして位置づけられている。

州法：歴史的市街地における保存地区の制定に関する規則

1972年7月7日において、法は、ウィーン州建設法に、歴史的市街地における保存地区の制定に関する規則を設ける。(中略)

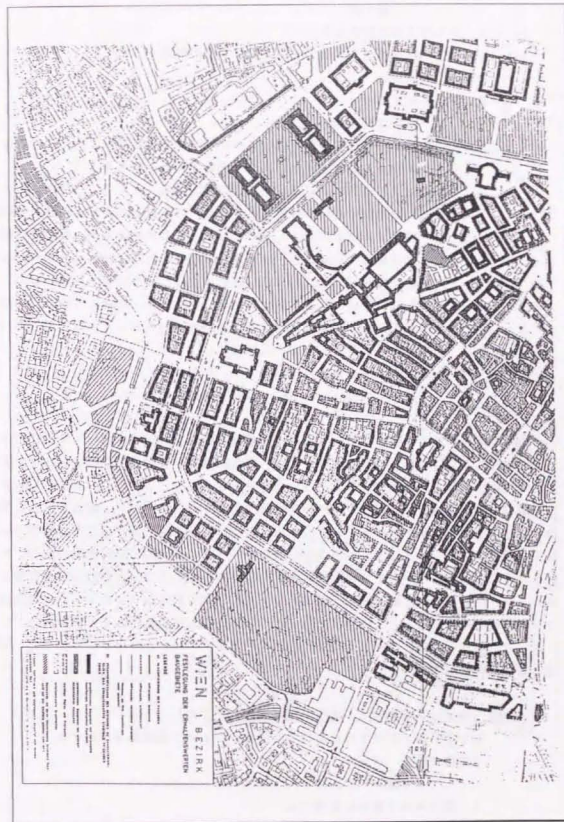


図1-3-1 保存地区制定のための第一区の建物ファサード調査

【出典："SCHUTZZONENPLAN WIEN, 1. Bezirk".

Bundesdenkmalamt: B. Reichhardt u. W. Blauensteiner, 1967, No. 1606】

第1章

1. § 1 の上書きに記すこと:

「Fプラン、Bプラン、保存地区の制定」・・・・・・(*)

・・・・・・(中略)・・・・・・

8. § 7 に記すこと:

「保存地区」

§ 7. (1) Fプラン、Bプランには、その地域の都市景観によって、その外観を保存する地域(保存地区)を定めることができる。

11. § 60 の第1項には次のg)及びh)を付け加える:

g)保存地区における建築物の変更は、ある建物の外観、特徴あるいは様式に影響を与える。その許可は、その建物の外観、特徴及び様式、特に規模(Maßstab)、リズム(Rhythmus)、比率(Proportion)、技術的な形態(Technologische Gestaltung)及び色彩が保たれるか、§ 5 Abs. 3 c)と § 7 Abs. 3 が厳守されるか、建物の外観が、街路の同じ側あるいは反対側の建物と同化される時に与えられる。それ以外のときは許可は与えられない。

【出典: Landesgesetzblatt für Wien, Jahrgang 1972,

Ausgegeben am 29. September 1972, 16. Stück】

この時に定められた保存地区は、それまでの戦後の戦災復興計画における再開発によって次から次へと乱開発され、街並みを考えない近代的高層ビルが建設されていっている状況に歯止めをかけるために制定されたという背景がある。従って、当時の第一区のBプラン(図1-3-2)を見ると、保存地区の指定の範囲が示されているが、「建築禁止」と書かれていて、土地の凍結を図ったことが分かる。これはある意味で非常に強引な手段である。民主主義の国が行ったとはとても思えない方法であるが、地理的に東にも近いこと、オーストリア第一政党のオーストリア国民党が第一共和国時代のキリスト教社会党の後身であるカトリック的保守政党であって、国民的に保守的な国であること、ウィーン州建設法がウィーン市のみを対象とした建設法であるところに成功した所以があると思われる。

さらに、1976年には、ウィーン州建設法の大改正が行われ、Fプラン、Bプラン、保存地区の関係が再編された。

州法: ウィーン州建設法: 改正(新建設法1976)

1976年4月30日において、法は、ウィーン建設法を改正する

(建設法改正 1976)

・・・・・・(中略)・・・・・・

7. 第1章の上書きに記すこと:

「都市計画」

8. § 1 に記すこと:

「Fプラン、Bプランの制定」・・・・・・(*)

12. § 5 に記すこと:



図1-3-2 1972年法当時の保存地区(第一区)図面

【出典: Magistrat der Stadt Wien, WA21 — Flächenwidmungs- und Bebauungsplan Plandokument Nr. 5265, 30. Nov. 1973, Pr. Zl. 3647/73】

「Bプランの内容」

§5.(4) 第2、第3節に付け加えて、Bプランは以下の規定を含むことができる。

a) 保存地区

b) (中略)

【出典：Landesgesetzblatt für Wien, Jahrgang 1976.

Ausgegeben am 14. August 1976, 17. Stück】

この1976年法以降、Bプランにおいて、特別規制(Besondere Bestimmung[BB])をかけることができるようになっていく。これは、保存地区の中において、一般規制による規制ではうまくコントロールできないものをコントロールするためのものであり、一般規制より厳しいものもあれば、緩和するもの、新しい施設を入れることが出来るようにしたものなど、その種類は豊富である。

以上のことから、次のようなことがいえる。保存地区は、1972年法ではF・Bプランに並列して同等の権力を持つ形で独立して設けられた。これは、保存地区をF・Bプランに並ぶ強力な制度として確立させ、都心部の開発を凍結することを目的としている。つまり1972年法では、単に保存地区をFプランとBプランの上に被せるだけのものに過ぎなかった。これでは、保存地区がF・Bプランと独立しているのに、連動させて計画することができない。そこで、現実的な実効力を持たせるため、1976年の法改正の時に、保存地区をBプランの附属規定の一つとし、Bプランの他の規制と組み合わせ、厳しく都市景観を規制・誘導することができるようにしたのである。一方で特別規制という、より柔軟なコントロールができる手法も用意している。

この全体の枠組みは現法においても変わっていないが、その中身において、1987年にハース・ハウスを契機として法の改正が行われた。1976年法では保存地区内はBプランと連動する厳しい景観規制により、新築や改修の許可を受けるためには、既存の建物をそのまま保存するか、周辺の建物と似た形態、様式、色彩で計画しなければならなかった。しかしこれでは、歴史的都市として存在しえても、現代社会の多様なライフスタイルや活動には対応できない。新しい様式を歴史的市街地に対応する形で挿入しようという建築家及び都市計画家の意見もあり、それに対する住民の反対がありながらも、歴史的地区であるウィーン都心部を現代社会にも対応する都市として再生するための法改正がおこなわれた。この中で最も大きい変更事項は外観に関する規定に対してであり、さらに建築許可と都市計画及び都市専門委員会に関する規定の部分に、それを補う為の内容が付け加えられている。

州法：ウィーン州法改正(第2回建設法改正1987)＜但し、下線部筆者＞

1987年6月24日において、法は、ウィーン州建設法を改正する
(第2回建設法改正 1987)

. (中略)

5. §60(1)e)の第二文に記すこと

建築許可は、外観、建物の特徴及び様式、特に規模、リズム、比率、工

学的な形態、色彩がそのまま守られ、法§5(4)及び§7(3)による規定が遵守され、かつ法§85(5)が一貫したときに与えられる。それ以外のときは建築許可は与えられない。

6. §67(2)に記すこと

(2)都市計画及び都市形態専門委員会は、ある建物が都市景観に相当な影響を及ぼすときには、市当局によってその建築の建築意図の監査に従事する。その時、専門委員会はさらに一人若しくは二人の建築家を加える権利を有する。

7. §85 Abs. 5に記すこと：

(5)保存地区における新築或いは既存建築の改修においては、前4項及び§5 Abs. 4並びに§7 Abs. 3. 4を従すことなく、時代の様式に照って建築物を都市景観に調和させるか、あるいは、建築様式、建築形態、建築高さ、屋根形状、色彩に関する工学的造形などについて街路の両側にある近隣建築物を考慮しなければならない

【出典：Landesgesetzblatt für Wien, Jahrgang 1987.

Ausgegeben am 8. Juli 1987, 21. Stück】

このように1987年法では、保存地区において、都市計画及び都市形態委員会の監視のもとに新しい建築を計画させることができる体制づくりを行っている。しかしながら、ここにおける新しいシステムは結局下線部の条文を付け加えることによっての合法化にすぎなく、真に民主的な手続きを法的に担保するものではない。都市計画及び都市形態委員会の権限を強めるようにするならば、その立場の中立化を保障するシステムを作らなければならないし、そうならないならば、住民との公聴会や討論会などが十分に行われるようにするか、若しくは客観的に判断するためのシステムを構築する必要がある。しかしながら、1987年の法改正ではそこまでの状態に達していない。まずはハース・ハウスを実現させ都市にインパクトを与えようという考え方が先行したように思われる。この点については第2章でより詳細に検討する。

1.3.2 保存地区の指定状況

1) 保存地区の指定状況

保存地区の指定は、1991年時点で83地区にのぼるが、その状況を指定面積(ha)で見たのが表1-3-1である。これは、保存地区の指定状況を区で整理してあるものを、第1区とその周りで第一区と隣接している第3～9区とそれ以外の第2及び10～23区に分けて整理したものである。これを見れば分かるように、保存地区指定の中心であるのはやはり第一区であり、その歴史的景観の保存が主たる目的である。しかしながら、それは既に100%に達しているため、現在はその周辺の整備に視点が移っている。第一区以外の地区は、参考文献などを見るかぎりでは大きく五つに分かれる。まず一つは第一区と同じように都市化された歴史的建造物群による地区である。そうした建物群のファサードの保存によって街並みを残すというものが多い。次に都市化された部分に点在するかつての集落である。特に教会を中心に形成されたものが多いが、石壁や雰囲気の良い飲み屋があり、年に数回祭りが開かれる。第三に、郊外に存在する優良なジードルングである。カールス・マルクス・ホーフがその代表例といえるだろう。第四に郊外の良い住宅地である。田園都市的なものと考えてよい。第五にウィーン郊外に存在する集落の保全である。こうしたものへの指定の数は、保存地区制定後15年においてもなお増加の傾向があり、保存地区に対する期待があることがうかがえる。

表1-3-1 保存地区の指定状況

【出典：参考文献12】

	区面積(ha)	指定面積(ha)[1986]	指定面積(ha)[1989]
第1区	300.96	300.96 (100.0%)	300.96 (100.0%)
第3～9区	1,841.90	253.15 (13.7%)	299.10 (16.2%)
第2,10～23区	39,352.45	467.80 (1.2%)	584.61 (1.5%)
ウィーン全域	41,495.31	1,021.91 (2.5%)	1,184.67 (2.9%)

2) 保存地区の位置

保存地区の位置を図に落としたのが、図1-3-3である。その分布はドナウ川より南西に多く分布しているが、それは、ドナウ川より北東側はドナウ川の氾濫地であり、かつては人がほとんど住んでいなかったことによる。現在そのドナウ川の北東に副都心を形成する計画が進行中であるが、その計画においてはあくまでも中心は第一区であり、そこがウィーンの人々にとっての生活の中心であるという思想が貫かれている。従って、この第一区をいかに計画していくかということは、ウィーンにとって重要な問題である。

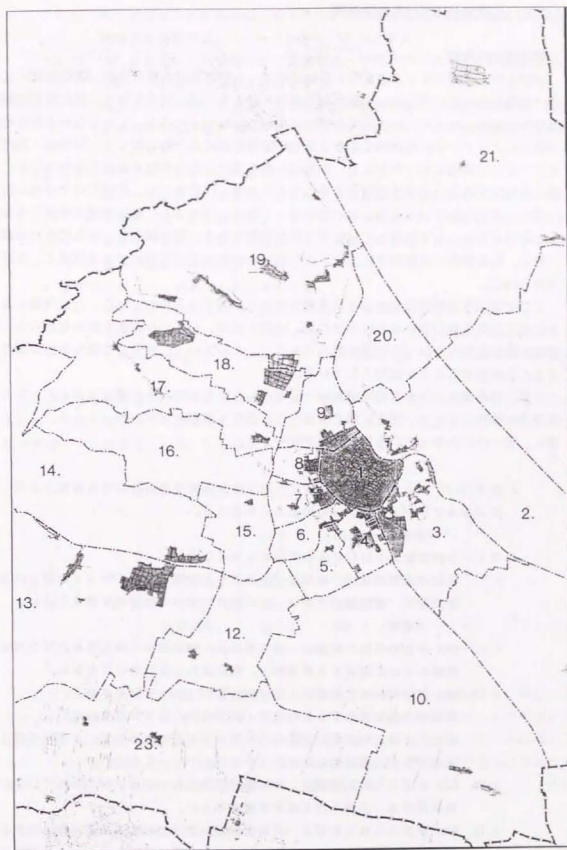


図1-3-3 1991年時点での指定されている保存地区の分布

【出典：参考文献14、p.8】

1.3.3 保存地区における特別規制

1) 特別規制の内容

前節までの考察により、歴史的に見るとウィーン州建設法は特に外観（都市景観）に対して意識を払っていること、一般規制の範囲を超える行為に対する規定も既に建設法制定当時からあり、ウィーンにとっては特別な規定ではなかったこと、しかしながら保存地区の制定によって、その地区内における規制の範囲を超える行為に対して、平等性・民主性などにおいて問題はありながらも、制限がかかる方向にその枠組みが変わりつつあること、歴史的地区である一方で生活の場の中心でもある第一区において、保存だけではない計画の手法が求められていること、などが分かってきた。そのような保存地区の枠組みのなかで、有効な手法として機能しているのが特別規制である。特別規制は、ある場合には厳しい方に、ある場合には緩和する方に、その地区の特性において対応できる手法として位置づけられる。

ここでは、その特別規制にどのような種類があり、何があるのかということを分類することと主な目的を置いていくわけではない。特別規制は、いくつか問題を含みながらも、建築家が保存地区内で何らかの建築的行為を行うことにおいて、非常に有効な手段に成りうることを検証することを目的としている。

まず、保存地区にかかる特別規制は、BBという記号で図面上に図示されるが、その保存地区の特性によって、例えば同じBB1でも異なる規制内容がかかってくる。ここでは特に、第一区にかかっている特別規制を検討する。

3. 法 875(2) により、BB1によって、以下の住所の不動産における街路ファサードに関するウィーン0mからの建物高さを定める。
..... (中略)
4. ウィーン州建設法 85(4)によって定められること：
 - 4.1. 外観と屋根形状は、保存地区の必要性と地区の外観を持って調整されるべきであり、建築物の要素は、この関係において建築線を超えてよい。
..... (中略)
 - 4.9. BB3 が定められた範囲は、高さが最高4.5Mまでの平屋建築が許可される。屋根がそれに到達する建築物は、陸屋根にしなければならない。
 - 4.10. BB4 が定められた範囲は、高さが最高18.20Mまで許可される。屋根がそれに到達する建築物は、陸屋根にしなければならない。
また、その上部の縁が与えられた高さより高くなければ、50%を超える範囲でも屋上庭園あるいは屋上テラスをつくってもよい。
 - 4.11. BB5 が定められた範囲は、本計画が決定される時点で同意されていない建築物の部分も、定められる高さを越えてよい。
 - 4.12. BB6 が定められた範囲は、地盤面から5mより上の空間を境界線を越える敷地に付け加える。これより下の空間は、公共の財産とする。この空間には、自由に通行することが妨げられない範囲で、構造的に有効でない建築の要素（柱、付け柱など）を配置することは許される。

- 4.13. BB7 が定められた敷地は、法 86 (6) により許される用途は利用してよい。建物の最高高さは、ウィーン0mから+16.5mとする。
- 4.14. BB8 が定められた敷地は、橋梁構造の下の縁までは交通帯に付加される。その上の敷地は公共交通用地とする。
- 4.15. BB10が定められた範囲は、各々の建設敷地地盤面から5m迄の空間は、特に柱を付けることなどはしないべきで、公共通行のための無制限の利用が保証される。
5. 法 85(7)により、次のことが定められる。
BB9 が定められた範囲は、二つの空間における用途が決定される。一つの空間は、地下駐車場であり、もう一つの空間はその上部の公共的な空間である。（中略）その駐車場のために必要となる出入口階段、ライト等は必要最小限のもののみ許可される。
6. 法 87(3)により、次のことが定められる。
6.1 BB2 の記された土地は、建設不可能の空地若しくは宅地である。

【出典：Magistrat der Stadt Wien M&T — Flächenwidnungs- und Bebauungsplan, Plandokument Nr.5991, 30.6.1989, Pr.Z.1708/89】

以上のような特別規制が、それぞれの保存地区でそれぞれの空間に適したように、定められる。上記の規制を、一般規制に対する位置づけ（強化あるいは緩和、その中間）と規制の対象とで分類すると、表1-3-2 のようになる。

表1-3-2 特別規制の分類（第一区において）

	高さ	用途	道路
規制強化	BB1, 3	BB2	BB8
中間	BB4	BB7	BB10
規制緩和	BB1, 5	BB9	BB6

これを見ても分かるように、その指定は多岐に渡り、地区の特性と計画する方向性によって使い分けを行っているようである。このように、特別規制はコントロールの対象と方向性においてかなりの自由度を有しており、建築家、施主、住民及び市当局との調整のなかで、その判断基準あるいは協議のシステムが確立できれば、民主主義に則った有効な手法として確立することができる可能性があると言えるだろう。

2) 特別規制によって許可される空間

次に、特別規制によって許可された空間を見てみる。図においては、左側がF・Bプランの図面であり、右側がそれによって達成されている空間の写真である。

これを見ても分かるのは、まず第一義としているのは、高さ規制によるファサードの保

存である。第二に、都市景観保全のために必要な施設（駐車場、交通施設など）の投資であり、第三に新しい空間の創造である。

特に建築物のファサードの保存は、群としてまとまりのある空間の保存に力を注いでおり、建築クラスVの指定があって、それより低いあるいは高い建物であっても、建築史的にあるいは都市史的に価値があると認められる空間については、積極的にそれを合法化する高さを指定し、しかもそれはcm単位で高さを定めている。特にそれをファサード部分に限定することは、住民の理解を得ることができる積極的な理由付けとなりうるとと思われる。



図1-3-4 特別規制（BB1）の例

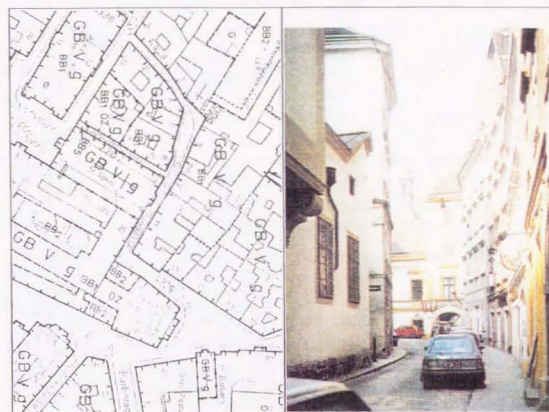


図1-3-5 特別規制（BB1）の例

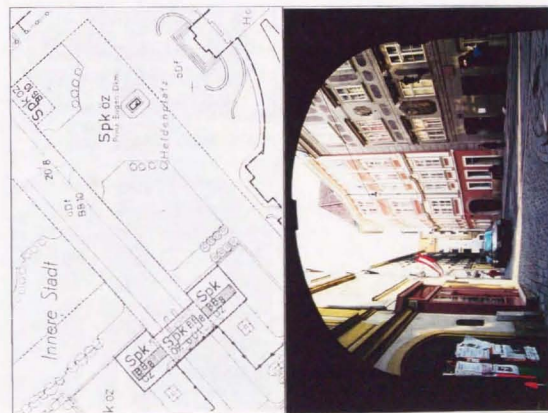


図1-3-6 特別規制（BB8）の例

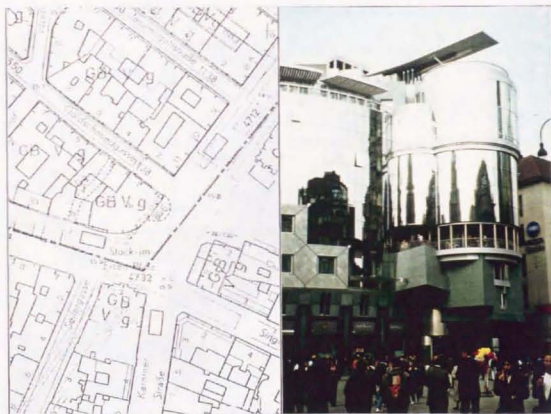


図1-3-7 特別規制 (BB 6) の例

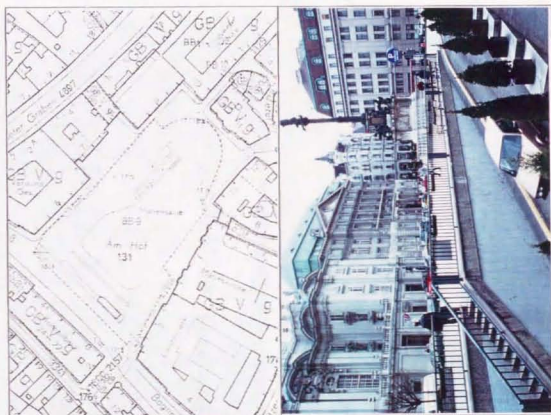


図1-3-8 特別規制 (BB 9) の例

第1章のまとめ ウィーン市都市計画制度の把握と課題

(1) 時代区分について

まず、第1節で述べたように、グルンデア・ツァイトの時期区分の仕方には幾つか説があるものの、時代的なくぎりのよさ、節目となることから1850年から1914年とする。さらに、都市計画及び建築に関する研究における多くの場合、前期グルンデア・ツァイトと後期グルンデア・ツァイトに区分し、1890年をその節目とすることが行われているが、本論文の分析編における時代区分においては現在までの長期にわたるウィーンの変遷を視点の一つとすることから、グルンデア・ツァイトを特に分けることはせず、1850年から1914年までをまとめて考えることにする。

次に、1914年以降であるが、戦争期をいつまでと捉えるかということが一つの大きな問題となる。そこで本論文における視点としては、ウィーン州建設法における戦災復興計画を中心に捉えることにする。既に第2節及び第3節に記述しているように、ウィーンの戦災復興計画は1947年にウィーン州建設法に特別規定として定められ、更に1951年により強力に推進するために、戦災復興法として建設法の中で形を変えて制定されている。その後1956年に、ある程度の成果を得たということにより、戦災復興計画は停止され、Bプランの枠組みも建築線計画(Baulinienplan)と建設計画(Aufbauplan)の2本立てを統合し、1つのBプランとして再編している。一方、オーストリアの独立が1955年であったということも考慮して、本論文ではウィーンの「戦争」の時期は1955年まで続いたと考え、戦争期を1914年から1955年までとする。

さらに、都市の発展・拡張の時期であるが、1955年以降市内における建設活動はピークを迎え、近代建築が次々と建設されていくが、1972年に保存地区が制定され、特に第一区における開発の凍結が図られる。その後、1976年に保存地区が改正され、ウィーンの都市の再編成が進められたこと、時代としての区切りが分かりやすいことを考慮し、次の節目を1975年とすることにした。

以上より、分析編における時代区分を次のように設定する。

グルンデア・ツァイト以前	：	～1850年
グルンデア・ツァイト	：	1850～1914年
戦争期	：	1914～1955年
都市発展・拡張期	：	1955～1975年
都市再開発・再編成期	：	1975～現在

(2) ウィーン州建設法について

本章においては、ウィーン州建設法における特にタウンスケープに関する都市計画システム及び建築コントロールについて整理し、歴史的及び制度的に考察を行った。その結果、ウィーン州建設法の特徴およびそれによって実現した空間について、次のことが分かった。

- ① オーストリアの建築・都市に関する法制度は、ドイツの連邦建設法が制定された以前のシステムに似ていて州ごとに独自の建設法を持っているが、規制の内容、その表現の仕方、及び運用において独特のものであること。
- ② ウィーンが州であり市であると同時に、その範囲の大部分が高度に都市化されているので、ウィーンの事情に特に対応したきめ細かい、しかし一方では特異ともいえる都市計画及び建築行政を行っていること。
- ③ 建設法が制定された1930年の時から都市景観に対して重みをおき、「外観に関する規定」を古くから設けていた一種の「景観法」であること。
- ④ 景観を創造していく方法として、Bプランには建築線等と建築クラスとがあり、さらにそれらを越えて建築することが1930年の制定時からメニューとして用意されていたこと。
- ⑤ そのような手法も、1972年の保存地区制定及び1976年の建設法再編の中で運用上変化し、特に建築線等を越える行為などは、そのような事例が見られる地区においてしか運用されなくなってきたこと。
- ⑥ 1976年法以降、建設法における建築家の活動をコントロールし、タウンスケープを制御する枠組みとしては、一般規制（全ての地区に適用）の枠組みと特別規制の枠組みの2つがあること、保存地区も一種の特別規制であること（図1-4-1）。
- ⑦ 保存地区の目的は「景観の保全」に主眼が置かれていて、それを強力に進めるために1976年法によって保存地区はBプランの附属決定の一つとなり、他の特別規制と合わせて柔軟に計画できるようになっていること。
- ⑧ 規制緩和あるいは規制を越える行為に対する監査役として、都市計画及び都市形態専門委員会が存在する。また、Fプラン・Bプランの策定及び建築許可のプロセスにおいてもこの専門委員会の存在が重要である。しかし、市長によって選任される事を考えると、市長の私的顧問団体にすぎない。即ち、その客観的立場が担保されていない。従って、公共的問題に触れる建築の監査を行う立場としては、民主性と平等性において問題があると思われること。
- ⑨ この民主性及び平等性の問題を解決する方法として、公聴会や展示などの公共性に関する手続きをより充実させ、民意を十分に考慮し、大多数の市民に認められる空間を作り上げていくようにするか、若しくはその審査のプロセスにおいて、客観的に景観への貢献度を審査をすることができる、出来るだけ単純で分かりやすいが、景観を高めていくことが出来るプログラムを作り出す必要があること。
- ⑩ 「外観に関する規定」も同様で、建築家、都市計画家及び市当局の自由裁量が

大きく範囲として重要であるけれども、その判断基準が曖昧で、リズム・プロポーション・様式などに関して考慮することという程度なので、景観論争などの種になりやすいこと（例えば、あちらで出来たのに、何故ここではできないのか、とか、その規定のお陰でこんな建物ができてしまった、とかである）。

以上により、ウィーン州建設法における特に都市景観に対する計画誘導・規制のシステムと制度の内容について、歴史的に考察し、その特徴及び問題点について理解し、考察することが出来た。それは大きく①一般規制と②特別規制の枠組みに分けることができ、その中でも特に、①では「外観に関する規定」「建築線」「建築クラス」、②では「特別規制」による特別許可が、ウィーン市都心部のタウンスケープにおけるデザインエレメントをコントロールする上で重要な手法であり、逆にいうと建築家がタウンスケープを考慮しながら建築デザインを行う上で最も左右され、かつ活用可能性がある規制であることが分かった。

	一般規制	特別規制
都市計画 F/Bプラン	<ul style="list-style-type: none"> ・土地利用 ・建築線等 ・建築クラス ・建築方式 	<ul style="list-style-type: none"> ・保存地区 ・出入口 ・高さ ・通路
建築	<ul style="list-style-type: none"> ・許可手続き ・高さ制限等 ・建築線等を越えてよい部分 ・外観規定 ・構造・設備 	<ul style="list-style-type: none"> ・保存地区内の特別処置

図1-4-1 ウィーン州建設法の枠組み

しかしながら、本章で取り上げた事例を見ると分かるように、建築自体の試みとしてはユニークで面白いが、法的規制における一般常識および民主的解決の範囲において、法制度の運用が常識を逸脱しているものも見受けられる。これらは非常に特殊な事例でもあるので、一般化するのは困難であり、またそのような手法を今後どのように活用すべきであるのか具体的な方法が見出せないというのが現状のようである。しかし、こうした特殊事例をそのまましておくのではなく、慎重に再評価を行い、その活用の可能性を広げていくことは必要である。そうすることによって、特殊事例が単なる特殊事例ではなく、多くの建築家に可能性を与えるものになり、「建築の自由」も自由度が高くなることが期待で

きるからである。また一方で、ウィーン市都心部のタウンスケープというどちらかという
と「統一性」の方が優先されているタウンスケープにおいて、「多様性」が高まり、変化
と個性が生れてくると思われる。こうしたものがどのように法的手続きが行われ、また
行政指導などを受けて実現したか、今後の研究が必要である。

特に、ハース・ハウスのようなウィーン市都心部の真ん中に立地し、特別規制が適用さ
れ、さらにドブラン・Bプランばかりでなく法制度の改正によって実現し、それに対し
て住民の反対運動が展開された事例について再評価することは、重要であると思われる。
なぜならそれによって、ウィーン市民のタウンスケープに対する考え方が分かり、法制度の
持つ問題点も理解でき、その解決のための具体的方法をどのように検討すればよいのかも
浮かび上がってくる事が期待できるからである。

以上より第2章では、特にハース・ハウスの建設経緯において展開された試論を整理す
ることによって、ウィーン市都心部のタウンスケープに関する具体的な問題点やその解決
策を模索するための知見を得ることを試みる。その前段階では、ハース・ハウスの事例を
より浮かび上がらせ、一般化させるために、戦後の近代建築の建設や歩行者天国の整備、
さらに近年のケルトナリング・ホーフにおける試論についても整理を行う。

最後に、ウィーンの法制度に関する今後の研究課題としては以下の事があげられる。

- ①個々の規定の内容についてより深く理解するために、その制定の経緯と背景お
よび議論された内容を、例えば州議会における議事録などによって整理し考察
すること。
- ②都市景観に対するその配慮の仕方に関する問題点および新しい可能性などに
ついて論ずるために、ウィーン市における建築許可の運用や住民との協議をより
多くの事例について整理し、何に対してどのような指導があったのかを理解す
ること。
- ③ウィーン州建設法の特異性あるいは類似性などをより鮮明に理解するために、
オーストリアの他の州の建設法と比較・検討すること。

【第1章 補註】

- (1) 参考文献8の目次参照
- (2) 参考文献6、p.381
- (3) 参考文献6、pp.355-365
- (4) 参考文献6、p.358
- (5) 参考文献6、pp.365-366
- (6) 参考文献11、12参照
- (7) 図面が赤で描かれるので赤図面(Rotdruck)、緑で描かれるので緑図面(Gründruck)と呼ばれている。
- (8) この概略は法82に記されているが、特にドブラン・Bプランの策定に関する部分については、
MA19の Scheuchel氏へのインタビューを基にしている。
- (9) MAとは Magistratの略で、「部署」のことである。全ての「部署」には番号が付いてあって、
ウィーンではそれでどの部署かを判断するようになっている。番号主義である。
- (10) ドイツのBプランについては、参考文献13 pp.58-87によった。これによると、西ドイツの場合、
完全階、最高高さ及び最低高さ、建ぺい率と許容建築面積、容積率と許容延べ面積、体積率
と許容建築体積を組み合わせて指定できるとなっている。
- (11) 参考文献12、「1. Einleitung」、11.1-22
- (12) 保存地区の制定は都市の交通基盤をおろそかにしては問題解決にならない。従って、一方通行シ
ステムの整備、地下駐車場の整備、路上駐車場の管理、地下鉄の整備など、多くの交通計画が同時
に進められた。詳しくは文献8参照のこと。
- (13) この点については、1992年にMA19がまとめた保存地区に関する文献の序章(参考文献12
:「1. Einleitung」、11.23-25)において次のように記述してある。
「(前略) 都市景観は、ある地区の外観表現の中で、保存地区制定のための基準として引
き合いに出される。(後略)」
- (14) 1991年、住居地区(Kohnzone)という概念が、保存地区に並んで設けられた。これは、第1〜9区
及び20区の住居地域または複合用途地域で、保存地区の指定されていない地区について、商業
・業務などの侵食から既存の住居を保全するために、制定されたもので、住居地区が指定され
ると、その地区内の建築物の主要階若しくはその一部は、住宅以外の用途を認めないというもの
である。この住居地区は、直接本論とは関係ないもので、本文では省略する。

【第1章 参考文献】

- #1 Wolfgang Braunfels, "Abendländische Stadtbaukunst Herrschaftsform und Baugestalt",
DuMont Buchverlag GmbH & Co., Kommanditgesellschaft, Köln, 1978;
- 日高健一郎訳(1986)、「西洋の都市 ― その歴史と類型」、丸善、pp.279-293
- #2 Steen Eiler Rasmussen, "TOWNS AND BUILDINGS described in drawings and words", The MIT
Press, 1949;
- 横山正訳(1993)、「都市と建築」、東京大学出版会、pp.145-149
- #3 川向正人(1990)「建築選考13 ウィーンの都市と建築 ― 様式の回路を辿る ―」、丸善
- #4 "DISKUSSION DER BEBAUUNGSTYPEN", p.4 (Magistrat der Stadt Wien, Geschäftsgruppe
Stadtentwicklung und Stadterneuerung, Magistratsabteilung 18 - Stadtstrukturplanung,
"BEBAUUNGSFORMEN und ihre städtebaulichen Kennwerte anhand von Wiener Beispielen",
Beiträge zur Stadtforschung, Stadtentwicklung und Stadtgestaltung, Band 16)
- #5 Wolf-Dieter Frei, "DIE GEBÄUDECKE ALS RAUMMARKIERENDES ELEMENT DER STADTGESTALTUNG
— Gezeigt am Beispiel der Blockrandbebauung Wiens", Dissertation an der Technischen
Universität Wien(Fakultät für Raumplanung und Architektur), Wien, 1991, pp.200-215
- #6 Kurt Wollnik, Hermann Reining Rudolf Wurzer, "PLANUNG UND VERwirkLICHTUNG DER WIENER
RINGSTRASSENZONE", Franz Steiner Verlag GmbH, Wiesbaden, 1980

- #7 F. Moser, R. Mayerhofer, W. D. Frei, "CHARAKTERISTIK DER STADTGESTALT WIEN — Grundlage für Stadterneuerung und Wohnbau", Forschungsbericht(Gekürzte Fassung), Gefordert aus Mitteln des Bundesministeriums für Bauten und Technik(Wohnbauforschung), Wien, 1985 pp.13-24
- #8 Civil-Ing. Peter SaOch: "Gesamtplan der Stadt Wien, Die kaiserl. königl. Reichs-Haupt- und Residenzstadt Wien, 1. Bezirk, Innere Stadt", 1870, No.1474.
- #9 Stadt Wien: "Innere Stadt Regulierungsprojekt — Baulinien-Antrag der Inneren Stadt mit Eintragung der genehmigten, beantragten und in Aussicht genommenen Baulinien und Kennzeichnung der öffentlichen monumentalen Gebäude, der Neubauten seit 1860", 1895, No.1618
- #10 Magistrat der Stadt Wien — Geschäftsgruppe Stadtplanung, "DIE STÄDTERAULICHE ENTWICKLUNG DER STADT WIEN IN BEZIEHUNG ZUM VERKEHR", Beiträge zu Stadtforschung, Stadtentwicklung und Stadtgestaltung, Heft 6, Wien, 1981
- #11 Bartaut Dieterich, Jürgen Koch: "BAULEITPLANUNG: Recht und Praxis", Deutsche Verlags-Anstalt GmbH, 1977, 阿部成治訳、「西ドイツの都市計画制度 —— 建築の秩序と自由」、学芸出版社, 1981
- #12 Magistratsabteilung 19: "SCHUTZZONENVERZEICHNIS DER RECHTSKRÄFTIGEN SCHUTZZONEN VON WIEN", Wien, 1992
- #13 Magistrat der Stadt Wien, Magistratsabteilung 18 — Stadtstrukturplanung: "ENTWICKLUNGSPLAN WIEN", Wien, 1985
- #14 Magistrat der Stadt Wien, Magistratsabteilung 19 — Stadtgestaltung, "STADTERHALTUNG: Ensembleschutz im internationalen Vergleich, Stadtplanung Wien", Beiträge zur Stadtforschung, Stadtentwicklung und Stadtgestaltung, Band 38, Wien, 1992

第 2 章

近年の建設活動から見た
ウィーン市都心部のタウンスケープに関する
議論の展開

第2章

近年の建設活動から見た

ウィーン市都心部のタウンスケープに関する

議論の展開

第1節 戦後の建設活動と都市景観

ここでは、第2節以降で整理するハースハウスにおける景観論争をより一般化するために、保存地区制定のきっかけをつくったリング道路沿いの近代建築、そしてオペラ座前の交差点計画とリング内の歩行者天国化、保存地区制定後の建築としてケルトナーリング・ホーフをとりあげる。まず、本章で取り上げる建築物の位置を図2-1-1に示す。

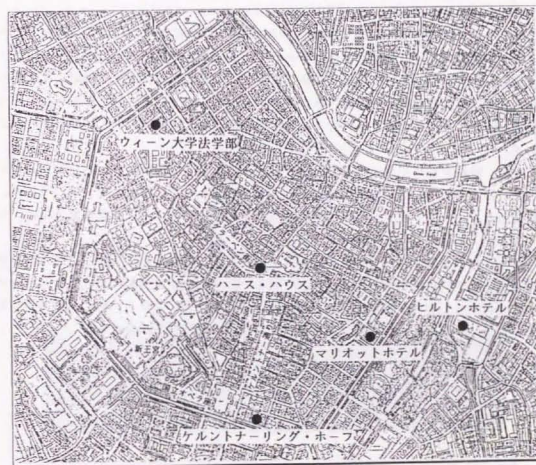


図2-1-1 本章で取り上げる建築物の位置

2.1.1 保存地区指定以前の景観論争

1) リング道路沿いの開発

第二次世界大戦後の戦災復興から保存地区制定前後にかけて、ウィーンにはリング道路の内外で次々と近代的な建築が建設されていった。マリオットホテル、ヒルトンホテル、ウィーン大学法学部などがその代表的な例である（図 2-1-1参照）。

マリオット・ホテル（写真 2-1-1）は、ペーター・ツェルニン(Peter Czernin)とハリー・グルック(Harry Gluck)の設計による、エントランスに吹き抜けのある大空間があり、プールやサウナなどが整備された近代的なホテルである。建物の高さは建築クラスで規制されていたので他のものとあまり変わらないが、グルンデア・ツァイト期に形成された街区を一つ占める大きさのなかで、ファサードの分割などが行われていないために、その規模の大きさが目につき、他の建築を圧倒するものがあり、景観論争を巻き起こすきっかけになった。

その後建設されたヒルトンホテル（写真 2-1-2）は、ウィーン市街地とウィーン空港とを結ぶターミナル（ウィーン中央駅）のターミナルホテルとして建設された。この建設は市の計画と密接に関係していたが、土地が民間であったために、その設計は土地の所有者の権利でヨーゼフ・フラヴェニエツカ(Josef Hlaweniczka)に決定した。その設計は、結局当時の市長には気に入らず、「民間土地所有者に、建築家を指名させないことはできないのか」と言わせたという¹⁾。

ウィーン大学法学部（写真 2-1-3）は1969年から83年にかけて、エルnst・ヒースマイヤーの設計によって建設された。キャンチ・レバーで浮いたようにみえるエントランスの部分が強烈な印象を与える近代建築である。この建物は保存地区の制定にまたがって建設された、貴重な存在の建築物であるが、グルンデア・ツァイト期に形成された一つの街区において、完結して建てられたために、周囲の建築との関係が弱く、許可されたようである。

一方、戦後もなくケルトナーリング通り5-7 に建設された旧シュタイヤー・ホーフ（写真 2-1-4）は、戦後復興計画による「落とし児」的な存在である。つまり、この建築物は、オーストリアの復興建築のシンボリックな建築で、長い開新車展示場のプロトタイプとなった建物²⁾である。

以上からすると、リング道路の内側外側に限らず、戦後の戦災復興時には、他の都市と同じように近代建築が次々と建設されていて、こうした建設活動によってウィーンの歴史的・古典的な街並みが壊されるという批判が1960年代半ば頃から出始め、歴史的な地区における建設活動の停止を決定する保存地区が制定されたことが分かる。



写真2-1-1 マリオット・ホテル



写真2-1-2 ヒルトンホテル



写真2-1-3 ウィーン大学法学部

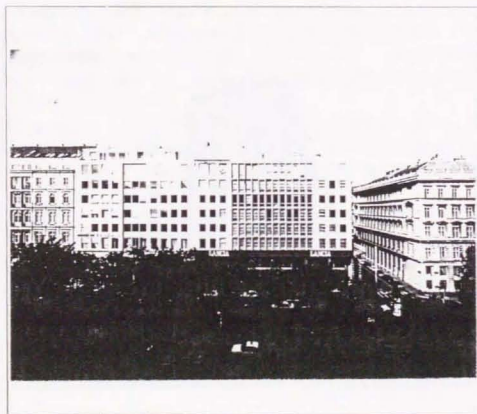


写真2-1-4 旧シュタイヤー・ハウス

2) 都市景観配慮への移行

以上のように、戦災復興計画と都市の近代化が進み、都市景観への配慮が問題となっていく中、市当局は1951年⁽⁴³⁾、61年⁽⁴⁴⁾、71年⁽⁴⁵⁾にウィーンの全体都市計画の見直しをおこなっている。それらを整理したのが表2-1-1である。51年には交通計画において地下歩行者通路の建設が言われている。61年にも同様のことがうたわれている。これらの計画は都心に集中する自動車交通の処理のための手段として行われたものであるが、後述するように都市景観と優れた建築に対する配慮から生まれたものである。また、1961年には都市景観の保存が計画意図として位置づけられるようになった。これは、保存地区の制定より10年も早いものである。都市開発プロジェクトの中でも古都の保存が計画されている。この中ではインナーシティだけでなく、周辺の村や集落⁽⁴⁶⁾も含めた建設資源とそのアンサンブルの保存がうたわれている。さらに1971年には法的整備を背景とした都市景観の保存計画へと移行しているのが分かる。

表2-1-1 ウィーン市全体都市計画の内容の変遷

【出典：参考文献#2、pp.15-19】

1951年	
都市開発計画	交通計画
<ul style="list-style-type: none"> ・都市区画整理 ・既都市街地整備 ・ウィーン市営大規模住宅開発 ・衛星都市開発 ・農村整備 ・建物高さの再調整 	<ul style="list-style-type: none"> ・都市高速道路 ・道路取り直し ・立体交差点の整備 ・道路改修及び延長工事 ・平面歩行者路整備 ・地下歩行者路整備 ・広場改修 ・路面電車整備 ・都市鉄道の延長 ・地下鉄建設
1961年	
都市開発計画	都市交通計画
<ul style="list-style-type: none"> ・都市の中心部形成 ・衛星都市及び大規模住宅開発 ・古都保存 ・工業地域再配置 ・都市緑地保存 	<ul style="list-style-type: none"> ・都市高速道路 ・幹線道路整備 ・地下歩行者路整備 ・広場改修及び路面電車網整備 ・立体的路面電車網の建設 ・地下鉄建設 ・都市鉄道の延長 ・高速鉄道(Schnellbahn)建設
1971年	
都市開発計画	都市交通計画
<ul style="list-style-type: none"> ・成長地域における線状軸構造の形成 ・古都保存法による古都保存と都市美保存 ・都市再開発及び土地利用法によるグルンデア・ファイト地区の整備 ・洪水対策用運河の建設 ・森林及び草原等の拡張 ・UNO-City 	<ul style="list-style-type: none"> ・都市高速道路 ・南駅の歩行者交通用中心部の形成 ・鉄道駅 ・高速鉄道網整備 ・地下鉄網整備

こうした全体的な都市計画の位置づけのなかで、それぞれの計画が多くの代替案の中から最も適したものが選ばれ実現に至っているのだが、その判断基準としては、最も都市に優しく、かつ都市にとって重要な空間を保存し、かつ活用できるようにすることであると思われる。奇抜で、時には都市空間を破壊するに至る可能性があるものは選ばれていない。その例として、オペラ座前の交差点計画とリング内の歩行者天国が挙げられる。

まず、オペラ座前の交差点計画は1952年に始まり、以下の3つの代替案に関する議論から歩行者用地下道が選択されるに至っている。

代替案1：リング道路をケルトナー通りの下をくぐらせる。

代替案2：ケルトナー通りをリング道路の下をくぐらせる。

代替案3：歩行者用地下道

代替案1及び2は、そのランプを作るためにオペラ座の周辺の空間を壊さなければならなくなる。従って代替案3が選ばれた⁽⁷⁾。これは当然の帰結である。

次にリング内のシュテファン広場を中心とするグラーベン街、ケルトナー通り、コールマルクト街の歩行者天国化であるが、これは1965年にMA 18が5グループの建築家⁽⁸⁾に依頼することによって始まった。彼らはそれぞれ一つづつの案を提出した。それらの案に対し、前ウィーン都市計画家Prof. Roland RAINERは次のように批評し、結局シュテファン教会周辺の舗装改善による歩行者天国化が進められるに至った。

「もしそれらの案が実現すると、シュテファン広場がなくなり、ウィーン市で最も意味がある建築でこれからも最も重要なシンボルである一つの教会の周りに四角形あるいは円形の穴が作られるだけになってしまう。地下鉄の出入口を周辺の建築物の中に移すのが、『最も目立たない』『最善の』方法である⁽⁹⁾」

<但し、下線部は筆者による>

このように、近代建築と近代都市計画への反省から、歴史的街並みの保存と都市景観への配慮へと建築と都市のパラダイムが移行してきた。その根底にある思想は、優れた建築あるいは都市空間を壊さないということである。新しく埋め込む機能が、優れたものに悪影響を及ぼし、決していいものにならないならば、『目立たない』ようにするというのである。それは新しい優れたデザインを欲していないということではない。そういうものは求められているのである。しかしながら、そのための最低限のルールは必要である。あるいは建築の自由を担保するために、ルールを越えるためのルールが必要であるといってもいいかもしれない。それは第1章で考察したウィーン州建設法の問題点にも通ずることである。そのステップアップのために、次に保存地区制定後のウィーンにおける建築活動を取り上げ、そこで展開した議論を検討する。まず、1993年に完成したケルトナーリング・ホーフについて簡単に検討し、第2節及び第3節で取り上げるハース・ハウスに関する議論をより明確にしたいと思う。

2.1.2 ケルトナーリング・ホーフ

ここでは、オペラ座の近くであるケルトナーリング通りに立地し、ウィーンにおいてハース・ハウスと違った意味で話題になった最近の建築であるケルトナーリング・ホーフを取り上げ、それに対するウィーン住民の特に景観に関する評価を、新聞・雑誌などに如何に取り上げられているかを整理し、ハース・ハウスとの違いを浮き立たせることを目的にしている。

1) 建設経緯⁽¹⁰⁾と建築概要

ケルトナーリング・ホーフは、ウィーンの一流ホテルであるプリストルホテルの横に立地している。このプロジェクトは、第2次世界大戦後に戦災復興計画によって完成した近代的な9階建てのビルディング（シュタイヤー・ハウス[Steyr-Haus]）が1987年に火災をうけたことを契機に始まった。1988年5月に、スイスの保険会社ヴィンタートゥア社はこの敷地とホテルプリストルの敷地の一部を買取り、建築家ホルツバウアーに新しい建築を委託した。幾つもの案のなかから、それらの建物を全て建て壊し、新しい建物を建設することが決定された。その計画は、3つ敷地をまとめて開発し、ウィーンの一部には今まで存在しなかった中心的な商業施設を建設することであった。その次の年の春、4月16日にホルツバウアーは、模型を建設局に持ち込み、ヘルムート・ツィルク市長、計画諮問ハネス・スボボーダ及び文化諮問ウルスラ・バステルクに見せ、建築許可を受けている。その後、隣敷地で計画・工事が進められていたANAホテルと2階部分の渡り廊下でつなぎ、連続したショッピングモールを形成することがMA 21の働きかけなどによって本格化し、1993年11月に完成した。

表2-1-1に建築概要を記す。

表2-1-1 ケルトナーリング・ホーフの概要

名称：	KAERTNERNERRING HOF (カエルトナーリング・ホーフ)
所在地：	1., Kärntnerring 5-7, Vienna
施主：	ヴィンタートゥア・ゲゼルシャフト社
設計者：	ヴィルヘルム・ホルツバウアー
共同設計者：	ゲオルグ・リッペルト（保険コンツェルンの専任設計者）
敷地面積：	
延べ面積：	
構造・階数：	地上8階、屋上2階、地下6階（内、4層駐車場）
総工費：	60億円（6億シリング）
設計期間：	1987～1990年
施工期間：	1989～1993年
建物用途：	オフィス、店舗（ショッピング・モール）、住宅 地下駐車場（300台）

施主がホルツバウアーに委託した建築の依頼内容は以下の通りである。

- ①オフィス、店舗、住宅を持つ複合商業ビルであること
- ②300台の駐車場を持つこと
- ③全入居者が直接窓を開けることができること（健康である建築）

また、Fプラン・Bプランでこの敷地にかけられている規制は、GB Y g（複合建築用途、建築クラス5、閉鎖型）と保存地区である（図2-1-1）。従って、景観的なことは、ウィーン州建設法885によることと、都市計画・都市形態専門委員会およびMA19によってのみ審査される。一方、当時ホルツバウアーは、法83に定めるところの都市計画・都市形態専門委員会の委員長であった。このことは、図面を作成し、審査を受けるにあたって、非常に有利なことであったといえる⁽⁴⁾。

2) 景観に対する考慮

都市計画及び都市形態専門委員会による建築物がタウンスケープに与える影響に関する審査は、審査委員が「良い」または「悪い」あるいは「ここを修正しろ」という判断を主観的に行い、客観的な「審査基準」はない。また、ケルトナーリング・ホーフの審査時の委員長はホルツバウアー自身であった。ホルツバウアー自身もこのケルトナーリング通りの美しさをかなり自負しているし、各種雑誌・新聞においてもあまり批判する記事は見られない。そうしたことを背景に、ここではケルトナーリング通りの景観に対する配慮事項とデザイン・コンセプトを、ホルツバウアーへのインタビューと、雑誌・新聞より理解できることから整理した。

- ①高さ規制を受けてる中で、従来の建物とほぼ同じくらいの容積を確保する必要があり、階数はリング道路の他の建築物より多くせざるを得ない。
- ②通常の設計では、隣接する建物と階数が合わないため、景観上調和しない可能性がある。近代建築は窓が小さい。
- ③一方、リング道路を始めとするウィーンの歴史的建築物の多くは、1、2階の高さが高く、中層部に規則的に窓が並び、あるいはロジャ、エルケアなどがあって、上部に屋根があるという三層構成になっている。
- ④従って、窓の大きさと位置を工夫し、景観との調和を図ること。
- ⑤また、ファサードはできるだけ薄い外皮のように扱うが、石を使うことによって、周辺建物に負けないようにすること。
- ⑥エルケアなどはつせず、ファサードの分割も明快にはしないこと。（窓の大きさの変化によって、分割を行う）



写真2-1-5 ケルトナーリング・ホーフ

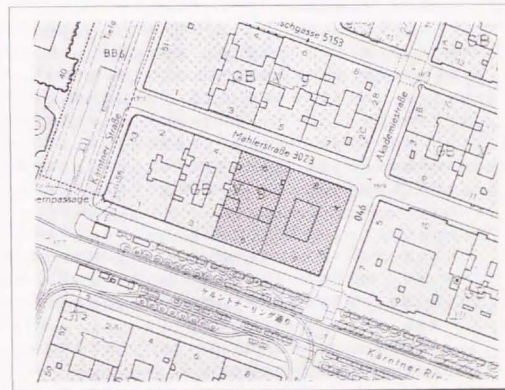


図2-1-2 ケルトナーリング・ホーフとその周辺にかかる法規制（1992年）

【出典：Magistrat der Stadt Wien — MA21-FLÄCHENWIDUNGS- und BEBAUUNGSPLAN,
Plandokument 5993, 23.Okt.1992, Pr.Z1.3436/92】

3)住民の反応

ここの目的は、ケルトナーリング・ホーフに対する住民の反応を検討することにより、上記にあげた当該建築物における景観への配慮事項が妥当なものであったかどうかを考察し、さらにそこからウィーン市都心部のタウンスケープの形成と更新におけるデザイン上の問題点と考慮事項について知見を得ることである。

対象文献

住民の反応については、公的な文書による発表はなく、ウィーンで発行されている雑誌と新聞によった。それは以下のものである。

1. profil : 建築雑誌 (参考文献 3、4、5)
2. Die Presse : 新聞 (参考文献 6)
3. Kurier : 新聞 [大衆紙] (参考文献 7)

以上の文献を建設前と建設後に分類し、住民からどのような評価が出ているかを整理した。また、本文の末尾の<>内に、その執筆者の立場を記しておく。何故なら、建築に対する意見は、その意見者がどのような教育を受け、今どのような立場にいるかによって異なると思われるからである。

住民の反応

<建設前の反応>

1989年4月16日は建築家ホルツバウアー氏の人生において喜ばしい日となった。それは日曜日だったが、「クローネン新聞」の27ページにウィーン市長ヘルムート・ツィルク氏の写真が掲載された。帝冠をかぶったカール6世のように誇らしげな彼は、巨大な建築模型を手にした市の父のようであった。「魔城シュタイヤー・ハウスに代わるモダンな建築：リング沿いの新しいガラス宮殿」とその横に書かれ、「ウィーン市長ヘルムート・ツィルク氏はそれを気に入った。彼はホルツバウアー氏の計画に心から感服している。」とあった。全ての建築家の夢、輝くばかりのアンサンブルで満たされたウィーンの真ん中、リング通りに建設するという夢が市長の保守的な手によって祝福された。

・・・中略・・・

「ウィーンにとって国庫型の質の高い建築への大いなる一歩である」というツィルク氏の短いコメントは声高らかにあった。しかしその記事の最後に記されていたのは、「設計図はさらに専門委員会をパスしなければならないのだが、(中略)ウィーンの都市計画及び形態専門委員会の議長はホルツバウアー自身なのである」という一文だった。・・・後略・・・

<建築雑誌 profil の建築評論家 Horst CHRISTOPH による記事>

【出典：Horst CHRISTOPH: "Wilhelm, der Erbauer", profil, Nr. 37, 11. September 1989, p. 92 (翻訳筆者)】

教授ホルツバウアー氏は、外壁に石のファサード、その後ろにガラスの箱体をデザインして、輝くような建築を計画した。

<大衆新聞 KURIER の記者 Christoph EDELMANN による記事>

【出典：Christoph EDELMANN: "Bald ein neues Gesicht für die Ringstraße — Wien-EXTRA-Gespräch mit Wilhelm Holzbauer über das 'Steyr-Haus'", KURIER, 19. Okt. 1990, p. 2 (翻訳筆者)】

このケルトナーリング・ホーフの計画及び建設作業だけで、現在の所有者ヴィンタートップ保険会社は去年の10月から1億5千万シリング(約15億円)を使っている。人々は仕事漬けである。諮問委員会は1993年の秋には開催すべきである。この建築は合計15億シリング(約150億円)かかるのである。そして、この建設工事においてはウィーンでは類のない「最も地下深く掘っている建設現場」である。

<高級新聞 DIE PRESSE の一般記事>

【出典："Wiens tiefste Hochbaustelle für neues 'Steyr-Haus'", DIE PRESSE, 23. Jan. 1991, p. 8 (翻訳筆者)】

<建設後の反応>

何100人もの見物人が新しい「ケルトナーリング・ギャラリー」の扉を通過して中に入ったとき、ウィルヘルム・ホルツバウアーにとって全ての建築家の夢が現実となったのだった。それはすばらしいウィーンのリング道路の片側に建っていて、世界の中でも最も輝いている建築アンサンブルの一つとして造形された。

<建築雑誌 profil の建築評論家 Horst CHRISTOPH による記事>

【出典：Horst CHRISTOPH, Ruth RYBANSKI: "Baukaiser Wilhelm", profil, No. 45, 8. Nov. 1993, p. 96 (翻訳筆者)】

ウィーンだけの大商業センターができて、市長ヘルムート・ツィルクは大喜びである。「私は、この建物は一つの澄んだ好感の持てる美的な言語を持っていると思う。」「ホルツバウアーは、天賦の才を授かった建築家である。」

<建築雑誌 profil の建築評論家 Horst CHRISTOPH による記事>

【出典：Horst CHRISTOPH, Ruth RYBANSKI: "Baukaiser Wilhelm", profil, No. 45, 8. Nov. 1993, p. 96 (翻訳筆者)】

その成功は必ず起こる。民俗帽子とローデンマントを羽織った数多くの人達(オーストリア人のこと)がこの新しい商業ビルにやって来るが、彼らの意見は一致している：「この建物はハース・ハウスよりはるかに美しい。」

<建築雑誌 profil の建築評論家 Horst CHRISTOPH による記事>

【出典：Horst CHRISTOPH, Ruth RYBANSKI: "Baukaiser Wilhelm", profil, No. 45, 8. Nov. 1993, p. 96 (翻訳筆者)】

(但し、()内は筆者による)

以上のように、このケルトナーリング・ホーフに対する評価は、特に建築評論家を始めとする知識人において、建設前も建設後も変わらず非常に高い。特にタウンスケープへの配慮やファサードのデザインは評価されている。一方で、容積確保のために地下を深く掘ったために建設コストが高かったことに対しては厳しい見方もあるようである。しかしながら、そのようにコストをかけて高さを周辺の建物に合わせて駐車場を確保し、ファサードの材料も石を使って周囲の古典的な建物に配慮し、その後ろにガラスを持つてくることによって現代性を表現したことはウィーン人に受け入れられ、一応の成功をおさめたと評価できるだろう。

さらに、上記の住民の反応をケルトナーリング・ホーフにおける景観への配慮事項及び第1章で整理したウィーン州建設法による規定と比較すると、次のようなことがウィーン市都心部のタウンスケープにおけるデザイン上の課題として浮かび上がってくる。

- ① 周辺との調和と統一性を意識した高さ規制（建築クラス）に対し、近代化に伴う高度利用の要求があること。
- ② そのために、地上階においては階高を押さえ階数を多くせざるを得ないこと。
- ③ 交通量の増加を見出し、ある程度の駐車場の確保の必要があること。
- ④ 建築線に基本的に合わせる必要があるが、そうして形成されるファサードにどのように変化をつけるかが大きな課題であること。
- ⑤ 周辺の古典的な建物に対し、単に飾り柱や窓頂冠などのモチーフで対応するのではなく、現代的な手法を検討する必要があること。
- ⑥ 材料の選択に慎重であること。
- ⑦ こうしたことによりコストがどうしても高くなってくるが、その時にファサード及び内装のデザインさらに躯体工事などへの予算配分が重要であること。

それらに対して、ケルトナーリング・ホーフに見られる以下の方法は効果的かどうかウィーン市都心部のタウンスケープを考慮したデザイン手法であると言えるだろう。

- ① 外装と中の機能と分離してデザインすること：容積の確保と建築クラスによる高さ規制という相反する要求に対しての一つの解決策であり、またタウンスケープに対する配慮が図りやすくなる。
- ② 上下階の窓をまとめて大きくすること：全体的なボリュームと重厚性を出し、周辺のクラシックな建築に対抗することができる。
- ③ 三層構成と窓の大きさの変化による分割：古典的な構成のなかに、現代性を表現でき、さらに比較的安価に実現できる。
- ④ 軒線は隣の高さと合わせ、屋根部分を独立してデザインすること：タウンスケープへの配慮の意識表現として住民に受け入れられやすい。
- ⑤ 外装はできるだけ石やそれに類したものをを用いること：周辺の建物に調和しやすい。
- ⑥ 地下駐車場を設けること：コストは高くなるが、タウンスケープへの配慮がやりやすい。

第2節 ハース・ハウスの概要と規制の変化

2.2.1 ハース・ハウスの概要

1) 建築概要

本節及び次節では、保存地区の特別規制の適用によって実現した事例であり、序章での再評価の必要性を述べたハース・ハウスを対象に、その建設経緯と建設過程で議論されたことについて詳細に検討を行い、考察を行う。これによって、ウィーン州建設法の課題を指摘し、さらに景観分析・評価の方法論を導くことを期待している。

まず本節では、ハース・ハウスにおける敷地条件の変化や形態に関わる規制の変化などの与条件を整理する。ハース・ハウスの建設経緯やウィーン建設法の法文の改正などについては、既に幾つかの雑誌で紹介されている¹⁹⁾。しかし、そこで紹介された内容は、実証性を欠いているし、内容自身も不十分である。従って、その建設経緯を含めて整理し直すことは必要である。まず、ハース・ハウスの概要を記しておく。

表2-2-1 ハース・ハウスの概要

名称:	HAAS HAUS (ハース・ハウス)
所在地:	1., Stock-im-Eisen platz 1, Vienna
施主及び土地所有者:	中央商業銀行、ウィーン相互保険、ウィーン学友協会
設計者:	ハンス・ホライン (チーフ: ディーター・プレヒ)
協力建築家:	マーチャート、モビウス&パートナー (MMP)
プロジェクト・コーディネーター:	ベングト・スプリンツル
敷地面積:	728 m ²
延べ面積:	6880 m ²
構造・階数:	S造・RC造、地下4階・地上9階
設計期間:	1985~1988年
施工期間:	1987~1990年 9月

2) 建設経緯

ハース・ハウスの設計は、1984年に土地の所有者がハース・ハウス社から現在のオーナーに変わり市民の反対がありながらも建物を取り壊され、その後一年以上たって1985年に市長ヘルムート・ツィルクがホラインに設計依頼をしたことから始まった。その年の末、ホラインは第一次案を発表したが、それは現在の建築線と1866年の区画整理時点の敷地境界線まで戻し、さらにエルケア状の塔(erkerartige Turm)を突き出したものだった。それを受けて、1986年3月、ウィーン市議会でF・Bプランの変更が決定され、5月に新しいF・Bプランが策定された。その決定が特殊だったために、市民の反対運動が激化し、塔状部分を変更した第二次案が1987年2月に発表された。さらに調整され、1987年7月に現在の計画案にはば収束し、建設開始され、1989年9月に竣工している。その経過を表2-2-

2 に整理しておく。

表2-2-2 ハース・ハウスの建設経緯

	計画及び工事	建設法、F・Bプラン
1866	初代ハース・ハウス	区画整理
1949	二代目ハース・ハウス建設	12月8日 建築線の後退決定
1984	土地売買 → 取り壊し	
1985	ホラインに設計依頼	
	12月2日 第一次案発表	
1986		3月14日 F/B 75% 変更市議会決定 5月14日 F/B 75% 変更閣策定
1987	2月23日 第2次案発表	7月6日 建設法改正州議会決定
	8月7日 建築許可	7月8日 建設法第85条(5) 施行
1989		6月30日 新F・Bプラン施行
1990	9月13日 完成	

3)ホラインのコンセプトと法的問題

ホラインのコンセプトは、1866年の区画整理で消えてしまったシュテファン広場とストック・イム・アイゼン広場の境界を復活させ、広場という開かれた空間を取り戻すこと、現代建築家としてホライン流の作品を設計することであった。これらは、三回にわたる計画案の変更において市民の反対に屈することなく貫かれている。しかしその実現のためには、大きく二つの点で法的な問題があった。

まず第一に建築線の問題である。当時のF・Bプランによる建築線は、1866年の区画整理にしたがって定められたものが、さらに1949年の二代目ハース・ハウス建設の際に後退されたものであった。これをまず1866年当時の位置に戻すことが必要であった。そしてさらにホラインは、その建築線より5m近く突出したエルケア状の塔を計画した。これは、法883(2)による「建築線を突出できるエルケア等」の規定にも違反したものである。これを如何に合法化するかが問題であった。その解決のために、1986年のF・Bプラン変更の時点で法85(4)の特別規定によって処理することが市議会にて決定された。

次に法85の「外観に関する規定」への抵触問題があった。この規定については既に第一章で述べたとおりであるが、そのうち特に建築様式的に周辺のどの建物とも無関係であることが問題となった。最終的には、1987年の法改正により合法化されたが、この法改正がなければ法律違反であり、建設に至らなかったと思われる。

結論から言うと、これらは政治的な動きによって解決へと動いた。即ち、州議会及び市議会ともオーストリア国民党が第一党の地位を占め、更に第二党であるオーストリア社会党と政治的には連立内閣を形成していること、市長Helmut Zilk 及び第一区区長のHeirich A. Heinzら有力者が国民党出身であること、彼らのホラインへの理解があったことによっていた。従って、議会によってこれらの法的問題の解決が図られたことが、ハース・ハウス建設への大きな原動力となったといえる。

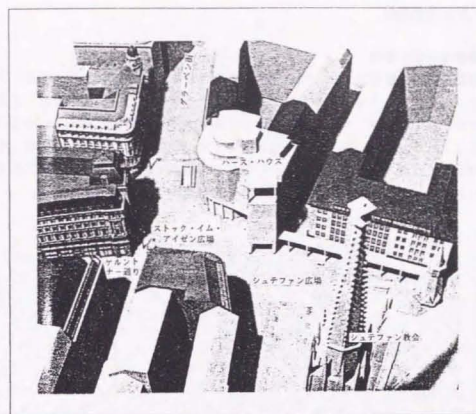


写真2-2-1 ハース・ハウス第一次案模型

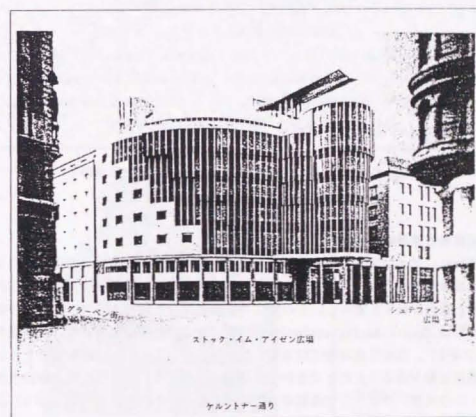


写真2-2-2 ハース・ハウス第二次案模型

2.2.2 戦前の建築線

1) 区画整理以前の敷地

区画整理以前の敷地割り、1842年当時の図面をもとに知ることが出来る。当時の敷地はグラーベン街とストック・イム・アイゼン広場を区切るようになっており、また曲線を描いていた。これはローマ辺境国時代に築かれていた城壁の線に沿ってその残骸であると考えられる。また、ストック・イム・アイゼン広場とシュテファン広場とを区切っていたのは当該敷地ではなく、その向かい側にある敷地であったこともこの図から理解できる。しかしながら、これらの広場が分かれて存在していたのも事実である。



図2-2-1 1842年のハース・ハウス周辺の敷地割り

【出典：Plan von Wien, 1842, No. 379】

2) 区画整理と建築線の指定

1866年に、グルンデア・ツァイトの計画を受けて、都心部の構造の再編成のために部分的な区画整理が施行された。ハース・ハウスの敷地はこの時にセットバックされ、また他の敷地と統合されてしまった。その後この計画を受けた低地オーストリア州法による全体建築線計画(Generalbaulinienplan)の施行により、1895年建築線調整計画が建てられた(図2-2-2)。この計画は全ては実現しなかったが、ウィーン市内を見渡すと、これによって道路幅が進められたところが虫食いの存在している。この時に建設された初代ハース・ハウスは、ウィーンで最初の百貨店だったと言われている(図2-2-3)。設計者はファン・デア・ニルとシッカー・ツブルグである。



図2-2-2 1895年の建築線調整計画

【出典：Innere Stadt Regulierungsprojekt — Baulinien-Antrag der Inneren Stadt mit Eintragung der genehmigten, beantragten und in Aussicht genommenen Baulinien und Kennzeichnung der öffentlichen monumentalen Gebäude, der Neubauten seit 1860, 1895, No. 1618】



写真2-2-3

初代ハース・ハウス

【出典：参考文献13】

2.2.3 戦後の建築線とBプランの変更

1) 1949年の建築線

1945年の爆撃で初代ハース・ハウスは焼失したが、1947年の建設法における戦争復興特別規制の制定により再建設が始まった。図2-2-3はその時のF・Bプランである。当時の建築線からさらにセットバックすること、但し建築物の最高高さを鋼線部分のみ32.50mにしてよいことが読み取れる。ゴールドシュミード通り(Goldschmiedg.)には、道路上に渡り廊下を建設することが定められているが、これは実現していないようである。以上のように、グルンデア・ツァイトからの道路幅員の計画は戦後の戦争復興計画にはさらに高さの緩和とのセットになってさらに進められているのが分かる。

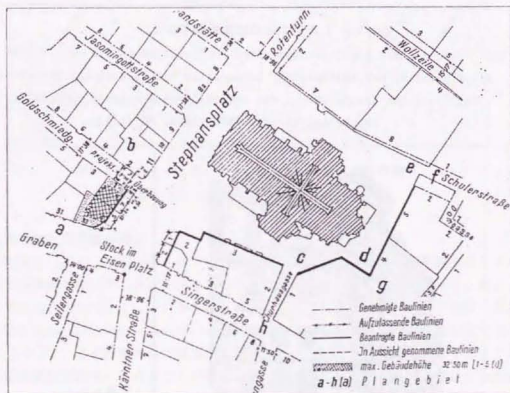


図2-2-3 1949年におけるシュテファン教会周辺のFプラン・Bプラン

【出典：W. Abt. 18-2172/46, Plan Nr. 1841, 8. Dez. 1949】

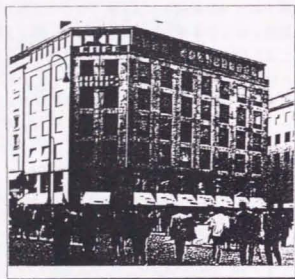


写真2-2-4 第二代ハース・ハウス

【出典：参考文献13】

2) ハース・ハウスのためのBプランの変更(1986)

1985年末のホラインによる第一次案の発表、1986年3月のF・Bプランの変更に関する市議会の決定を受け、Bプランは大きく2つの項目について変更がおこなわれた(図2-2-4)。

まず第一はセットバックされた建築線をおよそ1866年の区画整理の位置まで戻すことである。これにはもう一つの操作も付け加えられた。それは、ストック・イム・アイゼン広場に面する角を曲線にすることである。これは二つの意味を持っている。即ち、かつての城壁の曲線を意識したものであることと、グラーベン街からシュテファン教会への視線を確保することである。

第二は、建築線からさらに飛び出した部分の合法化である。これは、法85(4)による特別規制を適用することによって行われた。この特別規制についてはテキストに次のように記してある。

2. 法85(4)により次のことを定める

- 2.1. 1-4-1で囲まれ、BB1の記された範囲は、既存の地面から5mより上の空間に建設してよい。その下は、公共用の空地とする。この空間には、構造上有効でない建築要素(柱、付柱など)は、自由な通行が確保されるかぎり許される。
- 2.2. BB2が記された土地の基礎に関しては、地下鉄建設の管轄部署との協定を結ばなければならない。
- 2.3. BB3が記された敷地においては、法85(4)により、法881によって許可される建築高さより越えて建築要素をつくってよい。

【出典：MA21 — Flächenwidmungs- und Bebauungsplan,

Plandokument 5951, 14. Mai 1986, Pr. Z. 1517/86 (翻訳者)】

以上によって、ハース・ハウスの形態と規模に関してはF・Bプランにおいて合法化された。しかし、通常であれば1年間はかかるといわれるF・Bプランの作成にたった3か月しか費やしていないのは明らかにおかしい問題である。ここまでに至る過程においては市議会と市当局(MA19及び21)とが関与しているだけで、市民はプランの公示を受けただけで何の関与もしていない。この手続き自身が非民主的であったと思われる。

しかし、F・Bプランにおいて合法化された限り、市民がこれ自身を訴えることはできない。従って、法的に残された問題は、法85「外観に関する規定」(5)の保存地区における考慮事項のみであり、後はこのF・Bプランで定められた建築形態が本当に景観上好ましいものと言えるのか、よりよい形態はないのかという建築的な問題である。これらの点については、このF・Bプランの改定前後にどのような議論が起こり、最終案に至ったのかということを中心に考察し、タウンスケープと住民運動において、どのような対応が必要なのか詳しく検討するが、こうした景観論争の末ハース・ハウスに対して最終的に決定されたF・Bプランの結果を次に検討しておく。

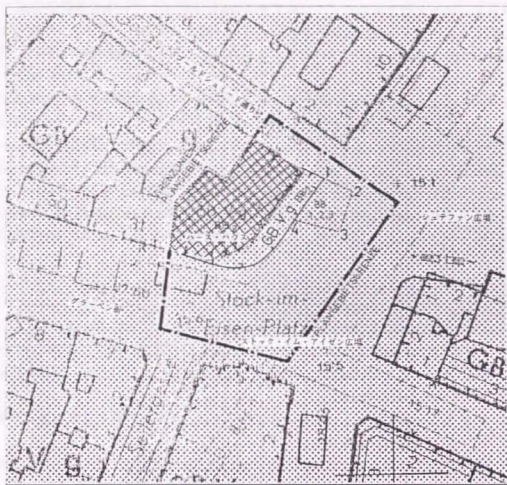


図2-2-4 1986年におけるハース・ハウス周辺のFプラン・Bプラン

【出典：WA21 — Flächenwidungs- und Bebauungsplan.

Plandokument 5951.14.Wei 1986. Pr.Z. 1517/86】

3) ハース・ハウスのためのBプランの変更(1989)

次に決定され公布されたF・Bプランの変更は、建設工事が始まって既に2年近くたったからのことである。このプランは周辺の他の敷地への規制をも合わせて作成されており、敷地ごとの高さの制限など非常に綿密に進められたものである。ハース・ハウスの敷地において1986年のF・Bプランと比較して特徴的なのは、まずはエルケア状塔の部分の形態が、四角から円に変更になっている点である。これは1986年2月のホラインの第二次案による形態からきている。それ以外に特徴的なのは、1986年の時点で存在したBB1, BB2, BB3の特別規制が姿を消し、BB6の特別規制が建築線から飛び出した部分にかけられているだけである。BB6の規制内容については、既に第1章第1節1.3.3で述べているのでここでは詳述しないが、これは86年時のBB1とはほぼ同じ内容のものである。従ってBB2, BB3がなくなったわけであるが、これは86年時点で存在した当該部分における柱を完全に取り除き、キャンテリバーによる構造のみにしたために、必要なくなったと考えられる。この変更は後で述べる市民の意見によるところが大きい。こうしたことを考えると、ホラインのいい

意見は取り入れようという姿勢が伺える。最終的に自分が最も重要視していたコンセプトは貫きながらも、市民の意見のいい部分は着実に取り入れ、自分のデザインにしているのである。これは、近年話題になっている住民参加の都市計画、建築をすすめる上で、非常に参考になる部分であるといえる。

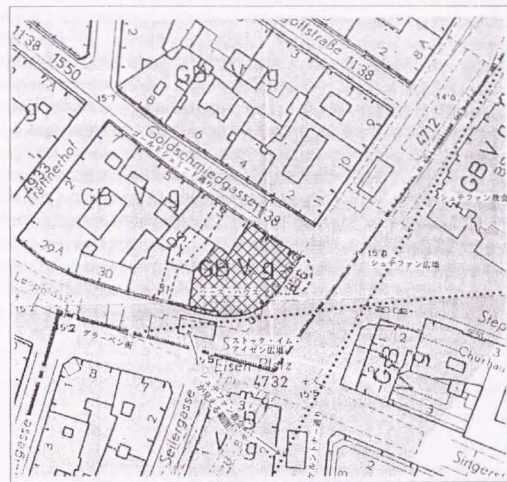


図2-2-5 1989年のハース・ハウス周辺のFプラン・Bプラン

【出典：WA21 — Flächenwidungs- und Bebauungsplan, Plandokument Nr.5991

30.Juni 1989. Pr.Z. 1808/89】

第3節 ハース・ハウスの建築許可プロセスと景観論争

2.3.1 建築許可のプロセス

1) ハース・ハウスの景観論争に関わった主体

建築許可のプロセスとそこでの議論の内容に触れる前に、ハース・ハウスによる景観論争に係ってきた主体について整理しておく。色々な立場の人がいるので簡単に整理はできないが、おおよそ次のように分類できるだろう。まず第一に、設計者及び施主。彼らは金銭の授受という形で結びつき、この建築の実現によって直接利害を受ける主体である。第二に行政。これはさらにウィーン市と区（第一区）とに分けることができ、市は市長 Helmut Zilk と芸術監査役 Czerwnka、都市計画に携わる MA 19 (STADTGESTALTUNG) 及び 21 (STADTPLANUNG)、建築許可を行う MA 37 (BAUPOLIZEI) と建築行政の MA 35 (ALLGEMEINE BAUBEHÖRDLICHE ANGELEGENHEITEN) が、区は区長 Heinrich A. Heinz が大きく関わっていた。その中でも市長、芸術監査役及び区長は景観に関して多くの意見を述べている。第三に立法。ウィーン州建設法に関しては州議会、F・Bプランに関しては市議会、区内の代表者として区議会が関わっていた。第四に都市計画及び都市形態専門委員会。彼らは都市景観行政に関する専門的な諮問役であり、市民の意見を専門的かつ客観的に反映させる役割であるが、どちらかというと行政に近い立場である。最後に住民である。彼らは大きく一般住民、周辺土地所有者等、ジャーナリズム及び批評家に分けられる。

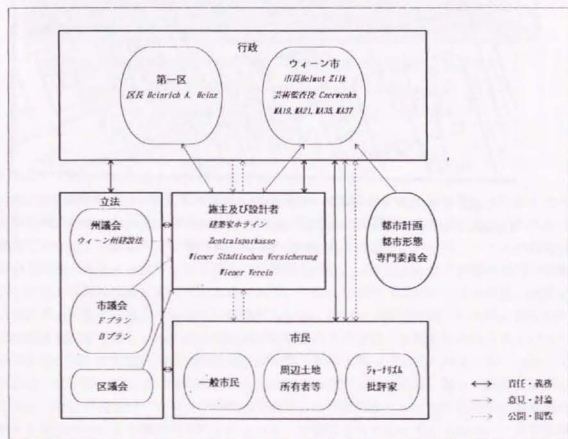


図2-3-1 ハース・ハウスの景観論争における各主体の関係

以上の関係を図示すると図2-3-1 のようになる。この図では、各主体の責任及び義務の関係を \longleftrightarrow 、ある主体からある主体への意見あるいは討論が行われた方向を $\cdots\cdots$ 、図面あるいは書類などの公開及びその閲覧請求が行われた方向を $\cdots\cdots$ で表現している。

2) 計画から竣工までの全体プロセス

表2-3-1 は計画から建築許可そして竣工までの各主体の行った活動を整理したものである。このプロセスの中で、各資料から読み取ると、ターニング・ポイントが4つある。まず第一は、ホラインによる第一次案の発表である。これによって、ウィーン市中心でシュテファン教会の前に約1年程空き地のままであった土地の計画が提示され、市民を巻き込んだ景観論争が始まった。次に1987年の第二次案の発表である。それまではホラインによって発表された案にショックを受けていた市民が、この第二次案発表を境に、盛んに景観論争と建設法解釈論争及び反対運動を繰り広げていった。また、立法及び行政においても景観及び建築に関する見解発表や議会が開かれ、こうした意見の調整のために MA 35（建築行政）が調整案の作成を行っていく。その後建設法 85 の改正後、第三のターニング・ポイントである建築許可を迎える。第四のターニング・ポイントは竣工（建築使用許可）である。着工後は、この竣工を境として住民の反応・ジャーナリズムの反応が変わっている。以上のことから、このハース・ハウスに関する議論を、着工前後で大きく前半・後半に分け、さらに前者を第二次案発表前後で分け、後者を竣工前後で分けて整理する。

表2-3-1 ハース・ハウス竣工までの全体プロセス

年	計画・工事	立法・行政手続き	公開・討論、その他
1985	設計依頼 \rightarrow 市長 Helmut Zilk		
	第一次基本設計		12/2 第一次案発表 (45歳にて)
1986	第二次基本設計	3/14 市議会 F/8759 議案決定 5/14 第一次案更新 F/8759 公示	2/19 反対デモ (千人の署名運動)
1987	第三次基本設計 建築許可申請 着工 実施設計	4/7 区民見解、885違反法改正必要 4/24 MA 19 へ F/8759 議案決定結果 08 4/30 区議会のハース・ハウスの議決 反対 75%、賛成 25% 6/4 MA 35、調整案作成 7/6 市議会、建設法改正決定 7/8 改正建設法施行 (85(5)) 8/7 建築許可	2/23 第二次案発表 ビデオ等による展覧会 5/20 住民反対投票 (土地所有者) 5/22 住民反対投票 (土地所有者)
1988		7/19 変更許可	
1989		6/30 第二次案更新 F/8759 公示	
1990	9/13 竣工	5/15 変更許可 8/20 建築検査 9/13 建築使用許可	

2.3.2 着工前の市民の意見と市当局の対応

1) 第一次案発表後の市民の反応

ホラインが第一次案を国立オペラ座のギャラリーにて発表した時のホラインの主張とそれに対する容認意見及び反対意見は概次のようである。

<ホラインの主張>

ドームへの視界が妨げられるというのは、簡単に言って、真実ではない。そして私は歴史主義者にはなりたくないし、滑稽な中世の都市景観を作ろうとも思わない。今、この都市の巨大な創造的ポテンシャルが全く使われていないのを再び取り戻そうと思っているだけである。

<週刊経済情報誌 Wochenpresse の記者 K. KHITTL による記事>

【出典: Klaus KHITTL: "HAAS IM PFEFFER",
Wochenpresse, Nr. 4, 21. Jan. 1986 (翻訳筆者)】

<容認意見> (())内は筆者による)

戦災復興期のシュテファン広場のハース・ハウスは好ましいものではなかった。そこを再建する最も問題ない方法は、誰も関係のない歴史的なファサードにすることである。しかしながら、Helmut Zilk 市長は建築家 Hans Hollein に設計を依頼し、彼は歴史と現代のアンサンブルを試みようとしている。(その計画によって) 三つの広場とその周りの建築は再び真の価値を持つようになるだろう。ホラインがそのファサードによって、歴史的様式に対してそれを真似ることなく、十分に答えようとしているのは疑いようがない。

<建築雑誌 profil における建築評論家 H. CHRISTOPH の評論>

【出典: Horst CHRISTOPH: "HEIKLE ZONE",
profil, Nr. 49, 2. Dez. 1985, p. 81 (翻訳筆者)】

<反対意見> (())内は筆者による)

100万人都市ウィーンが一つの建物によって破壊されそうになっている。反対意見は次の2つの視点にある。ひとつは、この界隈が繁栄で流行型のものを扱う中心地となり、投機の対象となっていることで、この計画も資本主義による不合理以外の何物でもないということである。もうひとつは、ホラインの計画は建築線のかつての所に戻し、その中に塔状の物を作り(これは執筆者の勘違いである)、今では知覚できない広場を復活させようというものであるが、それによってシュテファン教会への視界が妨げられてしまうことである。

<ドイツ系一般新聞 F. A. Zeitung の記者 U. WEINZIERL による記事>

【出典: Ulrich WEINZIERL: "Das ungeliebte Haus",
Frankfurter Allgemeine Zeitung, 19. Feb. 1986 (翻訳筆者)】

この反対意見の背景には、明らかに社会主義的な発想があり、東西ヨーロッパの中心という微妙な所に位置し、しかも冷戦終了直前という時期にあったウィーンの社会構造がこうした意見に反映していると思われる。しかしながら、次の「シュテファン教会への視線」は単にタウンスケープの問題としてでなく、社会的にも非常に重要な問題として考えられる。すなわち、シュテファン教会への視線の障害は建築線の移動によって起こる問題

であるが、この建築線の問題が、資産価値や容積率などの経済的な問題としてではなく、タウンスケープの問題として扱われていることがウィーン市民の意識構造の特徴として指摘することができる。これは、本当にタウンスケープが公共的財産で重要であると考えているか、あるいは経済的な問題として捉えるのは利己のすぎで説得力に欠けるスマートでないと考えているかどちらかである。しかし、少なくとも、ウィーン州建設法が「景観法」であることも合わせて考えると、タウンスケープが公共の財産であるという観念が住民の意識の根底にはかなり強くあると思われる。

2) 第二次案発表後の意見

シュテファン教会への視線の問題によって、ホラインは第一次案の四角状の塔を円形状の塔に変更した案を第二次案として発表した。これに対しての市民の反応は次のようであった。

① シュテファン教会への視線に対して;

<容認意見>

ドームへの視線がエルゲルア状の塔によって妨げられることは殆どない。批判されるべきはその塔ではなく、どちらかというと曲線の部分である。なぜなら、ケルントナー通りから見えるのは塔の部分であって、シュテファン教会ではない。

<週刊経済情報誌 Wochenpresse の記者 K. KHITTL による記事>

【出典: Klaus KHITTL: "GRUSS VOM GEBIRGE",
Wochenpresse, Nr. 8, 20. Feb. 1987, pp. 48-49 (翻訳筆者)】

新しいバージョンは、よりエレガントでしなやかである。塔の状況は今やガラスのシリンダーで、同じにはそれは曲線である。できるだけ目線が向うに行くように、石のファサードを段々に下げ、グラベン街側に引込ませている。繁栄な事務所とカフェ・レストランのある店舗が最上階にあり、効果的な屋根の造形と前に見える外部テラスが大胆な飾り屋根と一緒に特別ドラマチックなアクセントとなっている。

<ドイツ系一般新聞 F. A. Zeitung の記者 U. WEINZIERL による記事>

【出典: Ulrich WEINZIERL: "Turm gegen Dom",
Frankfurter Allgemeine Zeitung, 6. März 1987 (翻訳筆者)】

<反対意見> (())内は筆者による)

(ホラインの提案は) シュテファン教会へのアンチテーゼであり、数世紀のドーム建築に対する超モダンな外観の対比を表現している。ホラインは西洋の商業の一つの悪い運動を無理に行っている。オーストリア流りの望ましくない運動になる可能性がある。

<建築雑誌 profil における建築評論家 A. WORM の評論>

【出典: Alfred WORM: "PSYCHOTERROR",
profil, Nr. 14, 6. Apr. 1987, pp. 60-61 (翻訳筆者)】

②デザインについて;

<容認意見>

もしハンス・ホラインがゴシック様式のアーチ、塔そして子供っぽいガラスモザイクを計画すれば、恐らく多くの恩を享受しただろうが、世界中の笑い者になっただろう。

<建築雑誌 profil における建築評論家A. WORM の評論>

【出典: Alfred Worm: "PSYCHOTERROR".

profil, Nr. 14, 6. Apr. 1987, pp. 60-61 (翻訳筆者)】

<反対意見>

ホラインの計画中の建築は、その全般的なガラスのファサードのために、隣の建物と同化しない。それ故に許されない。そのデザインもまた、保存地区であるという意味で、正しくない様式である。

<建築雑誌 profil における建築評論家A. WORM の評論>

【出典: Alfred Worm: "PSYCHOTERROR".

profil, Nr. 14, 6. Apr. 1987, pp. 60-61 (翻訳筆者)】

戦後から親しんできた建物が消えてしまう。また商業店舗に、新しい贅沢品が移入してきて、シティの店舗の生残り競争の構造に作用するかもしれない。

<建築雑誌 profil における建築評論家 H. CHRISTOPH の評論>

【出典: Horst Christoph: "Glashaut und Steintapeten".

profil, Nr. 8, 23. Feb. 1987, pp. 62-63 (翻訳筆者)】

③Fプラン・Bプランの変更に対して;

<反対意見>

「新ハースハウス」のためのかつてのF・Bプランの変更は違法であり、この計画はウィーン州建設法に、特に建築線・建築高さ及び都市景観の保存に関して一致していない。現行の州建設法と最高裁判所の裁判では、一人のウィーン市民に都市景観の保存に干渉する権利を認めていないが、シュテファン広場とストック・イム・アイゼン広場の隣人は、ハース・ハウスの違法性を最高裁判所に告訴するまで、そのプロジェクトを阻止する権利として市当局に建築許可を与えないようにさせることはできる。

<ウィーン市芸術顧問 Czerwenka の意見の引用>

【出典: Alfred Worm: "PSYCHOTERROR".

profil, Nr. 14, 6. Apr. 1987, pp. 60-61 (翻訳筆者)】

④ウィーン州建設法 §85 について

<容認意見>

ハース・ハウスは、建設法に反しており、この形で絶対に建てられないが、法改正が施行されれば建てられる。

<第一区区長 Heinrich A. Heinz の発言の引用>

【出典: Alfred Worm: "PSYCHOTERROR".

profil, Nr. 14, 6. Apr. 1987, pp. 60-61 (翻訳筆者)】

提案された案は壊れた建築の部類に入る。法 §85 の外観規定は、実際には非現実的である。この法は改正されなければならない。ハースハウスがこの非現実性を実証している。なぜなら、シュテファン広場はゴシック様式のシュテファン教会で支配されているが、その反対側のいくつかの建物は全く様式がない。ストック・イム・アイゼン広場は前世紀の修復された建物で占められている。グラーベン街においては、ハースハウスは一つの「穴あきチーズ」建築と隣接している。

<建築雑誌 profil における建築評論家 A. WORM の評論>

【出典: Alfred Worm: "PSYCHOTERROR".

profil, Nr. 14, 6. Apr. 1987, pp. 60-61 (翻訳筆者)】

法 §85 に適合するかどうかの地区代表者による採択(1987.4.30)において、75% が反対、25% が賛成の結果だった。私は、この採決に関係なく計画の質が議論されるべきであることを力説する。「ゴシック様式のアーチ、塔が望ましい」という勧告は、そのような内容が法 §85 の内容であるという間違った印象を与えかねない。異なった過去の様式のコピーはそこには望まれないし、要求してはならない。法の意思は、保存地区における新築はそのアンサンブルに同化しなければならないということである。

<建築家 W. WINTERSTEIN の建築雑誌 profil への投稿>

【出典: Arch. Dipl.-Ing. Werner Winterstein: "Hollein-Baus".

profil, Nr. 15, 13. Apr. 1987, p. 10 (翻訳筆者)】

人が常に法 §85 に従っていたら、今日常にロマネスク風あるいはゴシック様式の建築が建てられてしまうだろう。今現在、ハース・ハウスの周りにはいろいろな様式の建物が建っている。どの様式に合わせたいかというのだ。ロマネスク、ゴシック、バロック、・・・それとも折衷様式か?

<経済情報誌の建築評論における芸術評論家 Jan Tabor の言葉の引用>

【出典: Klaus KRIEHL: "DER KAMPF UM DEN STEPHANSPLATZ".

Wochenpresse, Nr. 24, 12. Juni 1987, pp. 46-50 (翻訳筆者)】

<反対意見>

1972年の歴史的市街地保存の法改正当時の市議会議長兼報道官として、ホラインのハースハウスに対して態度を決めるのが当然だと思う。当時の §87(6)、後の §85(5) は、一般的な要求に一致していた。全く感情移入能力なく建設され異物として知覚される近代建築による破壊から古都を保存することを求められていたのである。法 §85(5) は、建築家からイミテーションを要求するものでは決してなく、質と感情移入能力を求め、それによって都市景観を壊さないようにするものである。この規定は、建物の外観が、建築形態・材料・色についてそのように計画されなくてはならないこと、都市景観の統一された形態を壊さないことを要求している。ホラインの計画のガラスのファサードは、私の考えによるこの規定に同調していない。

<元市議会議長 Dr. Hannes Krasser による建築雑誌への投稿>

【出典: Dr. Hannes Krasser: "Hollein-Baus".

profil, No. 15, 13. Apr. 1987, pp. 8-10 (翻訳筆者)】

何のために建設法があるのか、私たちを弊害から守るためではないのか。約この10年、歴史的ハーモニーへの憧れ、即ち「美しく新しきものは、再び古さという事になった」ということは、現在の本質的な美に対する根本的な同意である。保存地区に関するウィーン州建設法の§85(5)の中でこうしたことが実現してしまふのは甚大解釈である。ハース・ハウスが新しい状況を作りだしてしまった。「ホライン法」として法§85(5)が変更された。今まで不可能だったことが起こりうる。数百年もの正統な様式からコラージュになってしまう。新しい建物が隣接建物に同調しなければならなかったのが、今や考慮されるだけである。

<建築雑誌profilにおける建築評論家D.Steinerの評論>

【出典：Dietmar Steiner: "DIE LEX HOLLEIN",
profil, No.27, 6.Juli 1987, p.53 (翻訳筆者)】

このように、第二次案発表後は、意見の対象がファサードのデザイン及びシュテファン教会への視線の問題から、ウィーン州建設法の解釈及び改正に変わっていった。そして、建築家や建築評論家及び政治家のような知識人は承認派と反対派とに大きく別れた。その中で承認派は、周辺の建築物には各種の様式が混在しているので、デザインの優れたものであれば現代的な建築も認めるべきであり、法改正をする必要があるという立場を取っている者が多い。また反対意見には、デザインが保存地区には相応しくないというもので、Fプラン・Bプランの変更のために取られた手続きが違法であるとするもの、経済的に悪影響を及ぼすといったものがある。しかし、デザイン的な解釈は人によって異なる上に、新ハース・ハウスが都市景観に及ぼす影響は問題なしとする都市計画及び都市形態委員会の判断と、MA19及び21の結論が出たからには、反対派は法§85を楯にするしか手だてがなかった。区長及び区議会の「ハースハウスは現法の§85(5)に適していない」という結論が下されたが、州議会の大多数がオーストリア国民党であるということもあり、法改正は議決された。結局ここには住民参加や景観評価を十分に行う余地はなかったのである。

3) MA35 (一般建築行政) による調停案

ハース・ハウスの実現には、MA35が大きな役割を果たした。MA35は建築の一般行政を扱っていて、建築許可には通常関係ないが、ハース・ハウスは建築警察だけで扱える問題ではなく、MA35による調整が必要になった。その建築許可も全てMA35で行われた。まずMA35は、ウィーン市及びその周辺都市の土地所有者等からの投書を整理し、どういふ意見があるかを分類した。そして、それに対して行政はどう対処すべきか、どのような調整をすべきかを検討し、調停案(1987年6月4日)を作成し、施主・設計者及び周辺住民に対して勧告を行った。恐らく、このMA35による調整及び調停案がなければ、ハース・ハウスは実現しなかっただろう。しかし、その調停は非常に強引であった。

まず表2-3-2は、周辺住民からの投書とそれに対してMA35が下した判決を筆者が整理したものである。これを見ると、反対者にとっては非常に厳しい判決が下されている。即ち、殆ど意見に対して、「正当ではない」「却下する」といった強い対応がとられた。また、エルケアに対しても既にBプランで決定済であるという判決が下された。しかし、これに対してのみ、その後の最終Bプランで住民の意見が採用され、地盤面から5mには柱も立てず、自由な行き来のできる公共部分とすることに変更されている。

表2-3-2 周辺住民の反対意見とMA35の対応
(以降表中、ウィーン州建設法を「法」と記す)

【出典：MA35-0-B./1-40/87, Wien, 4.Juni 1987 (抜粋・翻訳・整理は筆者)】

No	意見の内容	MA35の意見と対応
1	Bプランがこのプロジェクトによって妨げられないか； a)現在有効のBプランは、ホライン教授の計画に基づいて決定された。今後のプロジェクトは、ファサードの計画において大きく変更される。即ち、ファサードは丸くなり、それによってBプランにおけるBB2及びBB1,2,3の境界線を越えたり或いは達しないかもしれない。 b)飛行機のような屋根は、Bプラン及び法§81(6)によって許可される大きさを越えている。この部分が造形的であるとか「法に従っている」とかは議論されない。周辺の建築物や許可高度を約25%越えている。この塔は合法的な建築要素ではない。 c)計画におけるエルケアのような部分は、不当にBプランの境界線を越えている。 d)Bプランにおいて1-4-1と記され、BB1の記号のある部分には、Bプランで要求されている通行のしやすさを柱で覆っている。それによって上のはうに大きく感じられる塔と屋根は、歩行者を圧迫するだろう。この部分は自由な通交に使われるべきである。	地上から5mから上を建築物に付け加える。その下には、構造上有効な柱は設けず、自由な通行を確保する。BB2の部分に関しては、地下鉄工事の専門家の立場に一致する。BB3については、法§85に基づいており、建築線を越えてよい。 法§76により、自由意思によって建築線より後ろに下がることを許可する。また、法§83e)による広告物ならびにb)による防火壁、柱については建築線を越えてよい。 法§81と独立して、§5の規定によるBB3に添付き、建築エレメントは法§81による高さを超えてよい。またMA19は、1987年4月24日の文書によって、その屋根の部分法§81よりと評価している。外観に関して、隣人は公共的な権利は持っていない。1-2-3-4と記されている部分は、境界線を越えてはいない。従って不当な意見である。 これらの柱は直径40cmで、通行を阻害するものではない。従って不当なものとして却下する。
2	法§63(3)及び(4)が侵されないか； a)建物全体を完全に判断するためには、詳細な写真の提示が必要である。周辺を含めたヘリコプターからの写真が必要である。模型は必要な印象を伝えることはできない。 b)歴史的地区における建築意図が確立されるべきである。 c)建物の構造が特に複雑である。下に地下鉄がある範囲においては床の強度が足りない。 d)以前のハース・ハウスの取り壊しの許可において、それはすでに違法であった。特に構造的な検討が足りない。	当局は、写真による検討などを行っている。従って不当な意見として却下する。 法§127により、基礎工事の少なくとも1か月前に地盤調査を行う。 法§127により、工事の少なくとも1か月前に構造計算をまとめ、構造図を提出する。 建築工事による地下鉄への影響は予想できるが、1-2-3-4の部分の柱は構造ではなく地下への加重はない。
3	法§85が侵されないか； 歴史的、文化的、芸術的な意味においてある建物の特色や芸術的效果が損なわれないか(特にシュテファン教会)	隣人の権利としては許されないものであるとして却下する。これらについてはMA7と19の19

4	日照の被害： 飛び出た部分の許可された建物高度によって、隣地における中庭への日照が強く被害を受ける	87年 4月24日付けで、法 85 に適合すると鑑定されている。 この地区の建築様式は階層型である。中庭への日照は、法 81 により考慮され、許可されない平面は却下されるので、この意見は正当ではない。 建築用途は「複合建築用途」に反していない。従って却下される。
5	悪臭及び騒音： 現在計画されている空調機によって、中庭に強い悪臭と騒音がもちこまれる。なぜなら、計画の事務所及び店舗は直接に窓で換気できないので、空調機が大きくなる。	法 8132 ⁽¹⁾⁽²⁾ によってMA35は建築行政の部署であり、建築申請について決定できる。
6	MA 35 には権限がない： 計画の建築意図において、8121 ⁽¹⁾⁽²⁾ による特別建築ではないので、MA35には建築申請において決定権がない。 他の関係者から反対に関する協力を受けている。 (以上、1987年5月20日付けの Dr. Robert Csokay氏による反対文書による)	この意見は、公共的でなく、許容できるものではないものとして、却下する。
7	このプロジェクトはシュテファン教会とのアンサンブルを考えている。 (シュテファン教会大司教 Franz Stubenvoll 氏)	同上
8	建物自身には反対ではないが、エルケアのような前に突き出した部分と飛行機のような屋根には反対である。 (Anton J. Güttler 氏、Maria Lang夫人)	同上
9	大司教の意見に賛成で、我々土地の権利者たちは、この建物の建設によって、公共的な権利を傷つけられた。また、この建築は法 85 に矛盾している。	同上

No	指示される事項
1	建築工事において許可される出入口は、グラーベン街側で3.70m×1.80mとすること。
2	法 865により、建築行為に先立ち、建築行政は工事監督者を指名すること。
3	工事前に、法 812により、MA 37の測量に基づき、壁面線と高さの表示を行うこと。
4	工事監督者は、法 8124により、工事前にMA 35と労働監督局において3日間掲示を行うこと。
5	基礎工事の少なくとも1か月前に、法 8127により、地盤調査の結果について検査を行うこと。
6	工事開始の少なくとも1か月前に、法 8127により、構造計算の審査を行うこと。
7	外壁の材料は、耐火若しくは耐燃なもの、施工されること。外壁材は、確実に固定されること。温度変化や風圧等に対して、十分耐えるものでなければならない。 (中略)
10	法 8127により、工事現場に、建築許可証および図面を掲示すること。 (中略)
20	公共用地におけるシャフトの型は、MA 28に従い、交通を確保して取り除かれること。
22	使用許可の申請は、工事終了証明により指示される。
25	工事終了後は、法 8128により、下水道の検査、MA 28の歩道の確認、土地台帳記入に関する指示、建築行政における施工図のチェックを受け、使用許可の申請を行うこと。

附属決定：

これらの決定は、MA 35において2週間、文書、電話、テレグラム等で交付される。
それは、正当な理由による申し込めと、120シリングの印紙が必要である。

この結果を受けて作成された調整案は以下の通りである。

決定事項 ((C)内及び下線部筆者)

法 870により、グラーベン街、ストック・イム・アイゼン広場及びゴールドシュミード通りによって区切られた敷地における既存地下室及び7階建ての屋上階付き商業業務ビルの建設に関しては、当局の査証を備えた計画図の提出を以て、建築許可を下すものとする。

最地下の3階は、機械室及び倉庫とし、地下1階、及び地上階、1階・2階は小売店舗とし、3階はグルメ市場とする。その商業階は、一つの中央吹き抜けによって結ばれる。4から6階は業務空間とする。

屋上1階はキッチン付きレストランとし、屋上2階はその機械室とする。

突き出したシリンダー状の部分は、2階から始まり、屋上1階までとし、ゴールドシュミード通りの角に配置する。その2-5階部分は業務及び商業用途とし、6階部分にはカフェを配置し、その吹き抜けは屋上1階までとする。

コアは、ゴールドシュミード通り側に2方向の階段室、並びに3台の用人エレベータ1組とする。中央の吹き抜けには、エスカレーターを各階を結ぶように取り付けることを前もって考慮すること。

構造の施工は、鉄筋コンクリートによって行い、ストック・イム・アイゼン広場及びゴールドシュミード通りの角のキャンテリバーによる建築部分は、耐火被覆をした鉄骨構造とすること。ファサードは空気層のある防熱構造とし、ガラス及び自然石で仕上げる。屋根はブリキ葺きとする。

法 861による許可に従って、商業ゾーン（地下1階から2階）、グルメ市場、業務空間、並びにキッチン付きレストランには、冷房付きの空調機を取り付けること。

さらに内装の安全性のために、商業領域にはスプリンクラーと排煙機、階段室には消火パイプ、そして火災報知器装置一台と非常照明用のバッテリーを前もって考慮すること。

暖房は遠距離暖房とし、排水はグラーベン街及びゴールドシュミード通りの下水道によって行う。

駐車場法 840により、駐車台数は法律上必要な台数に直し、51台とする。

建築線を越えて空中権が譲渡された建築物の部分には、それ独自の決定を公布する（特別規制BB6のこと）。

【出典：MA35: "BESCHREIBUNG (1. Bez., Stock im Eisen Platz 0 Nr. 4)",
MA35-o.B./1-40/87, p.1-2, 4. Juni 1987 (翻訳筆者)】

この中でタウンスケープに関係することは、結局下線部だけであり、それほとんどホライズの第二次案が建築許可された形になっている。調整されたのは、地上から1階部分にあった柱がなくなったことであるが、これは構造上も有効でなく、デザイン上もなくなった方がすっきりしており、結果的に全ての面でホライズに有利な決定が下された調整だった。しかし、結局この調整が行われたことによって、住民の感情的問題もケリがつき、都市計画と建築の修正も行われ、そういう意味では偶然であるが公益性が守られた。

2.3.3 着工後の住民の意見の変化

1) 竣工前の住民の意見

ハース・ハウス実現のための多くの手続きが、特に第一区を中心とした住民たちの反対運動を強引にねじ伏せるように、市当局及び州議院の後押しによって進められてきた過程を、ウィーン市民たちの意見の変遷とそれらに対する市当局の対応を通じて見てきた。そのやり方は民主的な手続きに則っているように一見見えながら、その妥当性を十分に審議する時間を与えられないまま、一部の知識人によって強引に進められてしまった。これだけ見ると、ウィーンの政治のあり方に問題があるようにしか見えない。しかしながら前述したように、偶然ながらも住民参加が行われ、公益性も守られた。また、このハース・ハウス実現後の住民の意見を検討することによって、これからウィーンにとって本当に議論される必要がある課題も浮かびあがってくる。

調停後は、ハース・ハウスの建設及び現代的なデザインに対する反対は極端に減っている。また、法改正自身への反対も見られず、逆にこのような新しい試みを、保存地区の中で行ったことの意義への賛同も出てきている。かなり強引ではあったが、調停という手続きを踏むことが重要であったということである。しかしながらその一方で、ハース・ハウスの実現までに至った手続き自身が芝居がかった、それによって出来上がった空間も芝居がかったという批判もある。その代表的な意見は以下の様なものである。

<容認意見>

ハース・ハウスは形の聖廟、建築材料の見本帳、手工業によるディテールの収集帳である。しかしそれが違うのは、建築だということである。それはどちらかと言えば一つのノイローゼである。そして一方では、ウィーンらしい小国オーストリアの建物になっている。歴史的保存地区のメタ・アーキテクチャである。失望が大きければ大きいほど、期待される様式が重要になる。ハース・ハウスは重要な建築である。ホライン以外の誰が設計できたのだろうか？

<一般新聞 Der Standard の記者 G. Schöllhammer による記事>
【出典：G. Schöllhammer: "SCHWERE HAUT AN KAUFMÄNNISCHEN VEREINSHAUS", Der Standard, Wien, 30. Aug. 1990 (翻訳筆者)】

<反対意見>

ハース・ハウスは芝居がかった建物である。演出の天才ハンス・ホラインは、あまりにも永い間ウィーンの人々を期待させておいて、結局破局させた。

<一般新聞 Der Standard の記者 G. Schöllhammer が引用した住民の意見>
【出典：G. Schöllhammer: "EIN WELTSTAR IN DEN SCHÄCHTEN DER PROVINZ", Der Standard, Wien, 30. Aug. 1990 (翻訳筆者)】

こうして賛成意見を見ても、決して完全なる賛成意見ではないことが分かる。また、建設前もそうだったが、反対意見と容認意見の両方を言っている人物もいる。この原因は、反対意見においても反映しているが、ホラインによるデザインが期待ほどではなかったことが大きいようである。容認意見にもあるように、ハース・ハウスを契機に改正されたウィーン州建設法 § 85(5) の「時代に合った様式」は何かという議論をもう一度する必要がある、そのデザインも特に保存地区においては慎重に行われなければならない。

2) 竣工後の住民の意見

さらに竣工後は、そのデザインまでも「ウィーン風」という言葉で置き換えて容認し、ハース・ハウスが実現したことの意義を強く説く意見が増えている。あるいはそのデザイン的な意図が、様式あるいは機能という枠を超えて、歴史的文脈を如何に読み込み、それを知的にデザインに反映させることの重要性を説いている場合もある。また、この根底にあるのは戦災復興時に建設された多くの無味乾燥な建物への批判と嫌悪である。ウィーン人にとって、それが現代的なものであらうと、如何に「デザイン」されているかということが重要なのである。こうした知識人の意見に対して、一般市民の率直な意見（一部の評論家においても）は「分からないが、いいと思う」というものだった。しかしながら、そうした意見は意味のないものとして結局かき消されてしまう。

一方、反対意見も同様である。下にあげるその代表的な反対意見もその主たる部分が明解でないばかりか、半分容認しているところもある。しかしながら、ここで重要なのは、反対意見にも現れる「容認」の部分である。即ち、歴史的文脈の読み込み、周辺建築物への配慮（高さを揃えるということ等）、視線の確保等である。こうしたことが少なくとも配慮されているということが、特に保存地区において新しい実験をする上でも重要であるということが分かる。

以下、そうした竣工後に見られる住民の意見を当時の新聞・雑誌から抜粋し、容認意見と反対意見に分類して整理した。

<容認意見> (但し、()内と下線部は筆者による)

新ハース・ハウスはそのこと（スター建築家は天賦の才があり、常にメディア等を通じて影響を与え、他の建築家と異なり、センセーショナルであること）に完全に一致する。ホラインは自分で、過度に「ウィーン風」に成るまでそれを改良した。同じようにセンセーショナルな建築で、デンハーグにあるレム・コールハウスのダンス・テアターと比較すると、それはディテールがいいかげんで技術も粗雑であるが、不完全さの魅力と明るく新鮮な色彩とで三次元的な印象を与えるのに比べて、ハース・ハウスは伝統的でウィーン的である。

(中略) その屋根の造形も、ホラインの手による納得の行く解決ではある。しかし、その実現と同じように固く、モダンで、そんなに美しくは洗練されていない。そういう多くの批評にもかかわらず、ハース・ハウスはウィーンの建築とその論争に貢献した。(保存地区における建築の)実現はこれが最後ではない。だからこそ必要だったのだ。全てのハース・ハウスの無力化、過ち、そうした問題は、ハース・ハウスの反対者が決して到達できないある側面にある。即ち、その反対者には今日もなおその主義においてこの地域の戦災復興計画の時の粘りかししい建築物に対して共同責任があるということである。

<大衆新聞 Kurier における建築評論家 D. STEINER による評論>
【出典：D. Steiner: "Neues Haas-Haus: Wenn er nur abhören könnt", Kurier, Wien, 13. Sep. 1990, p. 13 (翻訳筆者)】

形態は常に機能に従わなければならないとするならば、この非構造的な建物における意味上の機能は、構造とか用途とかではなく、むしろ比喩とか裏の意味とか透視である。

<大衆新聞Handelsblattの記者E. TRAPPSCHUHによる記事>
【出典: Elke Trappschuh: "PALAST DER SCHÖNSTEN ILLUSIONEN",
Handelsblatt, Nr. 183, 21. Sep. 1990, p. 30 (翻訳筆者)】

ハース・ハウス周辺に比較できるような建築がないので、ハース・ハウスについて批評することが難しいが、まずは、まあまあ評価できると思う。

<建築雑誌profilの建築評論家H. CHRISTOPHによる評論>
【出典: Horst Christoph: "Das einsame Haas-Haus",
profil, Nr. 38, 17. Sep. 1990, p. 108 (翻訳筆者)】

<反対意見> (但し、()内及び下線部は筆者)

結局、多くの美的解決策、歴史的文脈の考察(ローマ時代の城壁)、都市開発の意図(散漫な広場と道路の関係の修正と地下鉄)、周辺環境への対応(蛇腹線と2階の位置を合わせること、オット・ワグナーのガラスの屋上建築などの目立った屋上造形に呼応し、視線を導くこと)等を除くと、ホラインは、蛇腹線より上部に恐ろしいことを行っている。その一つは、ガラスのファサードで、そこには冷たい表情が与えられている。

<大衆新聞Handelsblattの記者E. TRAPPSCHUHによる記事>
【出典: Elke Trappschuh: "PALAST DER SCHÖNSTEN ILLUSIONEN",
Handelsblatt, Nr. 183, 21. Sep. 1990, p. 30 (翻訳筆者)】

以上、第一次計画案の発表からハース・ハウスに対する住民の意見を見てきた。ここで分かるように、その意見は計画と工事の進捗状況によって少しずつ変わってきた。特に反対意見は、既にFプラン・Bプランが決定済みであり、建築様式についても法改正が行われたために分が悪く、その攻撃対象が建設前と建設開始後とで大きく変わった。

まず、容認意見の方は、ウィーン市都心部における新しい建物の実現によって沈滞化しつつある街に新たな活力を生み出すために、シリンダー部分の突出によって昔の広場の境界を取り戻すということ、周辺には色々な様式の建物が存在しておりそれらの折衷主義は好ましくないということ、法改正によって合法化されればよいということ、そして最後には、ハース・ハウスはウィーン的な建物であるということを軸に議論が展開された。

また反対意見の方は、シュテファン教会への視線を妨げるということ、法85に違反しているということ、シリンダー状の部分が歩行者交通を妨げるということ、ガラスのファサードは好ましくないということ、騒音・悪臭が出るということ、屋上の造形が飛行機の羽のようで美しくないということを中心に関心展開されていった。しかしながら最終的には、調停案が作成されたこと、多くの議論を重ねてそれに合わせて計画側が妥協できる範囲内で計画変更されていったことによって、竣工後の強い反対は水面下に隠れてしまい、いくらに残っている反対意見も多少感情的なものになってしまった。

しかしながら、これらの中で反対意見は重要視しておく必要がある。特に最後の反対意見の中にはその象徴的なものを見出すことができる。例えば、「歴史的文脈の考察」及び「都市開発の意図」は、敷地あるいは地区ごとにその歴史的背景とその都市におけるポテンシャル及び開発の方向性が異なるし、あるいはその計画に携わる建築家・都市計画家によって、建築のデザインに投影する方法も変わってくるものであるが、「周辺環境への対応」や「蛇腹線や2階の位置を合わせる」ということは、特にウィーン市都心部

のような歴史的市街地においては一般化しやすい理解も得やすい。即ち、序のp. 9~10で述べたように、伝統的市街地における景観コントロールはある程度空間の変化に抵抗するようにあるべきであり、そういう意味では上述した内容は歴史的に形成されてきたウィーン市都心部のタウンスケープに対して合意が得られやすく、有効である。つまりそれらの事柄は、ウィーンの中で新しく建設される現代的あるいは建築線を越える建築物がその歴史的環境に相応しいかどうかを評価したり、建築家がウィーン市都心部で設計する際の拠り所にしたらす上で、一つの有力な判断基準及び目安となる可能性を持っている。

しかし、それは単にきっちり揃えるのがいいというわけではない。ハース・ハウスへの容認意見にも出てきたように、ウィーン市都心部には色々な様式の建築が隣同士の建っており、高さや装飾のスタイル等にも「多様性」が認められる。蛇腹や2階の位置もきっちり揃っているわけではない。ウィーン市都心部における景観コントロールも、ある程度のバラツキをもたせるように行うことが必要であると考えられる。

そういう意味では、これから行うべきことが自ずと明らかになってくる。即ち、ウィーン市都心部においては「統一性」と「多様性」とがどの様に共存しているのか分析し、現状の共存状態を再現するための各デザインエレメントにおける目安を導き、それをもとに「統一性」と「多様性」を簡便に評価する方法を構築することである。その現状の「統一性」と「多様性」との共存状態を把握するためには、各デザインエレメントの平均値とそれに対するバラツキ(標準偏差)を求めることが考えられる。さらに、それを評価する方法は、街路全体に対して行うのは実際の建築許可行政を考えると簡便さと分かりやすさに欠けているので、隣接部分のみで行うことが考えられる。

そこで分析すべきデザインエレメントについては、第1章で考察した建設法の「外観に関する規定」に出てくる項目と、本章第2節のケルトナーリング・ホーフに関する考察で出てきたそのデザイン・コンセプトと各種意見が参考になる。これらと、さらに建築家の設計作業を考慮すると、そのデザインエレメントは結果的に

- ① 高さに関するもの(軒高、最高高さ、階高など)
- ② ファサードの分割に関するもの(三層構成、縦の分割)
- ③ 窓に関するもの(大きさ、周りの装飾)
- ④ 装飾に関するもの(様式など)
- ⑤ 材料に関するもの(主要な材料、色)

が導かれるが、その「統一性」と「多様性」の共存状態を隣接部分における一致の度合いで評価することが考えられる。それを第4章では「一致度」という手法に具現化させるが、それは決して一致することを推奨するものではないことに注意しなければならない。

次に、特にハース・ハウスにおける各試論の整理によって抽出されたウィーンの都市計画システムに関する課題について検討してみよう。それは大きく、計画の柔軟性の問題と住民参加の問題が挙げられる。

第一の計画の柔軟性については、2つの大きな視点がある。一つ目は法制度自身の柔軟性である。つまり、ハース・ハウスでは法85に対して、区・市・州の各議会による検討によって、即時に法改正が行われていった。これはウィーン市自身が州でもあり、その範囲で地方自治が確立しているために、法改正がその時々都市の状況に合わせて行うことが容易であることにも大きく寄っている。それはある意味で地方分権の有用性を示しても

いるが、それ自身も評価に値する。つまり、議会を通して柔軟な法改正が行われることは必要である。そのためには地方自治が確立している必要もある。しかし、我が国においては、都市計画法も建築基準法も全国一律であるために、各地方の特徴や風土性に合わせる事ができないことが大きな問題であり、議会も立法府として十分に機能しているとは認めがたく、このように法改正を行うことは極めて困難であると言えるだろう。

二つ目は法定計画の柔軟性である。ハース・ハウスの場合は計画決定後の進捗状況と住民反対に合わせてBプランの変更が行われた。これはBプランが街区単位の計画であることと、偶然にも住民参加が行われたことに寄っている。従って、この点に関しては次の住民参加のあり方も含めて議論しておく必要がある。ちなみにこれが我が国であったなら、地域地区制度のように大きな範囲での計画策定ではできなかっただろう。なぜなら我が国においては、都市計画の決定が特に道路などの公共事業に主眼が置かれているために、計画の決定がないと予算の配分上問題が生じ、計画の変更が非常に困難であるからである。この場合有効なのが地区計画等の策定であると思われる。つまり、法定地区計画等に柔軟性を持たせることができれば、より公益性の高い都市計画が可能になる。

第二の住民参加については、前述したようにハース・ハウスの場合は当初予想もしなかった反対が起こったことによってBプランと建築計画の変更が行われたが、今後は特にこの点について検討を行う必要があると思われる。つまり住民参加は、定量的な客観的な評価が行われる場合にはそれを補う役目を果たすだろうし、そうした評価手法がない場合には客観的な評価として認めることができる。それによって、従来よりも柔軟なBプランの実現と真に民主的な社会の実現が可能になるだろう。

この点に関しては、ウィーンでは従来からFプラン・Bプランに対する4週間の縦覧期間が与えられており、さらにその計画策定及び建築許可プロセスにおいて都市計画及び都市形態専門委員会による諮問も行われている。しかしながらハース・ハウスの場合は、これでは不十分であったために問題が生じた。何故なら、多くの住民にとっては自分の敷地に関わるFプランとBプランの決定くらいにしか興味がないのが通常であり、もし興味を保持していても実際にどんな建物が建設されるのかその模型と設計図を見るまでは判断のしようがない場合が多いからである。従って、その問題を解決するためには、建築許可申請から建築許可に至るまでの間に新しい仕組みを持たせる必要があると思われる。

即ち、特にFプランやBプランの変更によって実現化が可能になったもの、建築線等を越えるもの、その地区のタウンスケープに大きな影響を与えるもの等に対しては、その計画の合法性の審査の後に、都市計画及び都市形態専門委員会の諮問のみならず、客観的な評価や住民参加による検討を含めるシステムにすることである。これによって、法定計画にまで逆上って議論しなければならないと判断されれば、FプランやBプランの妥当性も含めて検討する必要がある。この時、もしFプランとBプランが著しく問題であると認められたならば、その変更が要求される必要がある。それに対する建築家のアピールも位置づける必要もある（ハース・ハウスの場合は、ホラインによる計画展示や説明があった）。また、Fプラン・Bプランが妥当な場合や、多少の変更は必要だが新しい計画によって将来的に望ましい空間の形成が可能である場合には、そのまま計画を推進すればよい。こうしたシステムを確立することによって、全ての建築家や施主に新しいデザインの可能性が平等に芽生え、透明性も増し、民主的な解決を行うことができるようになるだろう。

第2章のまとめ タウンスケープのコントロールにおける 住民参加と客観的な景観評価手法の必要性

本章では、戦後のウィーンの建設活動とその周辺で起こったタウンスケープに関する論争を整理し、第1章で取り扱ったウィーン州建設法の問題を顕在化し、そこからどういう対応を行うべきか検討を行った。また、ウィーン市都心部のタウンスケープにおける街区ファサードのデザイン・エレメントとして重要と思われる要素の抽出を行った。その結果次のことが結論づけられる。

(1) タウンスケープの思想

ウィーン市民のタウンスケープに対する思想は、第1章でも述べたように戦前のウィーン州建設法において既に法文として現れていた。それはウィーンの人々が文化的・歴史的に持っている美意識によっていて、その美意識が土地所有の自由化によって脅かされるのを阻止するために制定されたと思われる。それがすなわち、当時制定された外観に関する規定、建築線等の規定である。しかし、第二次世界大戦後の戦災復興計画が拍車をかける形で始まった近代建築の建設が、都市の美観、特に歴史的建造物とその周辺のタウンスケープを破壊しているということによって、昔以上のタウンスケープに対する問題意識を持つに至った。それは、1961年には当時のFプラン・Bプランを改正するための、ウィーン市の全体都市計画策定作業が行われ、その時に「都市景観（タウンスケープ）の保存」がスローガンとして上がり、1964年の大改正に結びついていっていることからもうかがえる。それはまた、最初の保存地区制定による建築行為の禁止にも現れている。しかしながら、彼らは決して新しいものを拒んでいるのではなく、まず第一に芸術的な物に対する破壊行為を恐れ、第二に芸術的な物の出現を望んでいるのである。

つまり、タウンスケープの形成と更新における根底にある考え方は、「歴史的及び優れた建築物あるいはタウンスケープを壊さないように。そのようになる可能性のあるものは『目立たない』ようにすべきである。一方で、芸術的あるいは建築的に優れた質と感情移入能力（芸術性）のある建築等は、タウンスケープの形成と更新において必要であり、それによってタウンスケープを壊さないようにしていかねばならない。」ということである。その考え方はハース・ハウスにおける議論でも分かるように現在においても続いており、今後もウィーンの人々のタウンスケープに対する考え方の基本となるだろう。そしてこれは、ウィーン市都心部における「統一性」と「多様性」の実現に通じ、「建築家の個性（芸術性）」をいかに捉えるかということにも通じていると思われる。

(2) ハース・ハウスに現れるウィーン州建設法の問題点

ハース・ハウスが合法的であったかどうかという点、結果的には合法的に建設された。問題があるのは、①ハース・ハウスがウィーンで最も重要な位置に立地するにも関わらず、

1986年のF・Bプランの変更決定が十分な検討もなく3ヵ月という短期間で行われたこと、③エルケア状の塔を認めるための特別規制が、その活用をコントロールする管理体制と法的手続き等が整備される前に適用され、その妥当性に客観性がないこと、④法85(5)の変更もハース・ハウスを正当化するために州議会決定され、住民の反対運動が省みられなかったこと、④調整案においても、既に法的に決定されている点については反対意見の妥当性が認められなかったことである。しかしながら、これらはハース・ハウス自身の問題ではない。立法及び行政の問題で、ハース・ハウスを糧として今後の法規制の運用について議論を重ねていく必要があると思われる。

それは、建築線及び建築クラスを越える行為に対する監査についても同様である。それは公共の権利を侵す行為であり、より慎重にならなければならない。ハース・ハウスにおいては、そのような一般規制を含めたウィーン州建設法の問題点が結果として吹き出したのである。ハース・ハウスを特別な事例にならないようにし、より一般的に「建築の自由」と権利を認めていくためには、そのための判断基準を確立していく必要がある。そのための大きなヒントがハース・ハウス等の建設時に見られる議論の中に隠れている。

すなわち、本章で整理したことから分かるように、特にウィーン市都心部においては、「建築の自由」における「公権」対「私権」、「私権」対「私権」そして「私権」の問題に対して、タウンスケープに関する問題が非常に重要性をもった議論される。それは経済性よりもはるかに優先される。「その地域のタウンスケープ (das örtliche Stadtbild)」という言葉がウィーン州建設法の中に何度も出てくるように、それはウィーンの社会問題なのである。従って、タウンスケープをどの様に考慮すべきかということは、建築許可における客観的判断基準として十分に確立できるものと考えられる。

また一方で、ハース・ハウスの実現プロセスにおいて評価でき、今後のために大いに参考となる部分もある。それは住民の意見に対して良くも悪くも柔軟に対応したという点である。つまり、法85の改正、Bプランの変更、そしてMA35による調整案である。既に第1章で述べたようにウィーンの建築許可システムは現時点では客観的評価手法を持たないが、ハース・ハウスの建設において当初は考えもしていなかった住民による反対意見とその調整が客観的評価の役割を果たし、このような実験的試みが実現したからである。従って、現在の建築許可プロセスに客観的評価手法と住民参加を取り入れていくことは、タウンスケープにおける「統一性」と「多様性」の同時実現及び機会平等と都市計画の民主化、そして「建築の自由」の増大を図る上で有効であると言えるだろう。

(3) ハース・ハウスに学ぶタウンスケープ形成と更新のための手続き

ハース・ハウス実現のためには、通常では建築許可に携わらないMA35 (一般建築行政) による調整案作成が大きな役割を果たしたことは既に述べた。この調整案も最終的にはホラインにとって都合の良いものであり、かつ調整の際における反対意見に対するMA35の判断も「妥当でないもので却下する」といった強いものであった。しかし驚くべきことは、それがどんなものであれ、この調整案後はハース・ハウスにおけるデザインとタウンスケープへの配慮に対する住民の反対意見がほとんど出ていないことである。合意を得

るための調整案を作成し、話し合いを持つということが重要であるということの証であり、住民参加は客観的評価に代替するということの証でもある。

このことより、特にタウンスケープに対して影響を与えることと考えるものや、建築線等を越えることのように「公権」や他の「私権」に影響を与えるものに対しては、都市計画及び都市形態専門委員会による諮問ばかりでなく、客観的評価手法や住民参加を含めた建築許可プロセスを取ることによって、新しい都市景観の創造へとつながっていくことが理解できる。住民との合意が得られない限り民主的都市計画は実現できないし、ハース・ハウスは単なる問題児ではなく、ウィーン市都心部のタウンスケープにおける新しい試みをいかに民主的に実現するべきかということを考えているからである。そう考えると、このハース・ハウスで起こったように、法制度自身の問題及びDプラン・Bプランの妥当性にまで逆上して検討することができるようなシステムにしていける必要がある。

(4) ウィーン市都心部のタウンスケープにおける考慮事項

法85(5)には、「保存地区における新築或いは既存建築物の改修は、(中略)時代の様式に則しているか、若しくは建築様式、建築形態、建築高さ、屋根の形態、工学的形態及び色彩において、街路両側の近隣建築物と同じ又は似たものにしなければならない」ということが書かれている。これはある意味で行政の自由裁量に任された部分であるが、その判断基準は今日においては確立していない。しかしながら、そのためのヒントとなるものが、ハース・ハウスを始めとする近年の建設活動におけるウィーン市都心部のタウンスケープに関する議論の中から抽出することができた。

まず、規模に関しては、「軒線を揃えること」「2階の線を揃えること」である。「屋根」に関しては、ガラスにしたり高さを変えたりなど比較的自由に行うことが認められる傾向にある。「建築様式」は、シュテファン教会の周辺に限らず、バロック、ゴシック、ロマネスク等多様な様式が見いだせるので、状況によるだろうし、現代的デザインで質と感情移入能力が高いものであれば許されるので、許容範囲は大きいと思われる。「窓の大きさ」も重要であることが分かった。また、個々の「装飾」や「材料と色」も大きな判断材料になると思われる。これらの要素において、「揃える」という行為がどの程度あるべきで、どの程度効果があり、どのようにコントロールするべきなのかということは、ウィーン市都心部のタウンスケープにおいては重要なことであり、検討していく必要があると考えられる。

これらのことを定性的なだけでなく、定量的に分析することによって、今まで裁量に任せられ、あるいは好みだけで判断されていたものが、より客観的に判断されていく可能性を持つようになるだろうし、自由裁量の部分も逆に幅を持つようになってくるだろう。つまり、タウンスケープの客観的評価を含んだ建築許可システムへと発展していくことが期待できる。それは、都市景観行政において大きな意味を持つものと思われる。そして、こうした定量的な分析によって、ウィーン市都心部のタウンスケープにおいて「統一性」と「多様性」を同時に実現させるには何を目安にすればよいのか、という建築設計そして都市デザイン上の課題に対しては答えることができると思う。

第3章、第4章への展開

以上の第2章における知見によって、第3、4章及び結章で検討すべきことが明らかになってきた。即ち、建築線等を越える行為や特別規制の適用の妥当性を評価するために、ウィーン市都心部のタウンスケープにおける街区ファサードのデザイン・エレメントを定量的かつ客観的に分析・評価していくための手法を構築し、その中で「統一性」と「多様性」そして「建築家の個性」をどのようにコントロールしていくべきなのを検討し、最終的に民主性と平等性の確保が考慮された新しい建築許可システムを提案することである。それは住民参加と客観的景観評価を含んだ建築許可であると考えられる。

住民参加については、ハース・ハウスにおける建築許可や住民反対の経緯の考察によって、そのあるべき姿がかなり具体的に分かってきた。まず第一に、単にFプラン・Bプランを見ただけではその建築の実態と問題を把握できない住民のために、建築許可の段階においてその妥当性を十分に吟味できる時間的余裕を与え、フィードバックができるシステムを作ることである。第二に、公聴会や展示だけでなく、住民の意見が計画に反映するようにすることである。すなわち、調停案の法的位置づけをすること、調停案を都市計画及び都市形態専門委員会のような第三の機関がチェックできるようにすることが必要である。

しかし、客観的景観評価について、そのあり方をどうすべきかはまだ不明解である。この客観的景観評価手法のあり方を検討することによって、本論文で提案する新しい建築許可システムも説得力のあるものになるだろう。またそれには、タウンスケープにおける個性的建築をどのように分析し評価するかという視点も必要である。従って、第3章及び第4章においては、景観評価手法のあり方について検討していくことにする。即ち、次のような手順で行う。まず第一に、ウィーン市都心部の街区ファサード全体において「統一性」と「多様性」の同時実現の定量的目安を分析すること。第二に、隣接建築物に対して各デザインエレメントがどの位の差で存在することが許容されるのかを検討すること。第三に、「建築家の個性」とはどういうところで表現されているかを考察し、全体に対する個性について検討する必要性を述べる。第四に、隣接部分の分析・評価システムを構築し、その著名建築家の作品においてケース・スタディを行うこと。それによって、隣接部分の分析によって十分に街区ファサードに対する考察が行われることを説明し、最後にそうした分析・評価手法における今後の課題を整理することである。

最後にここで、本章までに得られた知見を基に、第3章及び第4章で行うウィーン市都心部のタウンスケープの分析手法の考え方を簡単に整理しておく。それは第一に、「(4)ウィーン市都心部のタウンスケープにおける考慮事項」の最後で述べた事柄である。即ち、「揃える」ということが、街区ファサードにおいてどの程度考慮されているのかということである。第二に、「統一性」と「多様性」とがどのように実現されているのかということである。第三に、著名建築家は隣接建築物に対して具体的にどの様な配慮をしているのかということである。ウィーン市都心部のタウンスケープにおける著名建築家のデザイン行為には、隣接建築物に対してこの程度は考慮しなければならない、あるいはこの程度は許容できるだろうということについて、何らかのコンセプトがあると思われるからである。

【第2章 補註】

- (1) 参考文献3、p.92
- (2) 参考文献3、p.96
- (3) 1951年の全体都市計画は、Prof. Karl Heinrich BRUNNERが中心となり、1948年から1951年にかけて、1929年からそのままになっていたドラムを見直しで新しいドラムを策定する事を目的に行われた。参考文献2、p.15
- (4) 1951年の全体都市計画は、経済・社会・技術的な変化に対応するための新しいドラムの策定作業が必要であるという1958年1月7日のウィーン州議会の決定に基づき、Prof. Roland RAINERに依頼する形で行われた。参考文献2、pp.15-16
- (5) その後、RAINERの作業は市当局建築家のGeorg CONDITTに受け継がれた。彼は都市政策を行う「都市計画グループ」としてMA18を創設し、それ以降は市当局自身による作業として全体都市計画が行われるようになった。参考文献2、p.19
- (6) インターシティ、シュピッテルベルグ、グリーンウィング、シェーヴリング、ペーヴラントドルフ、カーレンベルグドルフ、マウア、インフェルスドルフ、ウンターラアなどが挙げられている。
- (7) 参考文献2、pp.153-158
- (8) 5グループの建築家は、Norbert GANTAR, Ernst HIESMAYR, Wilhelm HOLZBAUER、Gruppe W、そしてCheppar Wolfgang und Traude WINDBRECHTINGERである。それぞれの計画案は以下のようなものだった。GANTARの案は、グラーベンの全ての建築物の二階(erste Obergeschoß)に若者用の居酒屋(Lokal)が入ったテラス状の空間を形成するものである。HIESMAYRの案は、ハース・ハウスを軸し、水平線を強調した現代的な「セントラル・モーション」をつくることである。HOLZBAUERの案はグラーベンの片側を歩行者用空間とし、もう片側を自動車交通空間にするものであった。Gruppe Wの案は、グラーベんにガラスの大屋根をかけるものであり、最後にWINDBRECHTINGERの案はシュテファン教会の横に地下鉄への通路空間を作り、高さ3mの見学用テラスを作ることだった。参考文献2、p.197
- (9) 参考文献2、pp.197-199
- (10) 建設経緯については日経アーキテクチュア1994年3月18日号¹³に軽く触れられているもの、我が国ではあまり詳しく紹介されていない。そこで、オーストリアの雑誌¹⁴と、ホルツバウアー自身へのインタビューによって整理した。インタビューは、1994年11月17日、ホルツバウアー事務所で行い、その内容は、以下の通りである。
 - 1) 建築コンセプト
 - 2) 景観への配慮事項
 - 3) MA21、MA19、建築警察との問題
 - 4) 住民との問題（特に公開に関して）
 - 5) 日本とウィーンとの違いに対する見解
 - 6) 今後の建築に関する展望
- (11) このことについては、いくつかの雑誌および新聞記事で指摘されている。例えば、参考文献41、42。
- (12) ハース・ハウスについての記事は、例えば参考文献9、10、11、12、13、14、15。
 法文の改正や敷地の変遷は、文献13、pp.151-165に紹介されているが、敷地のことについては根本的に大きな間違いがあること、法文については不十分な点があることが指摘できる。まず、敷地については、シリンドラ状に飛び出た部分（エルケアのような形態のもの）が1866年の区画整理において敷地の内部であるとされている。これは明らかに敷地外であり、間違っただけである。次に、法文については、法885の変更、即ち「時代に合わせた方法」という部分については記述されているが、保存地区内における特別規制については記述されていない。
- (13) 参考文献13、pp.168-171、p.180
- (14) 市民から出た反対意見などは、大きく2つの文脈から理解することが出来る。まず第1は公文書であり、第2は当時の新聞である。しかし、新聞などは、その記事を書く人間によってかなりゆがめられる可能性があり、客観性が保たれないので、もっとも良いのは公文書である。一般的には、建築警察（MA37）で保管してある場合が多いのであるが、ハース・ハウスはウィーンにおいて特殊な建築物なので、MA35（一般建築行政業務）に保管してあった。ここで掲載し手に入れたことが出来たハース・ハウスに関する資料は、1987年6月4日¹⁴、1987年6

月16日¹¹⁾、1990年9月13日¹²⁾のものがあった。このうち、市民の意見について記述してあるのは1987年6月4日のものであり、その中にその反対意見とそれに対する市の対応策が記述してある。また、1990年9月13日のものは、最終的なハース・ハウスの決定許可事項が記述してあった。

建設前後の評価の変化は、雑誌及び新聞記事で知ることが出来る。本章では、ハース・ハウス及びタウンスケープに対するウィーン市民の意見を調査するのが目的であるので、ウィーンで発行されている以下の雑誌及び新聞の記事を集めた。

- 1) profil¹³⁾ : 1., Marc-Aurèle-Str.10-12 (Tel.534 700)
- 2) Wochenpresse¹⁴⁾ : 7., Seideng.11 (Tel.521-50)
- 3) Frankfurter Allgemeine Zeitung¹⁵⁾ : 1., Opernring 1. Stg.E(Tel.587 47 40)
- 4) Der Standard¹⁶⁾ : 1., Berresg.1 (Tel.531 700)
- 5) Kronen Zeitung¹⁷⁾ : 19., Ruzhg.2 (Tel.36 010)
- 6) Handelsblatt¹⁸⁾ : 16., Stierpl.7 (Tel.489 19 83)
- 7) Kurier¹⁹⁾ : 7., Seideng.3-11 (Tel.521 000)

profilは建築雑誌で、日経アーキテクチュアのような雑誌であり、建築関連の情報は豊富である。Wochenpresseは週刊経済情報誌である。残りの4つは新聞で、Frankfurter Allgemeine ZeitungとDer Standardはレベルの高い新聞で、Kronen ZeitungとHandelsblattは大衆紙である。

(15)法8121には、「特別建築」に関して以下のように定められている。

①特別建築は、建築物及び建築物の一部であるが、住宅、工業製品の製造・加工・修繕、飲食物の提供・販売、事務所・商業の業務、あるいは農業製品の製造を目的とした建築物ではなく、法8116～120の特別規制には該当せず、この法律によって特別に定められる規定に基づく建築に関しては例外的なものもある。

②法における規制が建築物の使用目的と一致しなかったり、その目的が好ましくない方法で侵害されるような場合には、特別建築に関する個々の規制はその限りでは継続される。しかしながら、この法律の中で正当化される公共的な権利と公共的な考慮は、害されるべきではない。

③特別建築の建築許可は、安全性の予備手段を厳守することは独立して与えることができる。
... (後略) ...

(16)法8132には、「官公庁：当事者及び関係者、Magistratの権限」が記されている。

①Magistratは、法に異なって定められていない限りは、官公庁の第一関係部局として法の執行が義務づけられる。

②全ての場合において、ある一定期間内有効である権利の要求や通常裁判への告訴は、当事者が法律上の手段の中でそれを行わなければならない。

【第2章 参考文献】

- #1 Dietmar Steiner, "Juristische Fakultät der Universität", (Österreichische Gesellschaft für Architektur im Auftrag des Magistrats der Stadt Wien WA19, "ARCHITEKTUR IN WIEN", Magistrat Stadt Wien, 1984, p.74)
- #2 Magistrat der Stadt Wien(Ernst Kurz): "DIE STÄDTEBAULICHE ENTWICKLUNG DER STADT WIEN IN BEZIEHUNG ZUM VERKEHR", Beiträge zur Stadtforschung, Stadtentwicklung und Stadtgestaltung Heft16, Wien, 1981
- #3 Horst Christoph: "Wilhelm, der Erbauer", profil, Nr.37, 11.Sept.1989, pp.92-96, Wien
- #4 Horst Christoph, Ruth Kybaski: "Baukaiser Wilhelm", profil, Nr.45, 8.Nov.1993, pp.96-97, Wien
- #5 "Moderner Bau statt Steyr-Haus-Ruine: Neuer Glaspalast am Ring", Kronen Zeitung, 16.Apr.1989, p.27, Wien
- #6 "Ring frei": profil, Nr.24, 14.Juni 1994, pp.52-55, Wien

#7 "Wiens tiefste Hochbaustelle für neues Steyr-Haus", Die Presse, 23.Jan.1991, p.8

#8 Christoph Edelmann: "Bald ein neues Gesicht für die Ringstrasse — Wien-EXTRA-Gespräch mit Wilhelm Holzbauer über das Steyrer-Haus", Kurier, 19.Okt.1990, p.3, Wien

#9 Peter Davy: "Complexes of Hollein", The Architectural Review, Nr.12, Dez. 1988, London pp.39-45

#10 "Architects Dialogue", Interview Hans Hollein of Charles Jencks, Architectural Design, April 1989, pp.72-82

#11 Hans Hollein: "Haas-Haus", GA Dokument, No.23, 1989, pp.34-37

#12 ハンス・ホライン, 「インタビュー：時代、文化の精神を建築デザインに統合（芸術としての建築に課せられるもの）」、日経アーキテクチュア、11月27日号、1989, pp.24-29

#13 「海外特殊報告：ウィーン、世紀末都市の選択」日経アーキテクチュア、3月18日号、1991, pp.148-181,185-211

#14 Hans Hollein, 川向正人訳「TRANSFORMATION, PLACE AND SPACE (変容、場所そして空間)」、a + u, No.256, 1992, pp.56-63

#15 Peter Eisenman, 丸山洋志訳、「Hollein's Cave(at): The Haas Haus (ホラインの洞窟/ハース・ハウスの警告)」、a + u, No.256, 1992, pp.122-127

#16 Magistrat der Stadt Wien, Magistratsabteilung 35, "WA 35-o.B./1-40/87, Baubewilligung: 1.Bez., Stock im Eisen Platz ÖMr.4, Grst.Nr.592, EZ 1256, Grst.Nr.1665 und 1709, EZ 1793, der Kat.Gew. Innere Stadt", WA35 Allgemeine baubehördliche Angelegenheiten, Wien, 4.Juni 1987

#17 Magistrat der Stadt Wien, Magistratsabteilung 35, "WA 35-o.B./1-113/87, 1.Bez., Stock im Eisen Platz ÖMr.4, Grst.Nr.592, EZ 1256, Grst.Nr.1665, 1709, EZ 1793, der Kat.Gew. Innere Stadt", WA35 Allgemeine baubehördliche Angelegenheiten, Wien, 16.Juni 1987

#18 Magistrat der Stadt Wien, Magistratsabteilung 35, "WA 35-o.B./1-160/90, 1., Stock im Eisen Platz ÖMr.4, Grst.Nr.592 in EZ 1256, der Kat.Gew. Innere Stadt", WA35 Allgemeine baubehördliche Angelegenheiten, Wien, 13.September 1990

#19 Horst Christoph: "Heikle Zone", profil, Nr.49, 02.Dez.1985, p.81, Wien

#20 Horst Christoph: "Glashaut und Steintapeten", profil, Nr.8, 23.Feb.1987, pp.62-63

#21 Alfred Wora: "Psychoterror", profil, Nr.14, 6.Apr.1987, pp.60-61, Wien

#22 Dr. Hannes Krasser, Arch. Dipl.-Ing. Verner Winterstein: "Hollein-Haus", profil, Wien Nr.15, 13.Apr.1987, Wien, pp.8-10

#23 Dietmar Steiner: "Die Lex Hollein", profil, Nr.27, 6.Juli 1987, Wien, p.53

#24 Horst Christoph: "Schöne Aussichten", profil, Nr.26, 25.Juni 1990, Wien, pp.76-77

#25 Horst Christoph: "Das einnasse Haas-Haus", profil, Nr.38, 17.Sep.1990, Wien, p.108

#26 Harald Nachförg: "Schau nicht, kauf", profil, Nr.47, 19.Nov.1990, Wien, pp.40-41

#27 Klaus Khittl: "Haas im Pfeffer", Wochenpresse, Nr.4, 21.Jan.1986, pp.42-43, Wien

#28 Klaus Khittl: "Gruss vom Schwinkel", Wochenpresse, Nr.8, 20.Feb.1987, pp.48-49, Wien

#29 Klaus Khittl: "Der Kampf um den Stephanplatz", Wochenpresse, Nr.24, 12.Juni 1987, pp.46-50, Wien

#30 Klaus Khittl: "Das Zu Spätwerk", Wochenpresse, Nr.9, 2.Mär.1990, pp.69-71, Wien

#31 Klaus Khittl: "Soll die City konserviert werden? — Haashaus, Heldenplatz, Kesselplatz — Dreimal das gleiche ist nicht dasselbe", Wochenpresse, Nr.35, 30.Aug.1990, p.55, Wien

#32 Christian S. Ortner: "Kontagewo vor dem Haas-Haus — Wie sonst bekommt man mentalen Ladenschluss und inneren Ständestaat?", Wochenpresse, Nr.42, 18.Okt.1990, pp.33-34, Wien

#33 Wilhelm Melzer: "Im anderen Wien — Zustand — kein Zustand — Zustandigkeit: Stadtplanung ist nun einmal so", Wochenpresse, Nr.9, 28.Feb.1991, pp.60-62, Wien

#34 Ulrich Weinzierl: "Das ungeliebte Haus", Frankfurter Allgemeine Zeitung, Nr.42, 19.Feb.1986, Wien

#35 Ulrich Weinzierl: "Turn gegen Dos", Frankfurter Allgemeine Zeitung, 06.Mär.1987, Wien

- #36 Michael Konninger: "Der Bauch von Wien". Frankfurter Allgemeine Zeitung, 18.Sep.1990, Wien
- #37 Georg Schöllhamer: "Opulente Theatralik der Fußgängerzonen". Der Standard, Wien, 3/4.Feb.1990
- #38 Friedrich Achleitner: "Sieben Vanderjahre und Buch". Der Standard, 4.Juli 1990, Wien
- #39 "Haas-Haus: Baukunst als Konsumenttheater". Der Standard, 30.Aug.1990, Wien
- #40 Georg Schöllhamer: "Schwere Haut am kaufmännischen Vereinshaus". Der Standard, 30.Aug.1990, Wien
- #41 Georg Schöllhamer: "Ein Weltstar in den Schächten der Provinz". Der Standard, 30.Aug.1990, Wien
- #42 "Wiener stürzten Zilk- und Haas-Haus". Der Standard, 17.Sep.1990, Wien
- #43 Johanna Ruzicka: "Marwor, Glas und Konsum". Der Standard, 25/26.Okt.1990, Wien
- #44 "Hans Hollein Bau am Stephansplatz wurde Haus, das keinen". Kronen Zeitung, 16.Sep.1990, Wien
- #45 Trappschuh Elke: "Hans Holleins Haas-Haus in der Wiener Innenstadt. Palast der schönen Illusionen.". Handelsblatt, Nr.183, 21.Sep.1990, p.30, Wien
- #46 Dietmar Steiner: "Neues Haas-Haus: Wenn er nur aufhören könnte — An diesem Wochenende wird Hans Holleins Meisterstück in der Inneren Stadt feierlich eröffnet". Kurier, 13.Sep.1990, p.13, Wien

第3章

街区ファサードのデザインエレメントの 場所及び時間による変動分析